

松本市文化財調査報告No.156

長野県松本市

NIIMURA

新村遺跡

—緊急発掘調査報告書—

2002.3

松本市教育委員会

長野県松本市

NIIMURA

新村遺跡

—緊急発掘調査報告書—

2002.3

松本市教育委員会

序

新村遺跡は松本市の西部、新村地区一帯に所在する遺跡です。本遺跡は以前から埋蔵文化財の包蔵地として知られていましたが、本格的な発掘調査を実施したことがなく、今回が初めての本調査となります。

このたび当地に松本大学の建設が計画されたため、松本市が学校法人松商学園から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成12年6月から同年10月にかけて行われました。梅雨時から暑い夏を過ぎ、秋口にかけての調査となりましたが、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、奈良時代から中世にかけての生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われまます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた学校法人松商学園の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例 言

- 1 本書は、平成12年6月1日から平成12年10月10日にわたり実施された松本市新村に所在する新村遺跡の緊急発掘報告書である。
- 2 本調査は、松本大学建設事業に伴う緊急発掘調査であり、学校法人松商学園より松本市に委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行なったものである。
- 3 本書の執筆は、以下のとおりである。

I：事務局 II-1：森 義直 IV-1・2、V-1 (1)：田多井用章 V-3：堀 久士
II-2・V-2：中村慎吾 III、V-1 (2)、VI：竹内靖長

- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄：百瀬二三子

遺物整理・復元：内澤紀代子、林 和子、洞沢文江

土器陶磁器実測・トレース・図版作成：窪田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、林 和子、松尾明恵

金属製品実測・トレース：洞沢文江、中村慎吾

石器実測・トレース：堀 久士、望月 映

遺構図整理・トレース：石合英子、窪田瑞恵

一覧表作成：石合英子、林 和子、塚原祐一、堀 久士

写真撮影（現場写真）：竹内靖長、澤柳秀利、田多井用章、米久保治郎、堀 久士、中村慎吾

（遺物写真）：宮嶋洋一（航空写真）：(株)みすず総合コンサルタント

編集：竹内靖長、田多井用章、堀 久士、中村慎吾

- 5 本書で使用した遺構の略称は以下のとおりである。

第●号竪穴住居址→●住 第●号掘立柱建物址→●建 第●号土坑→土● 第●号ピット→P●

- 6 図中で用いた方位記号は、すべて真北方向を指している。

- 7 本調査および報告書作成にあたり、以下の方々から御協力・御教示を得た。記して謝意を表する。

（五十音順、敬称略）市川隆之、笹本正治、野村一寿、原 明芳、福島紀子

- 8 遺構・遺物の記述で用いた古代・中世の時期区分や分類、用語などの多くは下記の文献に拠っている。

（財）長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内1－総論編』

- 9 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下のとおりである。

表記法 土色（混入物・量） 混入物質 a少量 b中量 c多量

土 色

1 褐色	2 暗褐色	3 黒褐色	4 明褐色	5 赤褐色	6 黄褐色	7 茶褐色	8 灰褐色
9 橙褐色	10 灰色	11 暗灰色	12 黒灰色	13 赤灰色	14 黄褐色	15 青灰色	16 黄色
17 暗黄褐色	18 暗茶褐色	19 黒色	20 焼土	21 砂	22 砂礫	23 緑灰色	24 淡灰色
25 暗灰褐色	26 淡灰褐色						

混入物

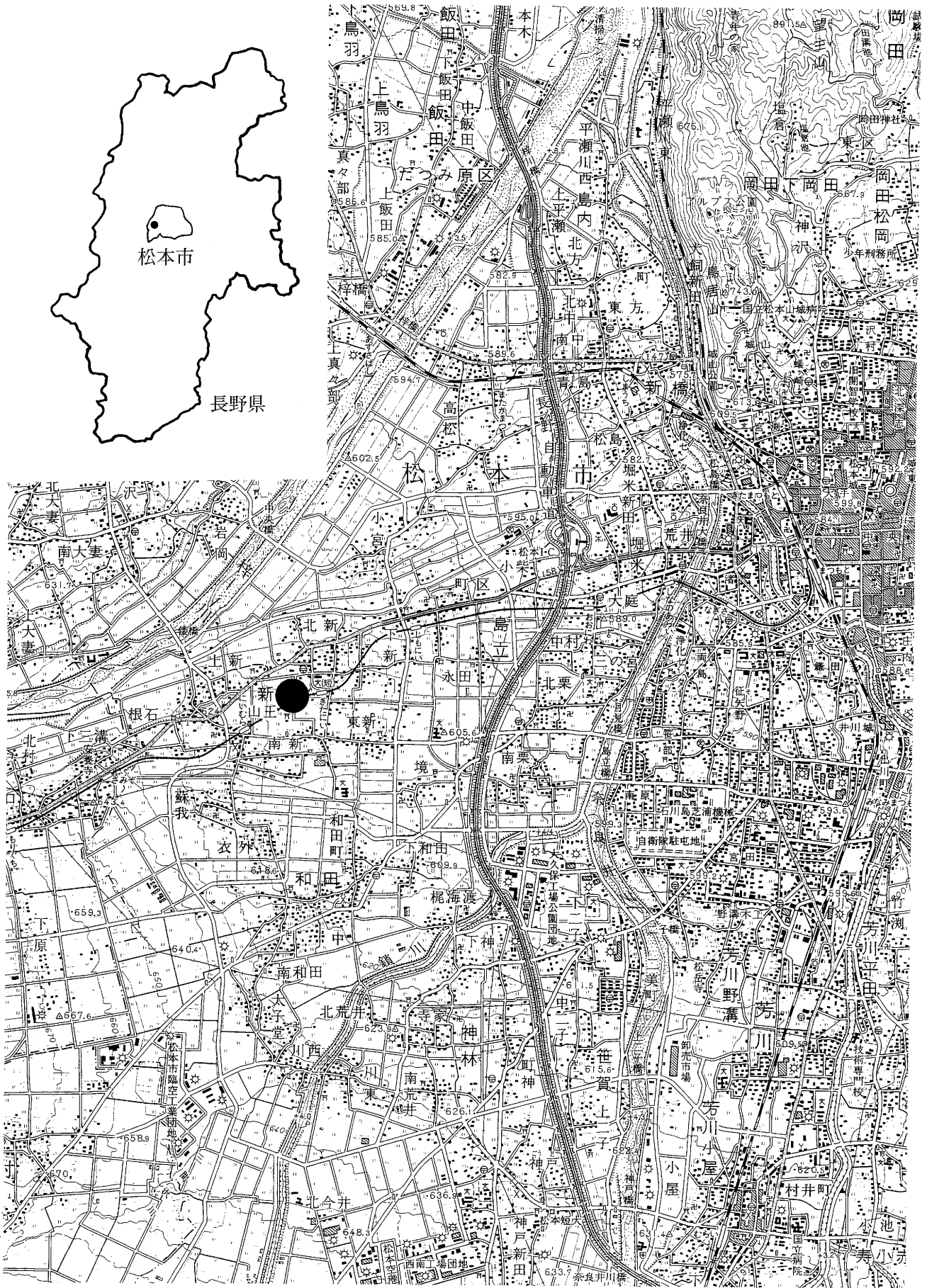
A 小礫	B 礫	C 焼土粒	D 焼土塊	E 炭化物粒	F 炭化物塊
G 炭化材	H 黄色土粒	I 黄褐色土粒	J 灰褐色土粒	K 茶褐色土粒	L 黄色土粒
M 黄褐色土塊	N 灰褐色土塊	O 茶褐色土塊	P 砂粒	Q 黒色土粒	R 黒色土塊
S 暗褐色土粒	T 暗褐色土塊	U 灰色土粒	V 灰色土塊	W 赤褐色土粒	X 赤褐色土塊
Y 鉄分	Z 灰褐色土塊				

- 10 本調査で得られた出土資料及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館

（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189）に収蔵されている。

目次

序	
例言	
目次	
I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
II 遺跡の環境	
1 地形地質	11
2 歴史的環境	13
III 調査の概要	15
IV 遺構	
1 奈良・平安時代の遺構	
(1) 住居址	16
(2) 掘立柱建物址	18
(3) 土坑	18
(4) ピット	18
(5) 溝	19
2 中世の遺構	
(1) 住居址	29
(2) 掘立柱建物址	29
(3) 柱穴列	30
(4) 竪穴状遺構	30
(5) 墓址	30
(6) 土坑・ピット	31
(7) 溝・方形区画	31
V 遺物	
1 土器・陶磁器	
(1) 平安時代の土器・陶器	56
(2) 中世の土器・陶磁器	67
2 金属器	75
3 石器・石製品	83
VI 調査のまとめ	86
図版	
報告書抄録	



第1図 遺跡の位置

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

松本市大字新村字東山王1953-1番地ほかの一带に、学校法人松商学園によって松本大学建設事業が計画された。事業地周辺には、古代～中世の複合遺跡として周知されていた新村遺跡のほか、安塚古墳群・秋葉原古墳群・秋葉原遺跡・新村条里遺構などの遺跡が隣接している。このうち秋葉原古墳群と安塚古墳群は、過去の発掘調査において古墳が発掘調査されている。今回、松本大学の建設予定地の一部が新村遺跡の範囲内にかかったため、まず試掘調査を実施して遺構・遺物の有無を確認した。試掘調査は、平成11年11月17日(月)～12月9日(木)、平成12年1月13日(木)～1月31日(月)にかけて行ない、用地内に58箇所のトレンチを掘削し、平安時代～中世の遺構・遺物が確認された。この結果、新村遺跡は、それまで周知されていた範囲より西側へ大きく広がっていることが判明し、大学建設予定地のほぼ全域が遺跡の範囲内にあたることとなった。試掘調査の結果を受け、学校法人松商学園との協議を行なった結果、平成12年度に発掘調査を実施して記録保存を図り、平成13年度に報告書作成を行なうこととなった。発掘調査および報告書の作成は、学校法人松商学園から松本市に委託を受け、松本市教育委員会が実施した。

2 調査体制

調査団長：竹淵公章（松本市教育長）

調査副団長：大澤一男（教育部長）

調査担当者：竹内靖長、澤柳秀利、田多井用章、米久保治郎、堀 久士、中村慎吾

調査員：森 義直、松尾明恵

協力者：浅輪敬二、荒木 稔、飯島由次、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、石川光男、今村 克、今井太成、臼井秀明、内澤紀代子、太田万喜子、大月八十喜、上條道代、神田栄次、菊池直哉、北野智之、久保田登子、窪田瑞恵、河野清司、小松正子、小山貴広、芝田とり子、清水陽子、下条ちか子、鈴木幸子、高橋昭雄、高橋登喜雄、竹内直美、竹平悦子、田中義一、鶴川 登、手塚富康、寺島 実、中島義明、中原あゆみ、中村恵子、中村美ゆき、中村安雄、中谷高志、林 和子、林 武佐、樋口高子、廣田早和子、福島 勝、藤井道明、布山 洋、洞沢文江、待井敏夫、丸山恵子、宮田美智子、村山牧枝、百瀬二三子、百瀬義友、山崎照友、横山 清、米山禎興、渡辺順子

事務局：松本市教育委員会教育部文化課

木下雅文（課長、～平成13年3月）、有賀一誠（課長、平成13年4月～）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（課長補佐）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（主任）、酒井まゆみ（嘱託、～平成12年6月）、渡邊陽子（嘱託、平成12年7月～）、塚原祐一（嘱託）

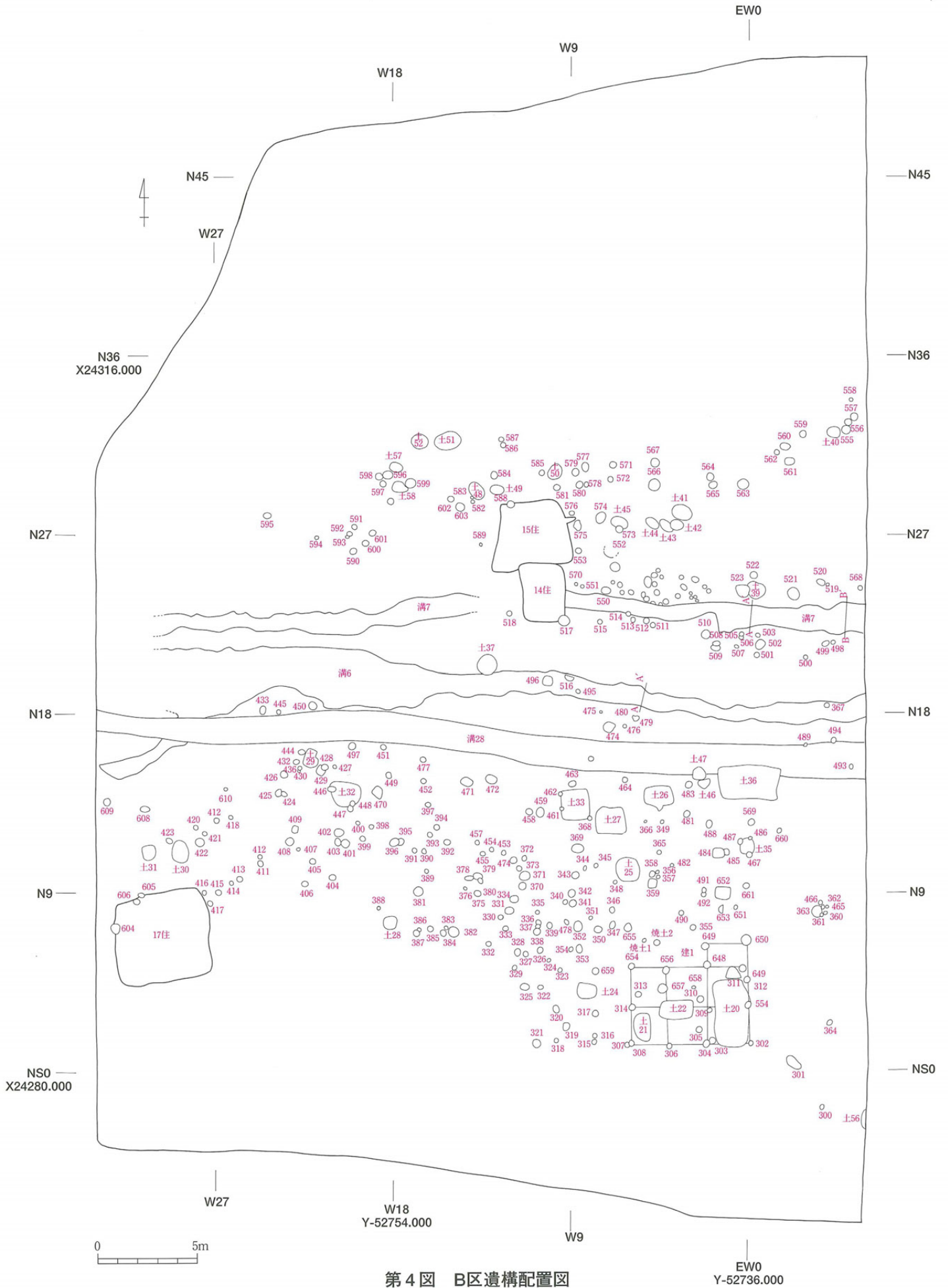


第2図 調査範囲

S=1/2500



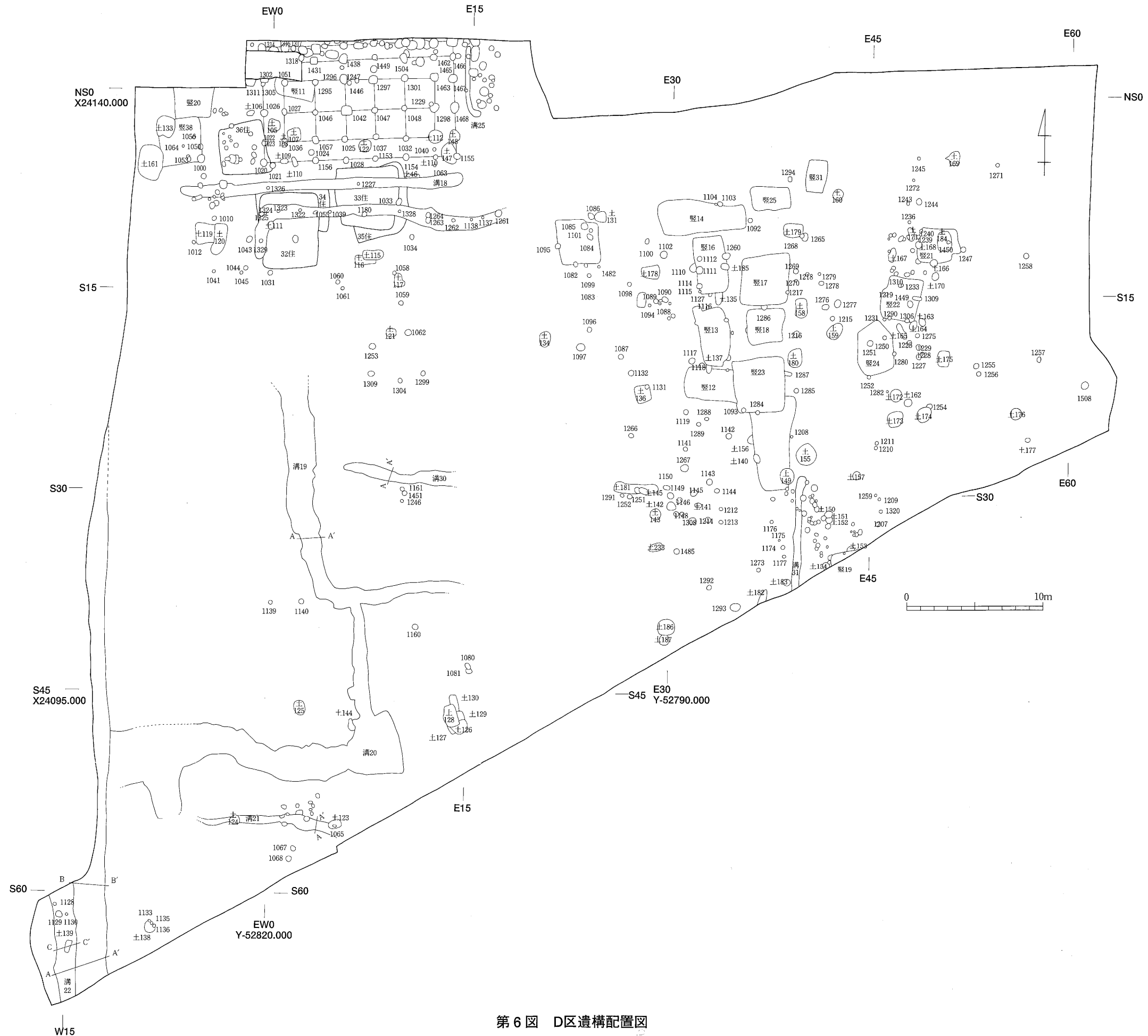
第3図 A区遺構配置図



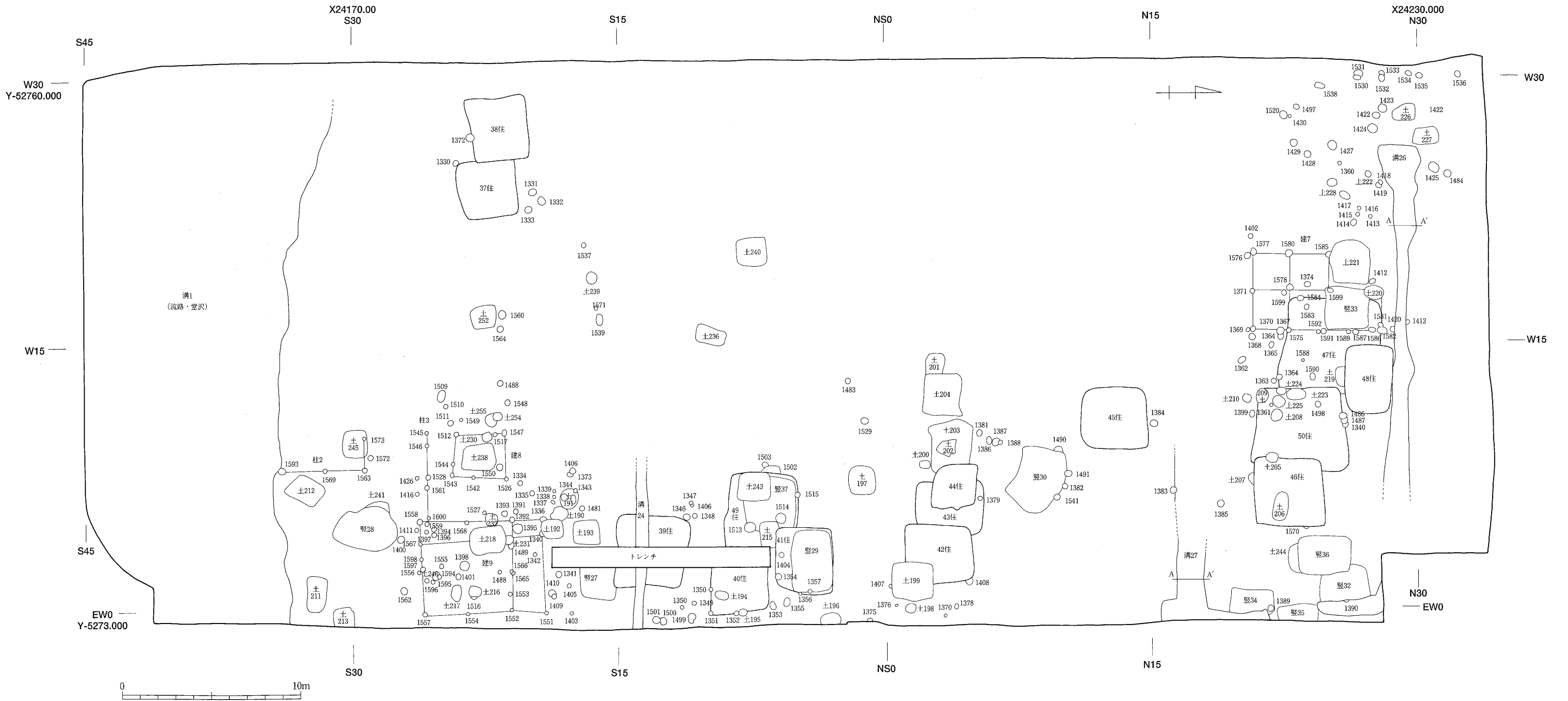
第4図 B区遺構配置図



第5图 C区遺構配置図



第6図 D区遺構配置図



第7図 E区遺構配置図

Ⅱ 遺跡の環境

1 地形・地質

遺跡の立地

本調査地は、南北に長い松本盆地の中央南寄りの右岸で、標高615m前後の段丘面上にあり、松本市新村の上高地線北新駅の西側で、松商学園短期大学に隣接している。梓川による広大な扇状地には、段丘面が左岸に3面、右岸に4面あり、本調査地は右岸の最下位面上にある。地表面は、旧流路により緩く東へ傾斜している。

周辺の地形・地質の概観

本遺跡のある松本盆地は、洪積世（更新世）中期に起きた造盆地運動によって形成された構造的盆地で、糸魚川—静岡構造線と平行に北へ伸びる東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東—西方向の断層により生じた南北に長い盆地である。西と南は飛騨山地の中・古生層と、それに貫入又は噴出した火成岩類よりなっている。東部と東北部では、2000m～1000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、新生代の第三紀層と、それに貫入・噴出した火成岩類よりなっている。

盆地の南半分を占める主な堆積物は、飛騨山地を開析し、南西方向から盆地に流入する梓川水系によって形成された広大な梓川扇状地と、盆地の南側から流入する鎖川・奈良井川・田川及び東部山地から流入する河川や沢などが合して、複合扇状地を形成している。盆地の北部は、西部山地を開析する河川や沢が盆地で高瀬川と合して南流し、南に開けた広大な高瀬川扇状地を形成している。更にこの扇状地に幾つかの河川や沢による扇状地が合して複合扇状地となっている。

本遺跡付近の地形・地質

本遺跡に直接関係のある梓川扇状地は、段丘面が左岸に3面あり最上位の第1面は上野面、第2面は丸田面、第3面は岩岡面となっている。このうち第1面のみロームが載っており、第3面は現氾濫原でもあり、歴史時代になってからも岩岡付近からしばしば豊科方面に氾濫している。

本遺跡のある右岸には、段丘面は4面あり、上位から順に第1面は波田面、第2面は森口面、第3面は上海渡面、第4面が押出面となっている。本遺跡は最下位の押出面にあり、現梓川の氾濫原でもある。歴史時代になってからも流路の首振りや洪水がしばしば起き、遺跡の北東約1.7kmには旧梓川の流路が「樽木川」として残っており、これらの段丘面は全体として東の方向に緩く傾斜している。

段丘面の第1面と第2面は、ロームが載っており、洪積統（更新統）で、第3面と第4面にはロームが無く、沖積統（完新統）である。ローム層の載る森口面とロームの載らない押出面との境は、波田町と新村との境界付近の標高620mの等高線にほぼ沿っている。

本遺跡の地形地質

梓川は左岸の岩岡面、右岸の押出面という広大な氾濫原があるため、歴史時代に入ってからでも洪水の度に流路が網の目のように変化したことが知られている。したがって、本遺跡の地山も梓川の流路となったときは灰白色の酸化されていない砂礫が堆積し、洪水による氾濫でも地表面を押し流してきたときは、ふるい分けの極めて悪い酸化された黄褐色の砂礫土が起伏をなして堆積している。そして、それらがサンドイッチ状に重なって地山の基本地形を造り、安定期にはそれらの堆積物や、近くにある上位段丘面のローム層から、雨水や小流により洗い流されてきた砂、シルト、粘土などの混成土が、凹部をレンズ状に埋めて、土層概念図に示すような地山を形成している。

この地山の上にも引き続き洗い出されてきたシルト質土が、年約1mmの割合で堆積しているはずであるが、開田時や、その後の近年の構造改善により、削られたり移動したりして、検出面（地山面付近）上に、構造

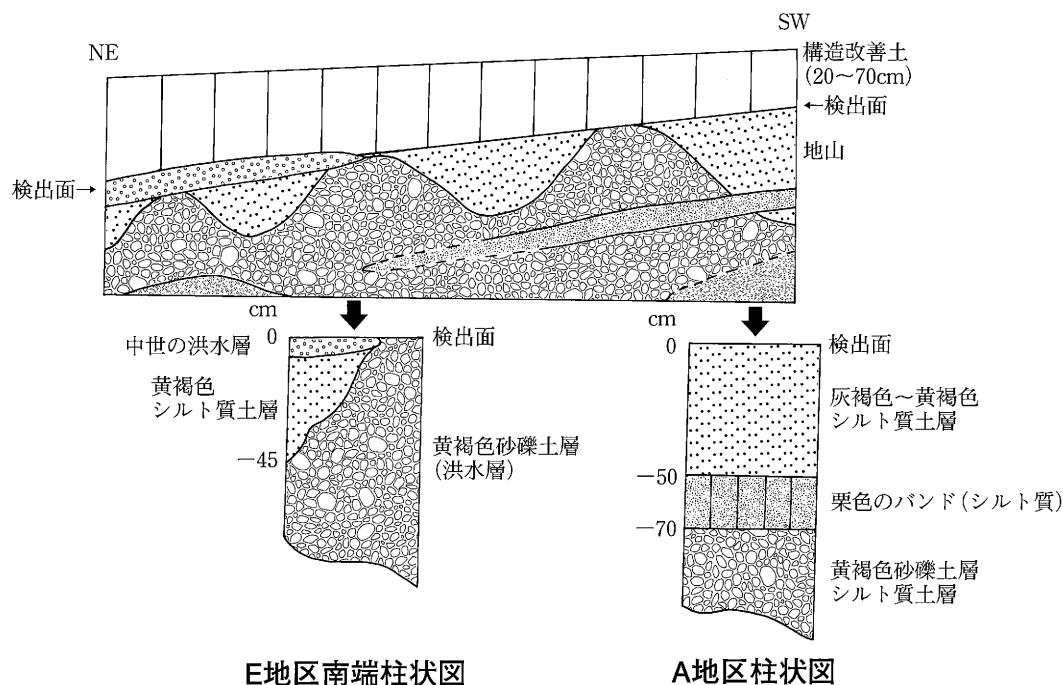
改善土が20～70cmが載っており、詳しい事はわからない。しかし、地山付近の遺構の残り具合から見て、大きな洪水の被害がなかったと推定されるが、発掘調査で一番低いC・E地区では、E地区の南東端の中世の川沿いに洪水層が15Cの住居址を覆っている。更にC地区の東にも洪水層が検出面上にあり、E地区の洪水と同時と推定されるが、正確なところは不明である。

微高地となっているA・B・D地区には、洪水の氾濫はなかったと推定されるが、上部は構造改善土であるので断定はできない。

まとめとして、この遺跡は11世紀頃～15世紀頃までは、ほぼ安定期であったと言える。

遺構検出面より下部については、A地区では検出面の下50～70cmの間に栗色のバンドがあり、また、B地区では、検出面の下52cm以下に黒褐色の沈澱層がみられることから、地山が形成される過程で一時期安定期があり、緑地や湿地あるいは農地の存在が窺える。

以上、この付近一帯は梓川の氾濫原であるため、流路の首振りや、洪水にもあそばれ、栄枯盛衰を繰り返してきたものとみられる。



挿図1 調査地土層概念図

2 歴史的環境

今回発掘調査を行なった新村遺跡の周辺に分布する遺跡を、過去に行なわれた調査等から時期的に概観してみたい。

縄文時代

当遺跡の東、島立地籍に南栗遺跡、北栗遺跡が位置する。南栗からは、平成11年に松本市教育委員会（以下市教委）が行なった調査で、中期の住居址1軒を確認している。また、南栗の久保川沿いからは、中期初頭、北栗の御乳神社周辺からは中期後半に属する土器が出土している。

弥生時代

東に南栗遺跡、北栗遺跡、その北に三の宮遺跡がみられる。南栗では、昭和58年と63年の市教委による調査では、遺構は伴わなかったが土器片が出土し、昭和60～61年にかけての調査では竪穴住居址1軒が出土している。三の宮からは、長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文）による調査で、堀川沿いから中期の竪穴住居址1軒が出土しており、また61年の市教委による調査では、弥生末～古墳初期に相当する住居址が11軒出土している。

古墳時代

南西に秋葉原古墳群、さらにその西に安塚古墳群が分布する。秋葉原は、昭和57年に市教委が古墳5基を調査しており、墳丘はすべて削平されていたが、そのうちの2基には横穴式石室が残存していた。安塚は、昭和53年に市教委が調査し、8世紀前半を中心とする古墳が11基発見された。これらはすべて墳丘を欠くが、1～3号墳では扁平花崗岩の石組みの石室、5～9号墳では横穴式石室が確認された。新村の東に位置する三の宮遺跡、北栗遺跡からもこの時期のものが出土している。三の宮では、市教委が昭和61～平成7年にかけて行った4回の調査で、古墳前・後期の竪穴住居址と掘立柱建物址等を確認している。その他未報告ではあるが、島立小学校の南東部からも古墳中期の竪穴住居址が出土している。北栗では、昭和60～61年にかけての県埋文の調査で、7世紀後半の住居址が確認されており、南栗神社の南からも工事中に須恵器の大甕三個が発見されている。

奈良～平安時代

南には芝沢遺跡、東には高綱遺跡（旧高綱中学校遺跡）、さらにその東に三の宮遺跡、北栗遺跡、南栗遺跡が分布している。芝沢遺跡は、平成11年の市教委による調査で初めてその存在が確認された遺跡で、奈良～平安の竪穴住居址・建物址などが確認された。高綱遺跡は、昭和59年の市教委による調査で、高綱中学校の敷地内から奈良末期～平安末期に属する遺物と竪穴状遺構・建物址が確認され、平成元、4年の調査では平安の住居址や溝などが確認された。三の宮遺跡では、まず昭和60年には堀川沿いを県埋文が、さらに昭和61～平成7年にかけて市教委が6回調査を行なっており、奈良～平安後期に属する竪穴住居址や建物址、溝状遺構、柵址などを確認している。北栗遺跡、南栗遺跡では、昭和58～平成12年にかけて市教委による6回の調査が行われ、県埋文でも昭和60～61年にかけて調査を行なっている。調査では、7世紀初頭～11世紀後半までの竪穴住居址や掘立柱建物址などの遺構を確認しており、特に昭和58年の南栗の調査では佐波理椀が出土している。また、栗林神社、乃木殿、北栗御乳神社の周辺からも土師器や須恵器が出土している。

中世

東の三の宮遺跡、南栗遺跡、北栗遺跡がみられる。三の宮遺跡では、県埋文による昭和60年の調査で、12～14世紀と思われる竪穴住居址や建物址、溝などが確認された。昭和61～平成7年に行なった市教委による4回の調査でも、建物址、土葬墓、火葬墓などが確認されており、61年の調査では、竪穴状遺構から小型の鋳銅製観音像が出土している。南栗遺跡・北栗遺跡では、昭和51～平成11年にかけて行った市教委による6回の調査で、竪穴住居址や竪穴状遺構、土坑、ピットが確認されており、60年の調査では、梵字入りの石製鉢が出土している。また、昭和60～61年に行なわれた県埋文の調査でも、12世紀後半～13世紀初頭に

属する建物址が確認されている。

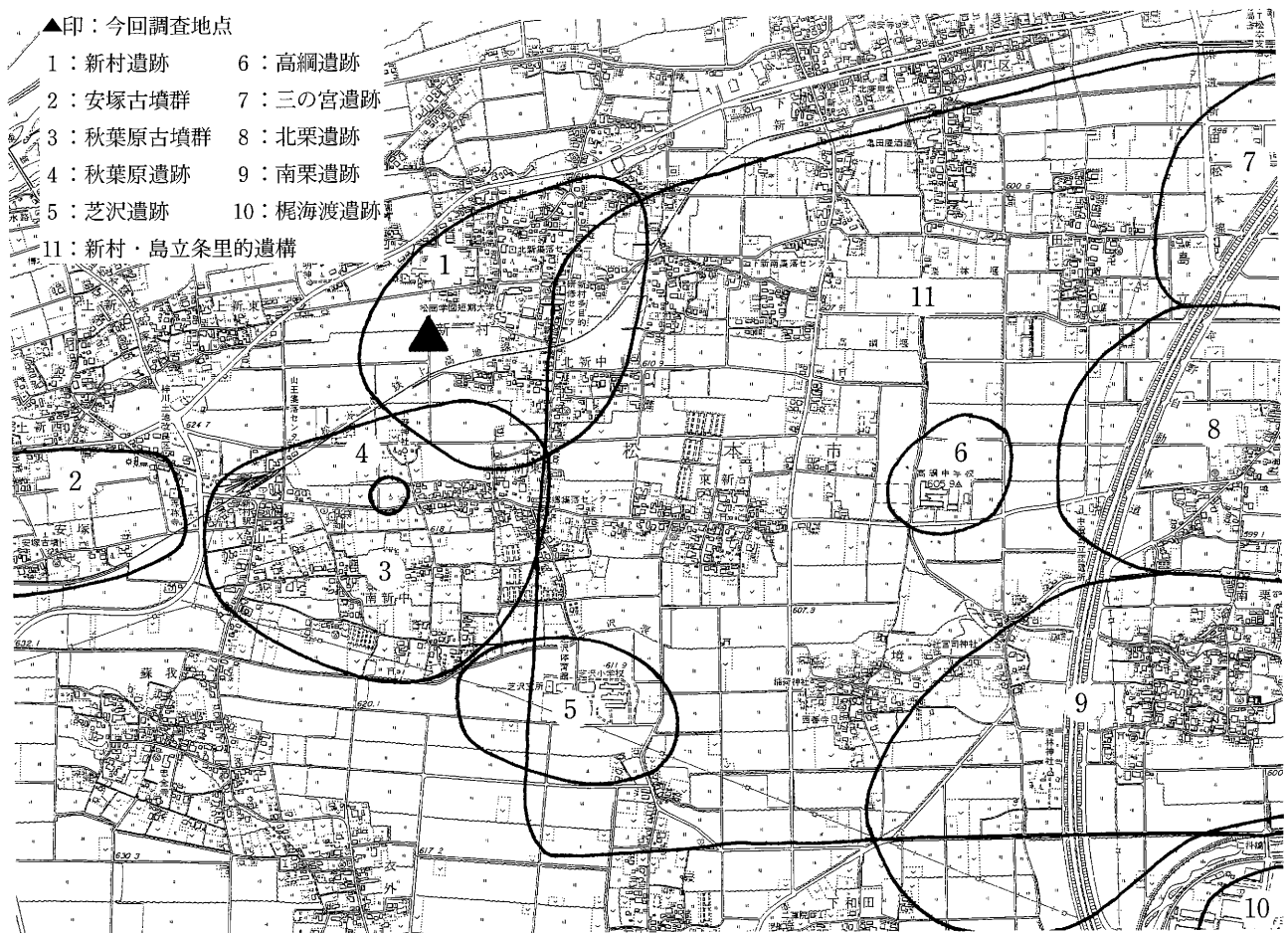
近世

南の三の宮遺跡において、昭和60年の県埋文による調査で、建物址や柵状遺構、溝、墓址等を確認している。市教委による調査では、昭和63～平成元年にかけての調査で神宮寺の礎石、柵列址等を確認し、平成7年の調査では、ピットとゴミ穴と考えられる土坑を確認している。

新村・島立条里的遺構

本遺跡を調査するに当たり注目すべきことに、新村・島立条里的遺構がある。島立条里にあたる範囲については、市教委による昭和59～62年にかけての6回の調査と、県埋文による中央自動車道長野線築造に伴う調査が行われている。この地域の開発は7世紀後半にはじまる。しかし、これはまだ条里的地割を意識してのものではない。条里的地割を意識した開発がはじまるのは、8世紀後半～9世紀後半からである。だが、この時期のものも、東西の河川は1町ごとに配してはいるが完全な直線ではなく、南北の境界線も地形にあわせた不定形なものであった。その後、この地割は10世紀代に一時荒廃するが、11世紀後半～12世紀前半には、かつての池溝を利用して再開発が行われた。そして、14世紀代になると、現在の地割に踏襲される条里的景觀が形成されたものと考えられる(註)1。

註)1 松本市 1996 『松本市史』第二巻 歴史編I 原始・古代・中世



第8図 周辺遺跡

Ⅲ 調査の概要

1 調査の方法

松本市西部の新村に所在する新村遺跡は、梓川の河岸段丘上の標高615mに立地している。調査前の状況は水田地帯で、東側は松商学園短期大学、南を松本電鉄島々線、北を住宅地で画され、西方に水田地帯が広がっていた。今回、松本市大字新村字東山王1953-1番地ほか一帯の55,885.45㎡に、松本大学建設事業が計画された。事業対象地内における遺構・遺物の有無および分布状況については、これまで全く不明であったため、松本市教育委員会では事前に試掘調査を行なった。試掘調査の結果、古代および中世の遺構・遺物が発見されたため、再協議の上、新村遺跡の発掘調査を実施することとなった。調査範囲は、試掘調査で遺構・遺物が確認された箇所を中心に、A・B・C・D・Eの5箇所の調査区を設定して実施した。各地区の調査面積は、A区：1098.8㎡、B区：2022.2㎡、C区：3605.6㎡、D区：3470.2㎡、E区：2459.2㎡で、合計12,656.0㎡を測る。各調査区全域を共通の3mのグリッドで覆い、遺構の測量を行なった。基準点は、大学建設工事のために設置した国家座標を用いている。各調査区の基準座標値（NS0, EW0）を示すと、A区（X=24156.000、Y=-52840.000）B区（X=24280.000、Y=-52736.000）C区（X=24254.000、Y=-52640.000）D区（X=24140.000、Y=-52820.000）E区（X=24200.000、Y=-52730.000）である。各遺構の測量図面は、基準座標を基本に1/20で作成した。

発掘調査の手順は、まず大形建設用機械を使用して遺構検出面までの耕作土と基盤土を除去した。次に、人力により遺構の検出作業を行い、遺構の範囲・位置を特定した。土色の相違が判然とせず平面的に範囲の特定が困難な箇所については、人力によるトレンチを設定し、土層断面の観察も併用して遺構の検出を行なった。遺構検出が終了し、特定ができたものから番号を1から付した。さらに、遺構の掘り下げを行い、覆土の観察や遺物・礫等の出土状態、住居址の形態、住居内の施設などの記録を、実測図および写真により行なった。最後に、ラジコンヘリコプターおよびセスナにより航空写真を撮影して、発掘調査の現場における作業の全工程を終了した。

2 調査成果

調査期間 平成12年6月1日から平成12年10月10日

調査面積 12,656.0㎡

検出遺構

竪穴住居址 48軒（平安時代29軒、中世19軒）

竪穴状遺構 37基（中世37基）

掘立柱建物址 9棟（平安時代1棟、中世8棟）

柱穴列 3棟（平安時代1、中世2）

土坑 232基

ピット 1551基

溝 31条

出土遺物

土器・陶磁器：土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、古瀬戸系陶器、内耳鍋、白磁、青磁、青白磁

鉄器・銅製品：刀子、釘、鉄鏃、^{ひうちがね}懸鉄、鉄鐸、不明鉄製品、鉄滓、不明銅製品、銭貨

石器・石製品：砥石、硯

Ⅳ 遺構

1. 平安時代の遺構

(1) 住居址

今回の調査で確認された平安時代の住居址は29軒を数える。これらの中には、掘り方が非常に浅かったり、遺物のごくわずかししか出土しない、あるいは全く出土しないものもある。遺構覆土が地山と近似していたため、検出作業が難しかったことを考え合わせると、これらは住居址として把握すべきものではなかった可能性もある。具体的には1～7・9・11～13・19・25・34～36・38住がこうしたものに該当する（16・18住は欠番）。これらは他の遺構との切合い関係や少量ながら出土した遺物の年代から平安時代として扱った。出土遺物から帰属時期がわかり、遺構の状況からある程度明確に住居址と判断しうるのは平安時代前期が20・21・22・30・31の5棟、平安時代後期が8・旧8・10・17・26・37・39の7棟である。ただし、平安時代前期のものはいずれもカマドを確認することができず、若干の問題点が残る。

<平安時代前期の住居址>

該期の住居址として、C区20・21・22・30・31住の5棟がある。出土土器から20住が5～6期、21住が5期、30住が6～7期に帰属する。22・31住は出土遺物の量が少なく、明確にはできないが9世紀代の範囲には収まるものとする。これら住居址はC区のみで確認され、その中でも西側にややまとまって分布している。平面形態は隅丸方形・隅丸長方形を呈するものが多く、規模は長辺で4m前後から6mを測る。いずれの住居址からもカマド・柱穴を確認することはできず、その構造を明らかにすることはできなかった。

第20号住居址

覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。地山の小礫の混じる暗褐色土を床とした。カマドは確認できなかった。床面でピットを2基確認したが柱穴は不明。遺物は床面付近から出土しているが量的には少ない。

第21号住居址

30住に切られるが、掘削時は切合いを誤認し、本来は30住に帰属すべき部分も一緒に掘削してしまった。覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。地山の小礫の混じる暗褐色土を床とした。カマドは確認できなかった。床面でピットを9基確認したが柱穴は判然としない。南西隅床面付近には焼土の分布が見られた。遺物は覆土中から散漫に出土し、量はそれほど多くない。

第22号住居址

26住に東側の大半を切られる。覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。小礫の混じる暗褐色土を床面としたが、貼床は認められない。カマド及び床面のピットは確認できなかった。遺物は覆土中から少量出土しており、明確な帰属時期は不明だが須恵器杯蓋B・杯A・Bがあり、9世紀代のものであろう。

第30号住居址

先述のように、当初は21住との切合い関係を誤認していたため、30住西側の部分を21住として掘削してしまった。整理作業段階で21住を30住が切ることが判明したため、掲載した平面図では想定したプランを点線で示してある。覆土は4層からなり、壁は斜めに立ち上がる。地山である小礫の混じる暗褐色土を床としたが貼床は認められない。カマドは確認できず、焼土等の分布も見られなかった。床面でピットを7基確認したが、柱穴は不明。遺物は床面付近を中心に出土しており、特に住居址北西部分からの出土が多かった。

第31号住居址

覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。地山である小礫の混じる暗褐色土を床面としたが、貼床は

認められない。カマド・床面のピットは確認できなかった。遺物は覆土中から少量出土しているのみで、帰属時期は明らかではないが底部糸切りの須恵器杯A・黒色土器A杯があり、9世紀代のものであろう。

<平安時代後期の住居址>

該期の住居址として、A区8・旧8・10住、B区17住、C区26住、E区37・39住の7棟がある。出土遺物から8・旧8住が11～12期、10・17・26住が12期に帰属する。該期の住居址はD区を除く全ての調査区で確認できたが、遺構密度は低く、個々の住居が散在する、あるいは2軒程度が近接して分布する状況を呈していた。

①11～12期の住居址

8・旧8住が該当する。8住は掘削の結果、床面が2枚あり、建替えが行われたものと判断されたため、古いほうを旧8住とした。両者の平面的な規模の大小はほとんどなく、基本的には旧8住を埋め、その上に8住が作られたものであろう。双方の出土遺物に明確な年代的な差異は認められない。

第旧8号住居址

旧8住は調査時に8住の床を除去して確認されたもので、規模はわずかに8住より小さいが、ほとんど違いはない。土層断面図のV・VI層が8住構築の際の埋土だが、V層は黄灰色土で地山の土と思われ明らかに人為的に埋められたものである。VI層は黒褐色土で炭化物・焼土を含み、カマド等を破壊した際の土層であろうか。IV層は5cm前後と浅く、VI層が存在せず旧8住床面上にV層が乗る部分も見られる。壁は8住の壁と共通で、垂直に近く立ち上がる。カマドは東壁中央よりやや北寄りに確認できたが破壊されており、構造は不明。火床はあまり赤化していない。北壁と南～西壁沿いに周溝が確認できた。床面でピットを3基確認したが柱穴は不明。遺物は床面から出土しており、建替えをされているわりには出土量は多い。

第8号住居址

8住は、旧8住を床面から10cm程度人為的に埋めて構築されている。覆土は4層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。床までの深さは50cmと残存状況は良好。床は堅緻であった。カマドは北東隅に設けられ、天井部を含め石組みが良好に残存していた。カマドは直径30～40cm前後の礫で袖の部分構築し、天井部に直径50cm以上の大型の礫を乗せている。石組みの周囲に粘土等は残存していなかった。カマドは焚き口付近が破壊され、内部の支脚石の上に土師器椀が2点重ねられており、その脇には土師器甕の大型の破片が置かれていた。カマド周辺の床面付近にはカマドを破壊した際のものと思われる礫が分布していた。火床及び奥壁は顕著に赤化していた。床面でピットを6基確認し、P₁～P₄は柱痕は確認できなかったが柱穴になるものと思われる。壁沿いにはほぼ全周に周溝が確認できた。遺物量は多く、カマド周辺及び床面からまとめて出土している。

②12期の住居址

10・17・26住の3棟が該当する。

第10号住居址

覆土は7層からなり、床までの深さは56cmで残存状況は良好。床は堅緻で、壁は垂直に近く立ち上がる。カマドは北東隅に確認されたが、廃絶時に破壊されており、煙道と火床及び袖石の抜取痕を確認したにとどまった。火床は顕著に赤化している。カマド周辺を除き、ほぼ全周で周溝が確認できた。床面でピットを1基確認し、位置的には柱穴であった可能性がある。遺物はカマド周辺を中心とした床面からまとめて出土している。

第17号住居址

覆土は2層からなり、覆土中には直径3～5cm程度の小礫を多く含む。覆土下層の床面より10cm程度高い位置で、廃棄されたとと思われる礫群の分布が確認された。壁は斜めに立ち上がる。小礫を多量に含む暗茶褐色土を床面としたが、貼床は認められない。カマドは北東隅に設けられていたが、廃絶時に破壊されたもの

か、火床面を確認したにとどまった。床面でピットは確認できなかった。遺物はカマド周辺から完形に近い土器がまとまって出土しているほか、床面を中心に出土している。

第26号住居址

覆土は3層からなり、覆土下層の床面付近には、カマド周辺を中心に礫群の分布が確認された。壁は垂直に近く立ち上がる。カマドは北東隅に設けられており、石組みで天井部を含め良好に残存していた。石組みは、径20～30cm程度の礫で袖を構築した後、天井部に50cm程度の扁平な礫を乗せる形で構築されている。石組みの周囲に粘土等が貼り付けられたような状況は観察できなかった。火床面及び奥壁は顕著に赤化していた。床面は、カマド手前から住居址中央部にかけて、暗灰褐色粘質土による堅緻な貼床が確認できた。床面でピットが5基確認できたが柱穴は判然としない。遺物は覆土中及び床面付近から出土しており、住居西半に多い傾向が窺えた。

③その他の住居址

第37号住居址

E区南西に位置する。遺構上面の大半を削平されており、床までの深さは10cm程度で残存状態は悪い。覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。地山の小礫の混じる暗茶褐色土を床とした。カマドは明確には確認できなかったが、住居址北東隅で床面にピットが確認でき、この周辺に礫の分布が見られたことから、これがカマドであった可能性もある。ただ、このピットの覆土中に焼土や炭化物は確認できなかった。遺物はごく少量出土したのみである。出土した遺物から平安時代後期に帰属すると思われる。

第39号住居址

E区西側に位置する。遺構上面の大半が削平されており、床までの深さは10cm程度と残存状態は悪い。覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。地山の小礫が混じる暗茶褐色土を床とした。カマドは確認できなかった。床面でピットを3基確認したものの柱穴は判然としない。遺物は覆土中から散漫に出土し、住居址北西部分からわずかに出土したのみである。出土した遺物から平安時代後期に帰属するものと思われる。

(2) 掘立柱建物址・柱穴列

建2・柱穴列1が該当する。建2は5間×2間の総柱式建物址。主軸はほぼ南北方向で、A区の他の竪穴住居址とそろっている。出土遺物は皆無で、明確な帰属時期は不明だが、区画溝の中に位置し、北側の住居址群と主軸がそろっていることから、これと同時期のものとする。柱穴列1は建2の西側に位置し、主軸が建2より若干西へ振っているが何らかの関連を有していた可能性が高い。

(3) 土坑

平安時代の遺物が出土した土坑・ピットは14基を数える。平安時代前期の遺物が出土したものとしてC区土91・92・95・97、平安時代後期の遺物が出土したものとしてA区土12・14・60、C区土79、明確な時期がわからないが平安時代の範囲に収まるとされるものにC区土96、E区土203・209・212がある。また、A区では、時期のわかる範囲においては平安時代後期の遺構が主体となり、出土遺物もこの時期のものが主体であることから、A区の土坑の多くはこの時期に帰属するものと考えられよう。

(4) ピット

直径が50cm程度以下の穴をピットとした。平安時代の遺物が出土したピットは19基を数える。このうち平安時代前期の遺物が出土したものとしてA区P109・234、B区P628、C区P940・981、平安時代後期の遺物が出土したものとしてA区P282、B区P659・668、C区P826・929・988、明確な時期がわからないが

平安時代の範囲に収まると思われるものにA区P3、B区P608・655、C区P810・870・880・957・963がある。土坑同様A区のピットの多くは平安時代後期に帰属するものと考えられよう。

(5) 溝

出土遺物等から平安時代に帰属すると思われる溝はA区溝2・3・5・8・9・10、D区溝16の7条である。

A区溝2・5は、平安時代後期の住居址・建物址を取り囲んでおり、方形の区画を構成する区画溝であると思われる。基本的には溝2が住居址・建物址の周囲を巡り、溝5が溝2から分岐して住居址群と建物址の間を区画している。溝2は南側を旧堂沢に切られる。旧堂沢の南側に位置する溝10が溝2の続きである可能性があるが、溝10は出土遺物が少なく、溝2との同時性は明らかではない。覆土からは流水・滞水の痕跡は窺えない。溝2は土層断面の観察から、4段階の埋没過程を見て取ることができる。第16図土層断面図E-E'で見ると、古いほうから、Ⅳ→Ⅲ→Ⅱ→Ⅰの順であり、平面的にもⅠ層に対応する溝のプランをとらえることができ、調査時は基本的にⅠ層、すなわち溝の最終段階のプランを平面的に掘削した。溝の断面形状は、最終段階では皿状を呈するが、溝構築時には北側部分はU字状を呈していたものと思われる。溝の深さは最終段階では10～20cm程度だが、溝構築時には北側は60cm程度である。最終段階での溝の幅は、溝5との分岐点から北側が1.5～2m前後、分岐点から南側が0.5～1m前後である。遺物は少量出土しており、北側では底面付近に投棄されたとされる礫群が直径1～2m程度の範囲で分布している状況が3箇所を確認できた。出土遺物から平安時代後期に帰属する。溝5は溝2から分岐し、住居址群と建物址の間を区画している。覆土は3層からなり、流水・滞水の痕跡は確認されない。溝2のように、数段階にわたる埋没の過程は明確にはとらえられない。断面形状はV字状を呈し、底面までの深さは40cm程度、幅は0.5～1m程度である。覆土中からの遺物の出土量はわずかだが、平安時代後期に帰属させることができる。

A区のおおのほの溝では、溝3・8が溝2とほぼ平行する位置にある。溝9と溝3と本来は同一のもので、溝2に切られている。したがって、溝3・8・9は溝2の構築時に存在し、何らかの影響を与えた可能性は指摘できる。

D区溝16は23住の西側に確認されたが、東西にどのように延びるのか明確に把握することができなかった。覆土は灰褐色土からなり、流路性の堆積を確認することはできなかった。底面付近から平安時代前期の遺物が少量ながらまとまって出土しており、この時期のものであろう。

第1表 竪穴住居跡一覧

No.	区	平面形	規模 (cm)					カマド形態 種類・位置	時期	備考
			長軸	短軸	深さ	床面積 (㎡)	主軸方向			
1	A	不明	388	(332)	11	(11.7)	N-0°	不明		2・3住を切る 10住に切られる 区域外にかかる
2	A	隅丸方形	340	312	10	(9.3)	N-0°	なし		3・4・5住を切る 1住、P228・286に切られる
3	A	不明	516	(212)	9	(6.9)	N-3° -W	不明		5住を切る 1・2住、P286に切られる
4	A	長方形	360	328	7	(9.9)	N-0°	不明		5・6住を切る 2住、P224・238に切られる
5	A	不明	496	(272)	10	(9.8)	N-4° -E	不明		2・3・4・6住、P230・231・281・282・296に切られる
6	A	不明	(376)	328	4	(9.8)	N-6° -E	不明		5住を切る 4・7住、P222・223に切られる
7	A	方形	480	456	7	18.8	N-4° -E	不明	11～12期	6住、土15・61を切る 8住、P280に切られる
8	A	隅丸方形	368	352	50	7.9	N-94° -E	東壁北隅石組	11～12期	7・旧8住、土61を切る
旧8	A	隅丸方形	368	336	59	9.4	N-90° -E	東壁中央石組か?	11～12期	土61を切る 8住に切られる
9	A	不明	326	(264)	33	(7.2)	N-2° -E	不明		土17を切る 溝2に切られる
10	A	不明	384	(252)	56	(7.0)	N-90° -E	東壁北寄石組	12期	1住を切る 区域外にかかる
11	A	隅丸長方形	404	356	10	(12.6)	N-0°	なし		12住、溝4、土59、P295を切る 13住、土19・54・55、P193・195・293・294に切られる
12	A	不明	292	(156)	5	(3.7)	N-0°	不明		土34、P196を切る 11住、建2、土19、P195に切られる
13	A	隅丸長方形	348	256	15	8.0	N-0°	なし		11住を切る 土19・54・55、P293に切られる
16										欠番
17	B	隅丸長方形	484	452	32	16.4	N-8° -W	東壁	12期	P604・605・606に切られる
18										欠番
19	C	隅丸長方形	392	380	22	12.4	N-1° -E	なし		P661に切られる
20	C	隅丸長方形	384	352	30	11.8	N-90° -W	不明	5～6期	土71、P668を切る P665・666・757に切られる 区域外にかかる
21	C	長方形	600	432	24	24.9	N-4° -E	なし	5期	30住を切る 土63、P679・680・682・684・685・686・974・975に切られる
22	C	不明	532	(184)	46	(8.8)	N-14° -E	不明	平安前期	26住に切られる
26	C	長方形	572	466	47	18.6	N-5° -E	東壁	12期	22住を切る
28	C	不明	284	(108)	24	(2.4)	N-5° -W	不明	平安前期	29住、P858に切られる 区域外にかかる
30	C	隅丸長方形	540	460	40	(20.6)	N-4° -E	不明	6～7期	21住、溝11、土63・70、P687・698・699に切られる
31	C	長方形	476	400	28	17.0	N-3° -E	なし	平安前期	P681に切られる
34	D	不明	(544)	(320)	12	(3.3)	不明			溝17・18に切られる
35	D	隅丸方形	512	(444)	14	(21.4)	N-16° -W			33住、P1033、溝17・18に切られる
36	D	隅丸長方形	404	352	12	12.2	N-6° -W			土103・104、P1014・1015・1016・1017・1018・1019・1020・1021・1022・1023・1030・1035・1038・1105・1106・1107・1109に切られる
37	E	隅丸方形	336	324	8	9.7	N-6° -W		平安後期	38住に切られる
38	E	隅丸方形	360	340	6	10.6	N-4° -W			37住を切る
39	E	隅丸長方形	412	388	12	14.4	N-4° -E		平安後期	竪27を切る 溝24・トレンチに切られる

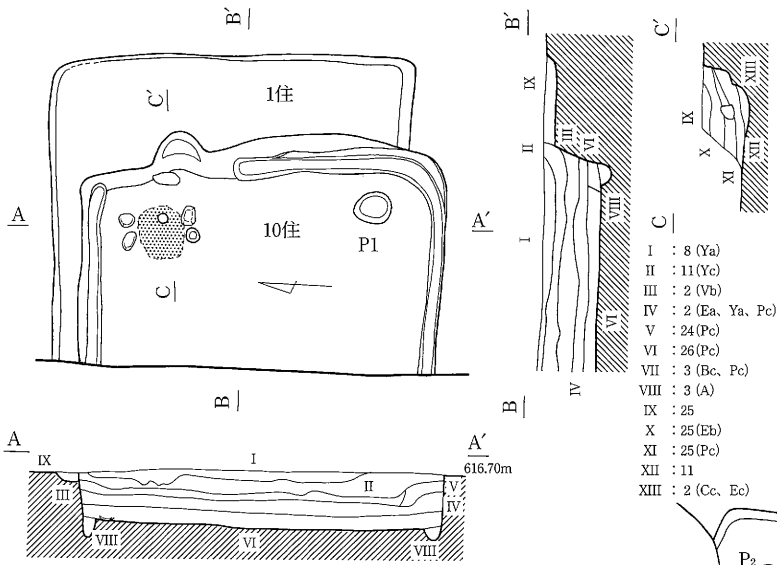
第2表 平安時代の建物跡一覧

No.	区	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱 痕	
2	A	長方形 総柱式	N-5° -E 34.3	5間×2間 581×373	桁行 176～216 (188) 梁間 164～204 (185)	円形	径 28～108 深 15～48		土坑を含む

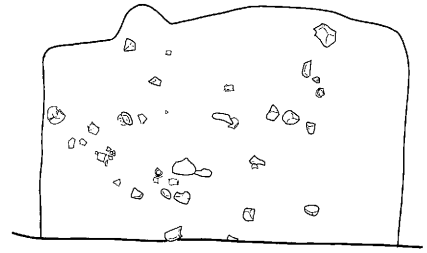
第3表 平安時代の柱穴一覧

No.	区	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱 痕	
1	A		N-2° -E	2間 388	172～208	円形	径 28～44 深 19～36		

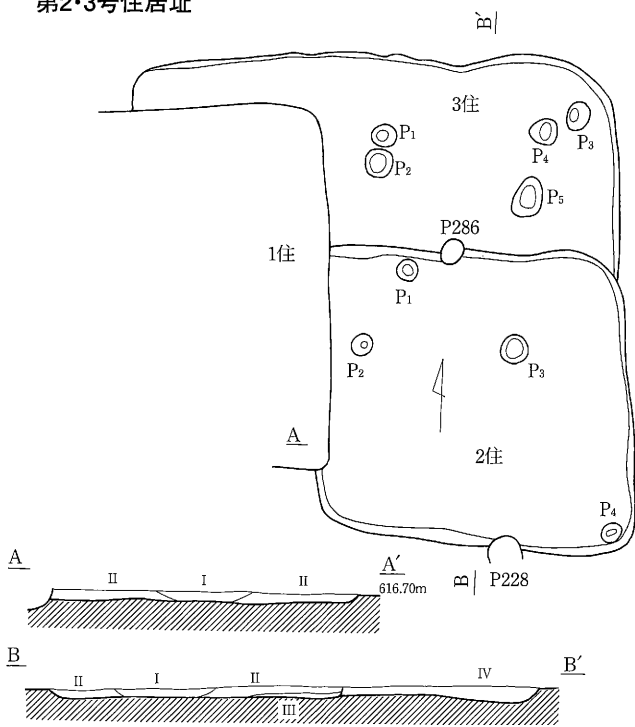
第1・10号住居址



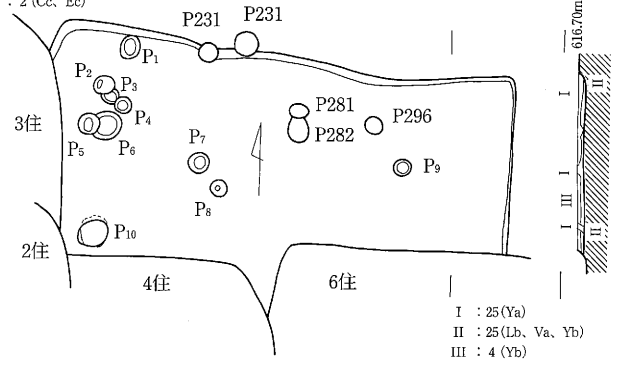
10住遺物出土状況



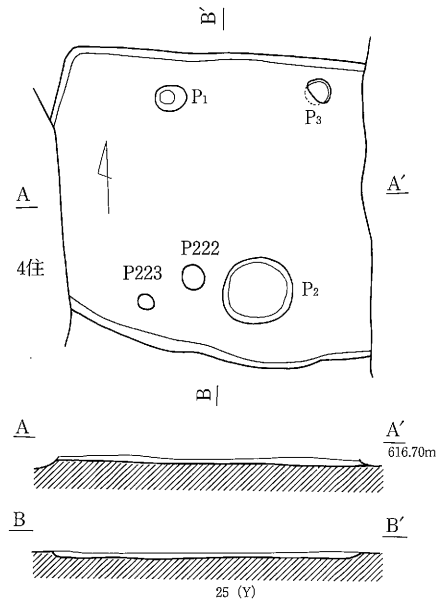
第2・3号住居址



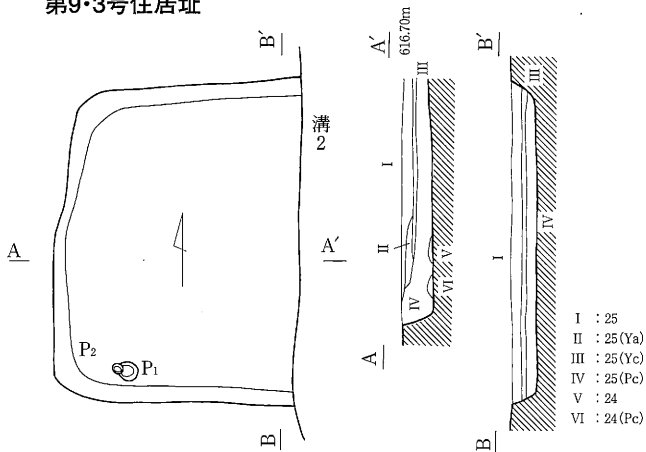
第5号住居址



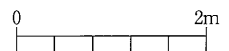
第5号住居址



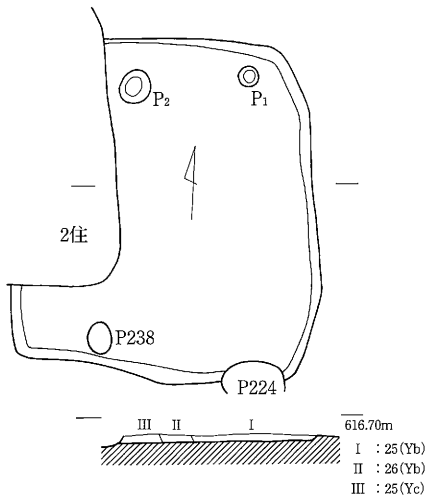
第9・3号住居址



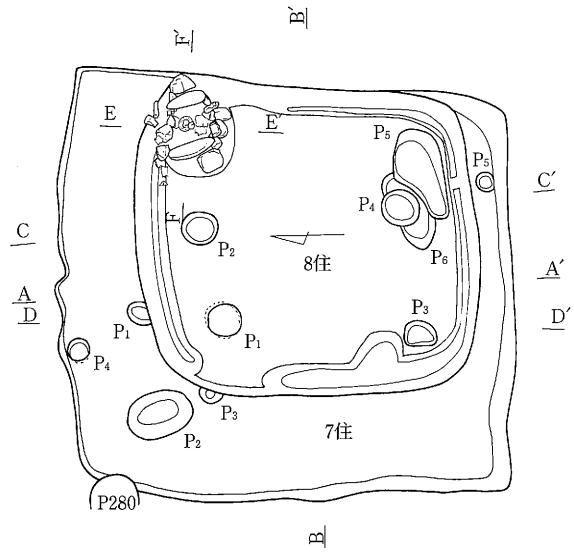
第9図 奈良・平安時代の遺構(1)



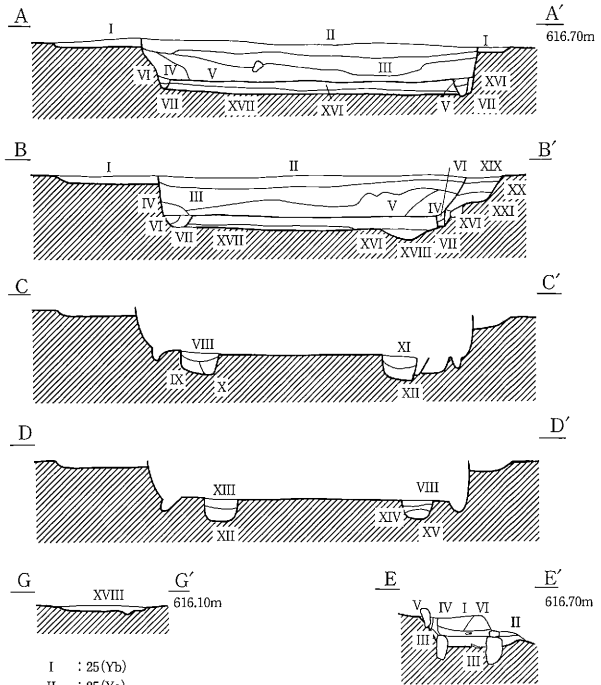
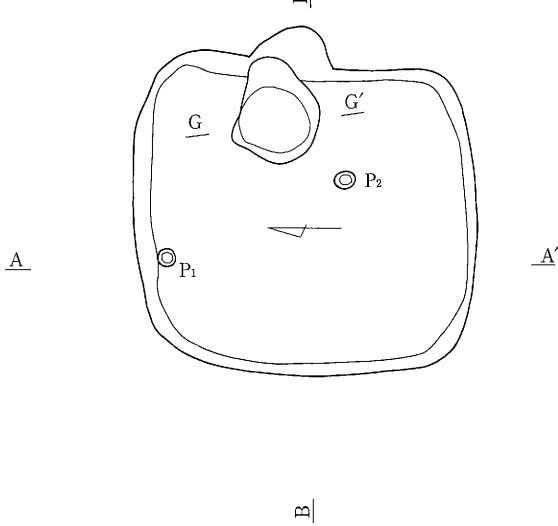
第4号住居址



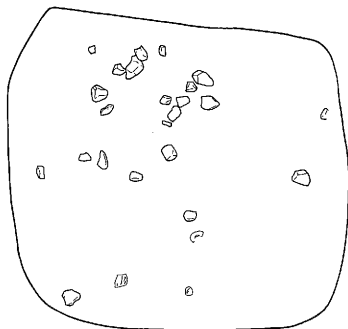
第7・8号住居址



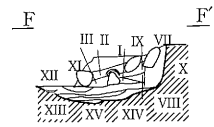
第旧8号住居址



旧8住遺物出土状況



- I : 25(Yb)
- II : 25(Ya)
- III : 25(Yc)
- IV : 10(Pc)
- V : 25(Eb, Yb, Pc)
- VI : 3(Uc)
- VII : 3(Ua)
- VIII : 8
- IX : 8(Yc)
- X : 8(Yc, Pc)
- XI : 24(Cb, Eb)
- XII : 3(Uc)
- XIII : 24
- XIV : 3(Nc)
- XV : 3(Nb)
- XVI : 14(Pc)
- XVII : 3(Cb, Eb, Hb)
- XVIII : 25(Ec, Hc, Uc)
- XIX : 25
- XX : 25(C, E, Y)
- XXI : 25(Yc)

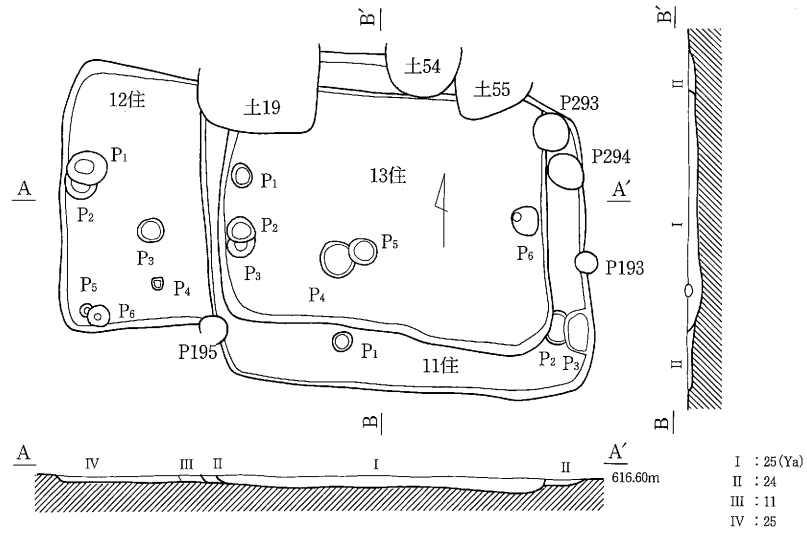


- 8住カマド土層
- I : 25(C, D, E, F, V)
 - II : 25(C, D, Eb)
 - III : 25(Ca)
 - IV : 2
 - V : 11
 - VI : 25(Ub)
 - VII : 25(Yb)
 - VIII : 25(Uc)
 - IX : 25(C, F, Ub)
 - X : 24
 - XI : 24(U)
 - XII : 2(Cc, Ec, Fc)
 - XIII : 24(Cc, Ec, Fc)
 - XIV : 24(Eb, Fb)
 - XV : 2(C)

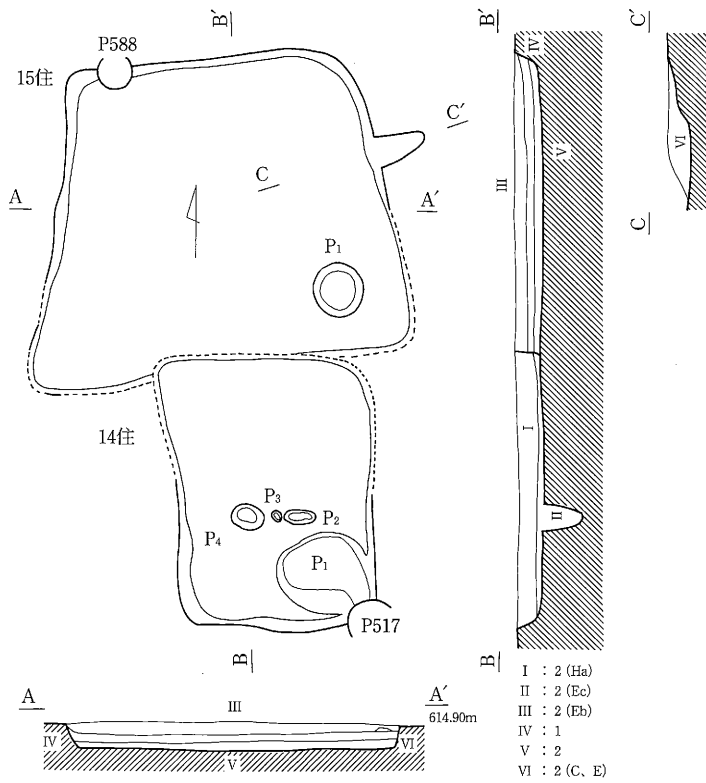


第10図 奈良・平安時代の遺構(2)

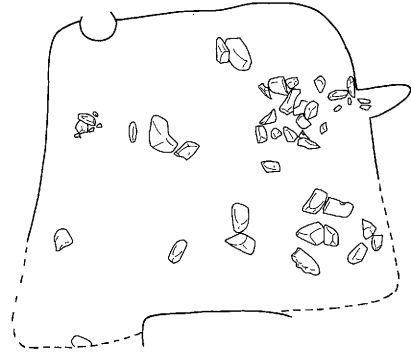
第11・12・13号住居址



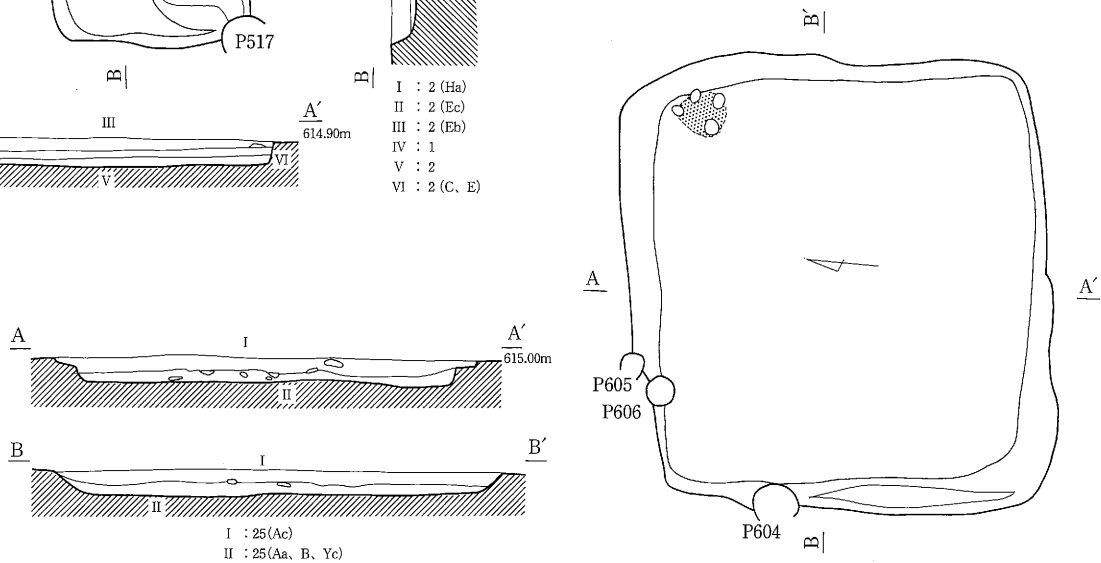
第14・15号住居址



15住遺物出土状況

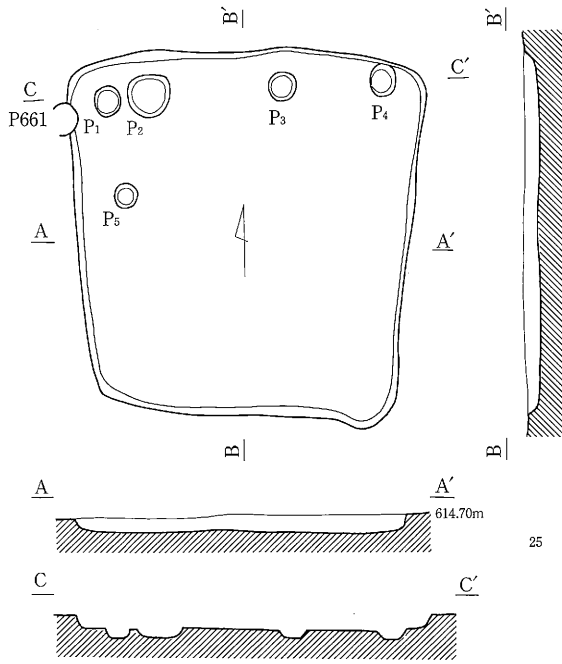


第17号住居址

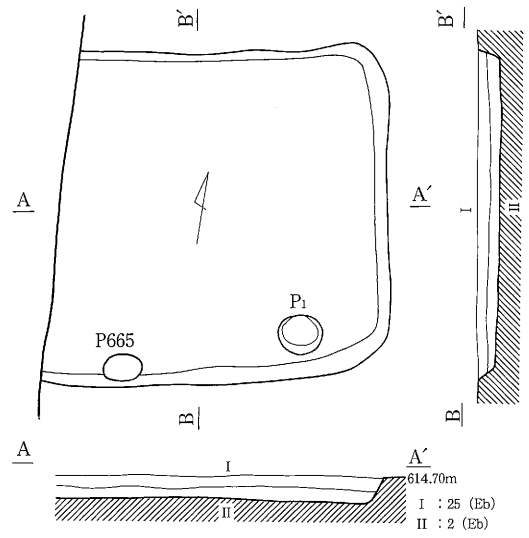


第11図 奈良・平安時代の遺構 (3)

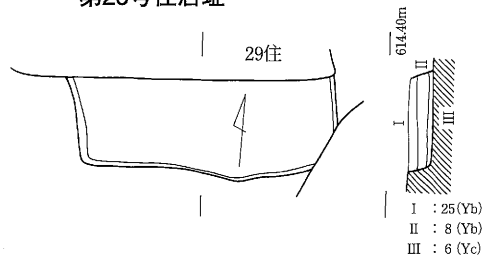
第19号住居址



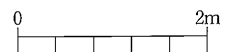
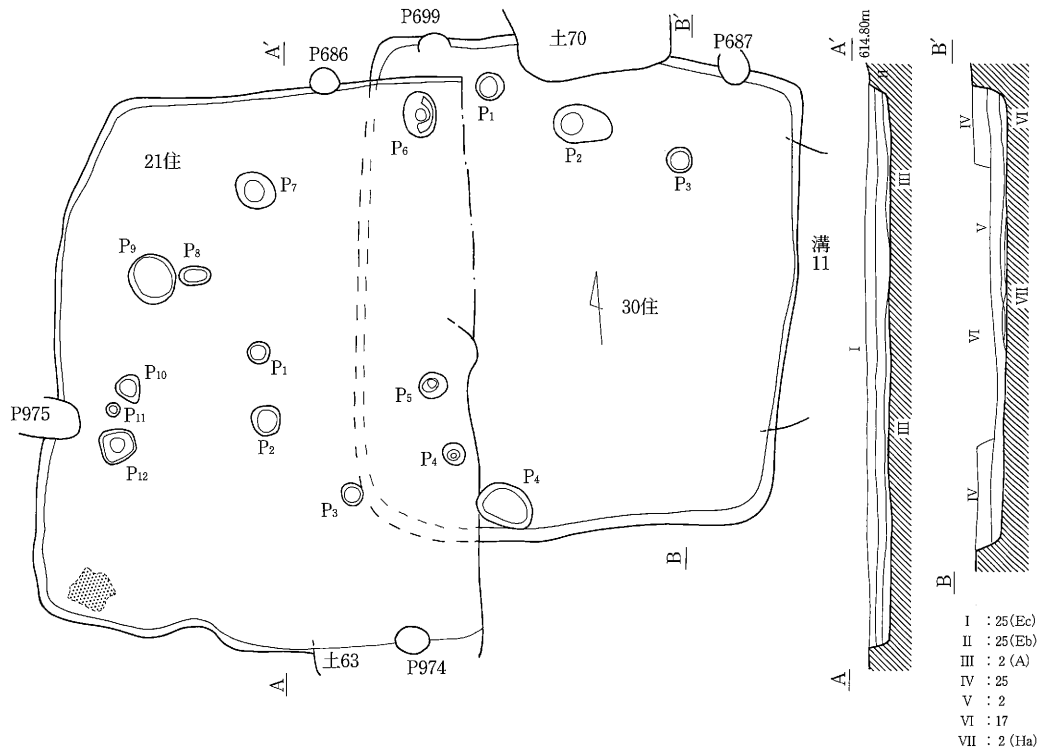
第20号住居址



第28号住居址

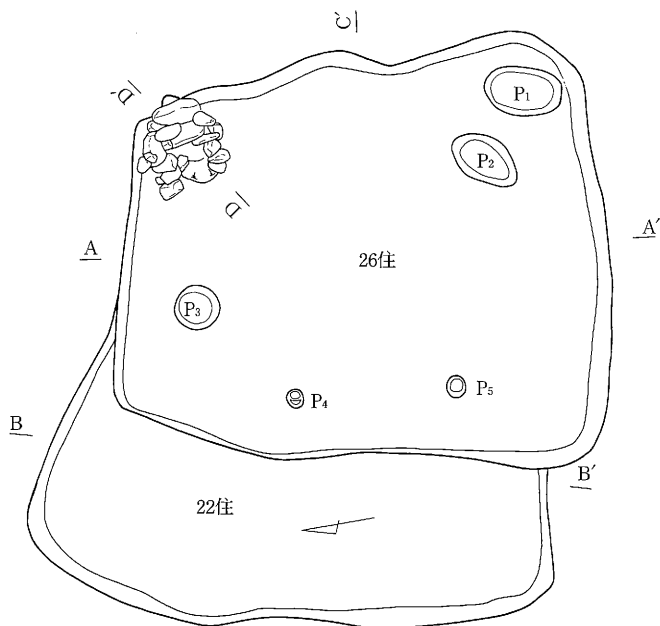


第21・30号住居址

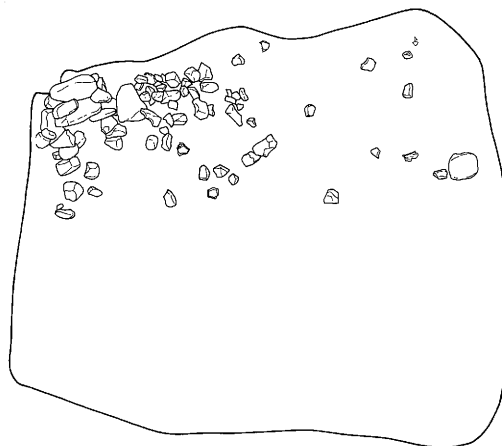


第12図 奈良・平安時代の遺構 (4)

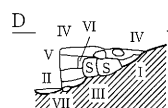
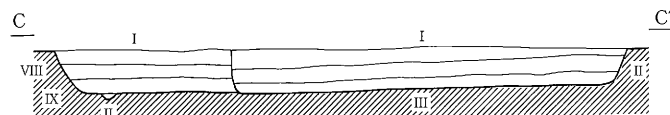
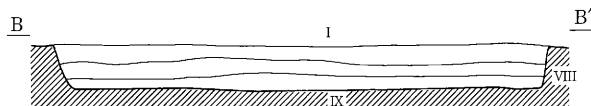
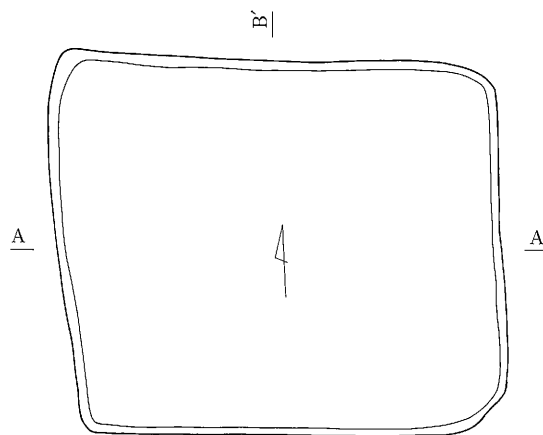
第22・26号住居址



26住遺物出土状況

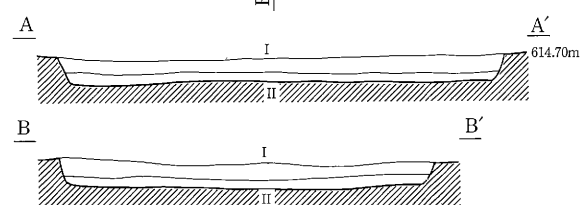
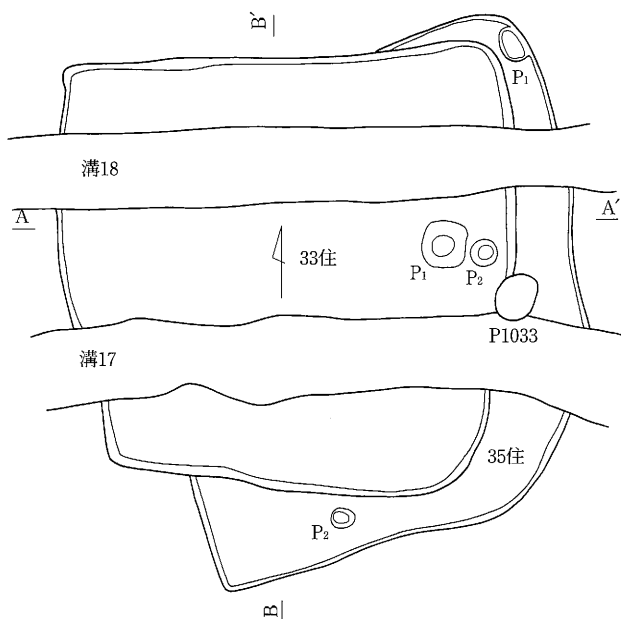


第31号住居址

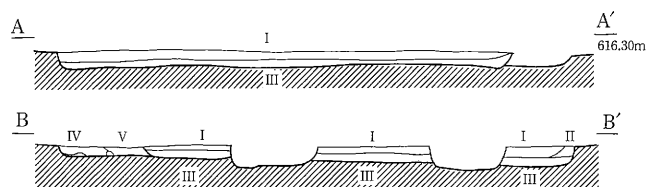


- I : 25
- II : 2
- III : 2 (Ab)
- IV : 8
- V : 25 (Ua)
- VI : 25 (Ub)
- VII : 20
- VIII : 2 (Uc)
- IX : 2 (Ua)

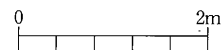
第33・35号住居址



- I : 25
- II : 2 (A)

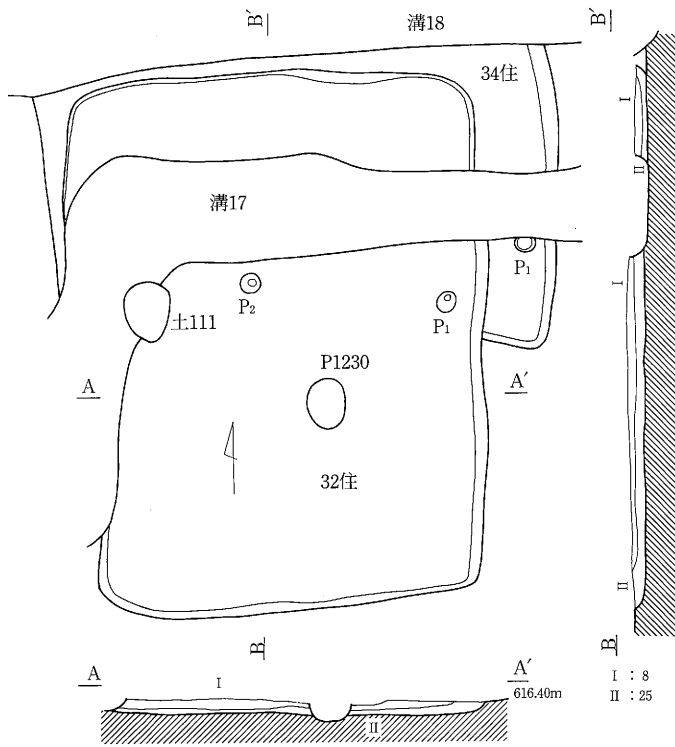


- I : 25 (Yc)
- II : 10
- III : 3
- IV : 25 (A)
- V : 25 (Yb)

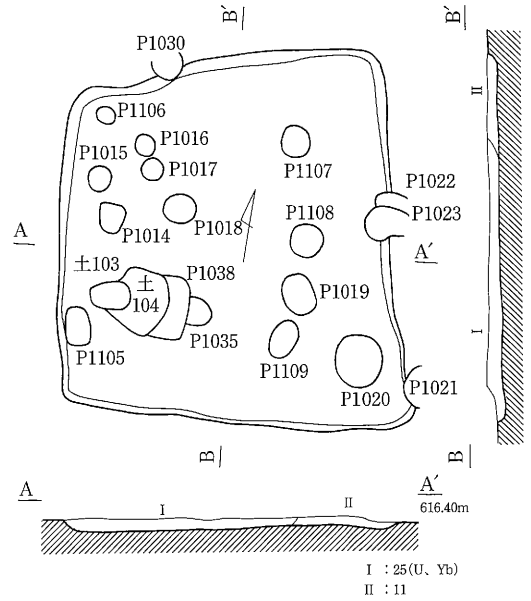


第13図 奈良・平安時代の遺構(5)

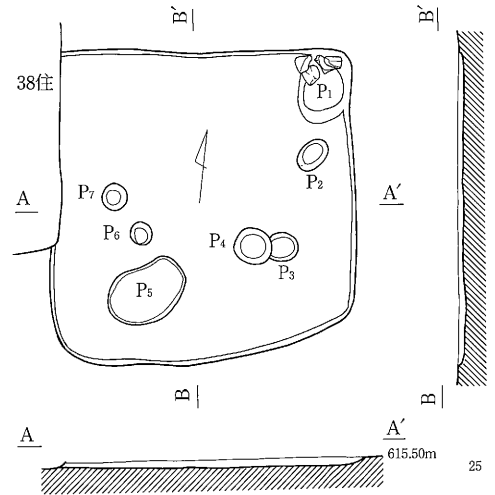
第32・34号住居址



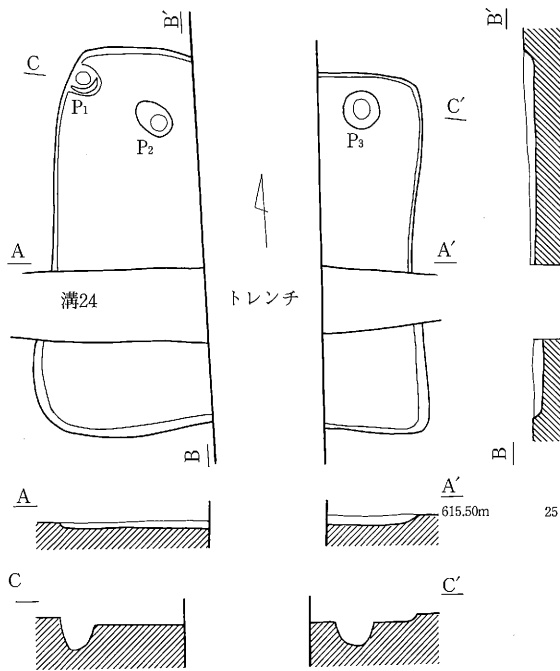
第36号住居址



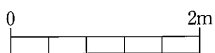
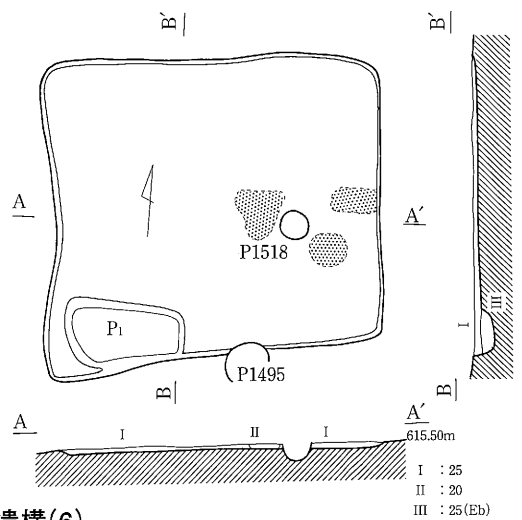
第37号住居址



第39号住居址

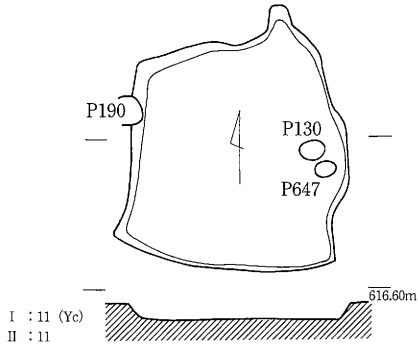


第38号住居址

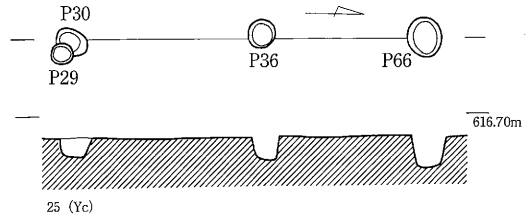


第14図 奈良・平安時代の遺構(6)

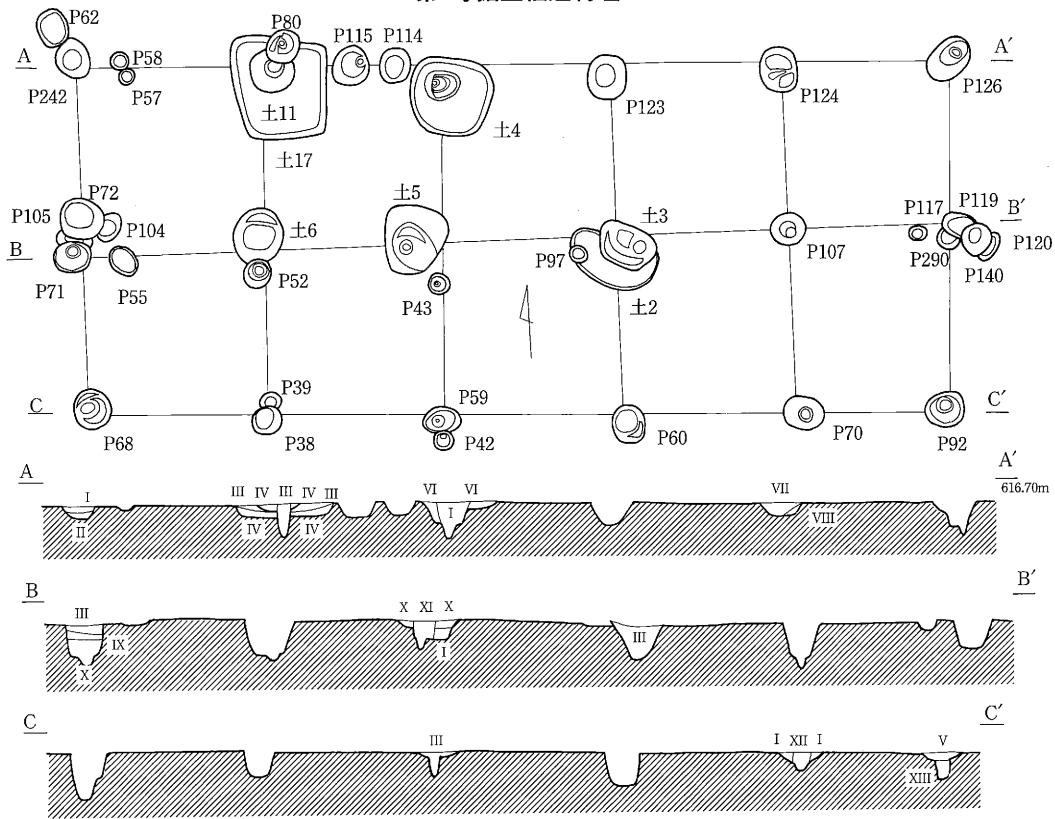
第1号竖穴状遺構



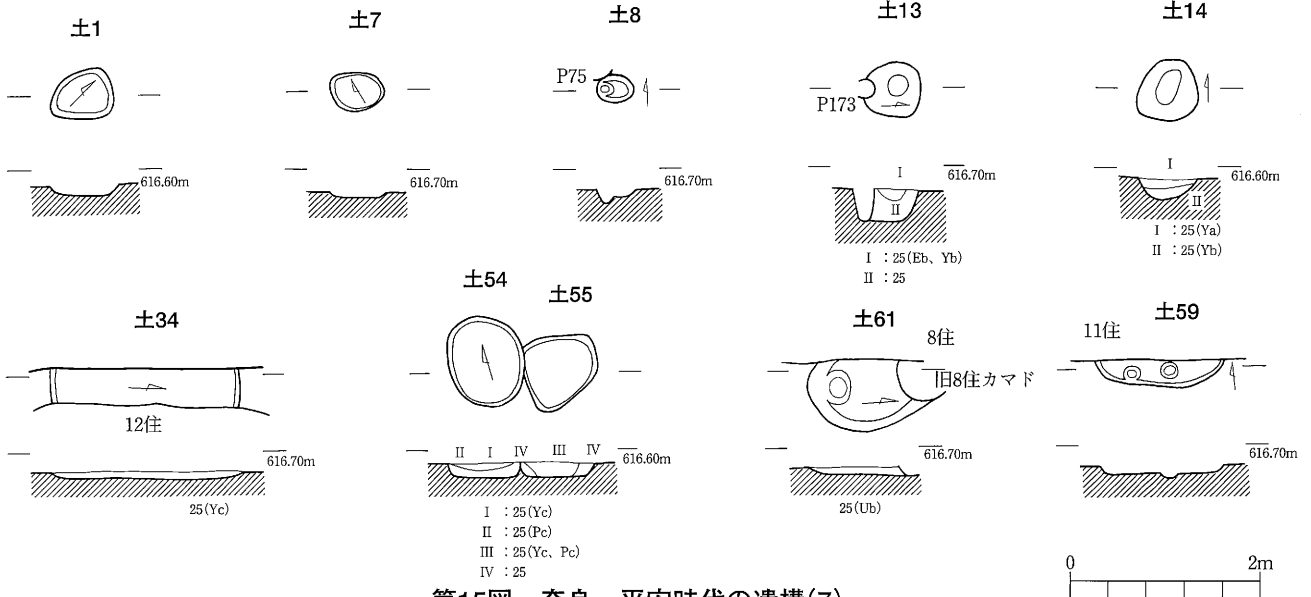
柱穴列1



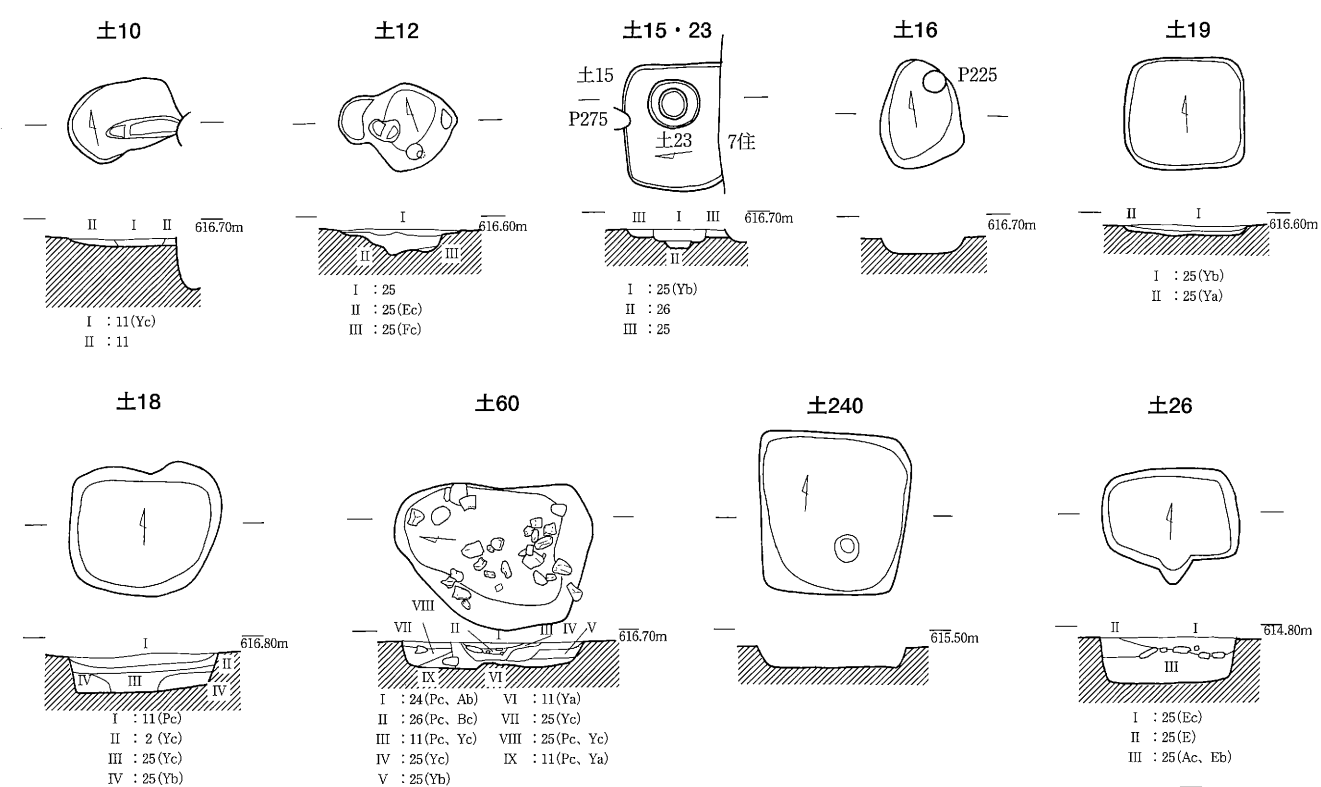
第2号掘立柱建物址



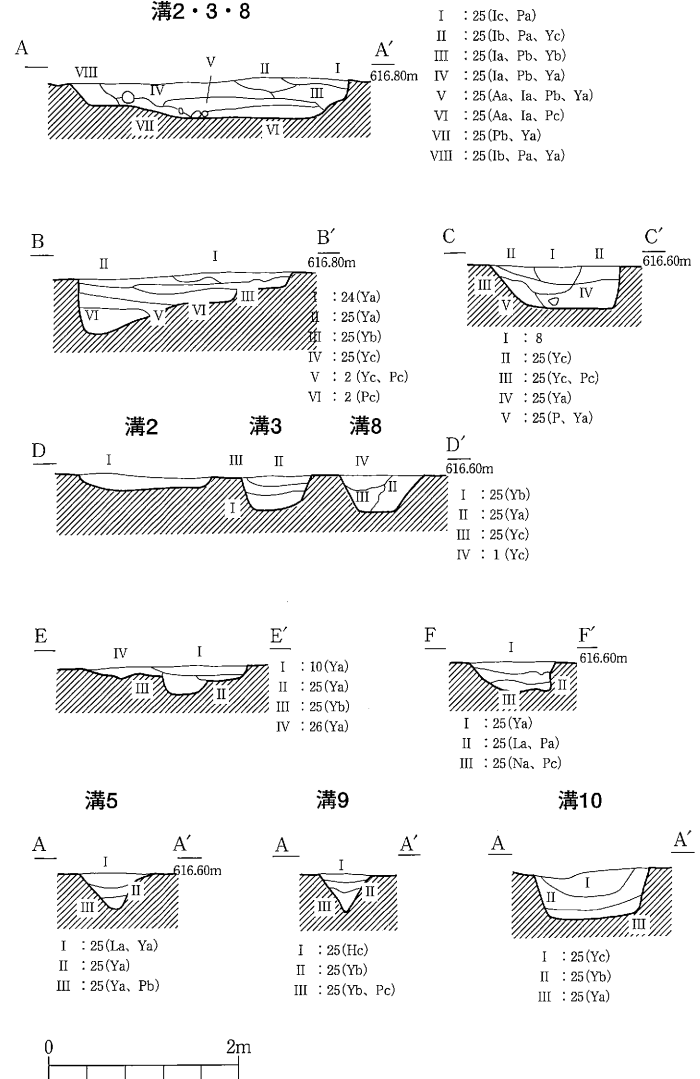
土坑



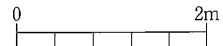
第15図 奈良・平安時代の遺構(7)



溝



±26遺物出土状況



第16図 奈良・平安時代の遺構 (8)

2. 中世の遺構

(1) 住居址

今回の調査では、遺構検出時に竪穴住居址として遺構名を振った中に、掘削した結果、中世に帰属し住居施設とは考えがたいものが相当数あった。これらについては竪穴状遺構とともに扱うこととしたい。ここでは出土土器から中世に帰属し、住居址として扱うことが適当と思われる15住について述べておきたい。

第15号住居址

覆土は3層からなる。覆土中には、カマドを中心とした住居址東半に、廃棄されたとと思われる礫群が確認された。これらの礫は床面から10cm程度高い位置に分布していた。壁は斜めに立ち上がる。地山である小礫の混じる暗茶褐色土を床としたが、貼床は認められなかった。カマドは東壁の中央からやや北寄りに設けられていたが、廃絶時に破壊されており、煙道部分が確認できたにとどまった。火床面及び奥壁は被熱痕跡がはっきりとしなかった。床面でピットを1基確認したものの、柱穴は確認できなかった。遺物の出土量は少なく、覆土東半を中心に出土している。出土遺物から中世1期に帰属すると考えられる。

(2) 掘立柱建物址

8棟を確認し、1・3～9建が該当する。いずれも出土遺物が少なく、帰属時期がわかるのは少数である。帰属時期の不明なものについては、柱穴が規則的に配されず、竪穴状遺構や土坑を内包するといった特徴から中世に帰属するものと考えた。これらは形態・規模等から大きく3つに分けることができよう。それは、竪穴状遺構の外周に柱を配した小型のもの（4・5・8建）、長辺が5m～8m前後のもの（1・3・7・9建）、長辺が14mを越える大型のもの（建6）の3者である。分布状況は、建4と5、建8と9がそれぞれ近接して存在し、主軸方向もそれほど違っていないことから、相互になんらかの関連を持っていたものであろう。建8と9は後述の柱穴列2・3とも関連があったものと思われる。また、建6を除きいずれの建物址も周辺に多数のピットや土坑が分布しており、建物址と密接なかわりを持っていたものである可能性がある。

竪穴状遺構・土坑の外周に柱を配した小型のもののうち、4・5建は柱が規則的に配されるが、8建は不規則で、ややいびつな形態となる。いずれも遺物の出土がわずかで、帰属時期はわからない。建4に内包される竪7は覆土中に廃棄されたとと思われる多量の礫群が確認された。

長辺が5～8m前後で、柱が規則的に配置されないもの（1・3・7・9建）はいずれも土坑を内包する。出土遺物はどれも非常に少なく、帰属時期の決定は困難であるが、3建は内包する土62から青白磁合子・東海系捏鉢が、7建は柱穴（P1592）覆土中から青白磁がそれぞれ出土し、ともに中世2期に帰属させることができる。いずれも側柱式建物址だが、建1・7は内部にピットがあり、これが床束であった可能性が高い。

大型の建物址である建6は、長辺が1452cm、短辺が984cmと他の建物址とは明らかに異なる規模を有しており、中世の建物址としては松本市内では最大級である。建6は総柱式の建物址で、周囲に庇が巡り、北側には孫庇が設けられる。総柱であることから高床構造であろう。主屋部分は2間×5間、庇は1間で巡り、北側の孫庇は1間×7間となる。主屋部分の規模は452×1140cmで、面積は52.2㎡を測る。主軸はほぼ南北方向である。出土遺物はごく少量であるが、柱穴のP1042から山皿が出土しており、帰属時期は中世3期である。建6の南側にはほぼ東西方向の溝17・18があり、双方とも出土遺物から中世3期に帰属する。主軸方向が建6とそろっており、密接な関係があったものと思われる。溝17・18とも覆土に流路性の堆積は確認されなかった。双方とも底面でピットが確認され、特に溝17は多数のピットがあたかも並ぶかのように位置している。これらピットに柱痕等は確認できず、その性格は明らかにはできなかった。いずれにしても、溝17・18は建6に伴う区画溝としての機能を推測できよう。

(3) 柱穴列

E区で2列を確認した。両者ともE区南東に近接して位置し、柱穴列3の北側には建8が、西側には建9がそれぞれ隣接する。柱穴列2は4基のピットからなり、南北方向に3基が並び、これに直行して西側にピットが1基位置する。柱穴列3は東西方向で、6基のピットからなる。配列はやや不規則だが、ピットが2つずつ近接して配されている。柱穴列3と建8・9は主軸方向がほぼ合っており、相互に何らかの関係を持っていたものと思われる。また、これらの周辺にはピットが多く分布しており、これも関連を持っていた可能性が指摘できよう。

(4) 竪穴状遺構

今回の調査で竪穴状遺構としたものは37基を数える。先述のように、遺構検出時に竪穴住居址として遺構名を付したもののうち、掘削の結果住居址よりは竪穴状遺構として把握すべきものもあり、ここではこれも含めて記述する。また、調査時に土坑として取り扱ったものの中に、長辺が2m前後を越える大型のものがあり(土70・84・85・88・161・199・221)、これらも本来は竪穴状遺構として扱うべきものであったと思われる。これらを含めた総数は58基を数える。いずれの遺構も、礫群を除く遺物の出土量は少ない。出土遺物から帰属時期が明確に把握できるものとして、中世1期にB区14住、中世2期にC区70・85土、D区33住、E区45・46住、C区竪4・10、中世3期にC区竪6、中世4期にE区竪28・35がある。

今回確認された中世の竪穴状遺構(住居址としたものを含む)は、形態では長方形を基調とするものが大半を占める。規模では長軸の長さが3～5m前後のものが多いが、6mを越えるものも3基見られた。床面までの深さは30cmに満たないものが大半だが、1m近くに達するものもある。

覆土中に礫が多量に投棄されているものも多く見られたことも特徴的で、こうしたものは18基確認された。これらの規模は2～5m前後にわたるが、4m以下のものが大半を占め、形態は長方形を基調とするものが多い。いずれも覆土中の礫の垂直分布は覆土上層から底面付近にわたり、平面分布は壁周辺を除き遺構全体にわたるものがほとんどである。

床面積が10㎡を越える大型のものが3基確認できたが、いずれも遺物の出土量は少なく、また柱穴に相当するピットや火床は確認することができなかった。したがって、これらある程度の面積を持つものでも住居施設とはっきり断定することができるものはなかったといっていよう。

(5) 墓址

8基を確認した。いずれも火葬墓である。遺構名については遺構検出時に付した土坑の名称のまま扱う。該当するのはB区土26・29、D区土134・158・169・175・184、E区土236である。分布状況はD区の東半に多くが見られるが、その他は点在している。D区東半の墓址は主軸方向がほぼそろっており、遺構密度が低いものの、墓域としてとらえることもできる。平面形態は隅丸長方形を基本とし、長辺の一方に張り出しがあるものとして土26(南側)、土169(西側)がある。規模は長軸が110cm前後、短軸が80cm前後の小型のものと、長軸が140cm以上、短軸が90cm以上の大型のもの2者がある。土26のみ長辺が東西方向となるが、その他は南北方向となる。主軸方向はD区のものほぼ南北方向となり、そろっている。B区・E区ものは南北方向から若干東へ振れたり、長辺が東西方向であったりする。底面までの深さは6～43cmであるが、遺構上半を削平され残存状態の悪いものが多い。覆土中には焼土・炭化物・焼骨片が多量に含まれており、特に床面・壁面付近に集中する。残存状況のよい土26・169では覆土中に礫が分布し、土26では遺構上面から覆土上半、土169では覆土下半まで礫群が観察された。床面及び壁は顕著に赤化しているものが多い。遺物はほとんど出土せず、明確な帰属時期は不明であるが、土184からは銭貨が2枚出土しており、こ

これによりその時期は1408年以降となる。

(6) 土坑・ピット

中世の遺物が出土した土坑・ピットは24基を数える。出土遺物から帰属時期のわかるものとして、中世1期にB区土37・P428、中世2期にC区土62・70・75・85・P775、中世3期にD区P1042、中世4期にE区土193・240・247がある。詳細な帰属時期が不明だが、中世に帰属するものにD区土105・112・133・161、P1155・1431・1443・1456・1457、E区土199・215・223、P1571・1596がある。この他、覆土中に礫群が見られるものについても、竪穴状遺構での礫群のあり方に近似することから中世に帰属する可能性を指摘できる。時期毎の分布状況として、中世2期のものはC区に、中世4期のものはE区にまとまっていることが指摘できる。

また、銭貨の出土したものにC区P773・D区土125・162・164・173、P1306・1449の7基がある。これらの中で注目すべき土坑としてD区土162・164及びP1306がある。土162では上面から底面付近まで直径15～30cm程度の礫が出土し、底面上に板状の木片が置かれ、その上に重ねられた銭貨が置かれた状態で出土した。銭貨は4枚が完存、2枚が半存し、さらに小片があるため、6枚か多くても7枚となる。このように銭貨が板状の木片の上に乗せられて出土する状態は土164及びP1306でも観察された。P1306では底面上、土164では2段の掘り込みがあるうちの1段目の掘り込みの底面のレベルからそれぞれ出土している。出土した銭貨の枚数は土164では1枚、P1306では6枚である。P1449についても板状の木片は出土しなかったが底面から銭貨が3枚まとまって出土しており、同様の性格を持ったものである可能性が高い。これらの土坑・ピットは南北方向に並ぶように分布するが、各々の距離はまちまちであり、またこの他に規則的に並ぶピット・土坑を確認できず、建物址や柱穴列としては把握できなかった。土層観察を行った土162では覆土は2層に分層できたが、銭貨の出土した1段目の底面から上は単層で、人為的に埋め戻された可能性が高い。ここでは、これらの土坑・ピットは地鎮のためのものであった可能性を指摘するととどめておきたい。出土銭貨から各々の帰属時期は土162が1068年以降、土164が621年以降、P1306が1368年以降、P1449が1078年以降となる。その他の土坑の銭貨の出土状況は、C区P773から1枚、D区土125から3枚、土173から1枚出土し、帰属時期はP773が1309年以降、土125が1368年以降、土173が1039年以降となる。

(7) 溝・方形区画

ここでは今回調査した溝のうち、すでに述べた平安時代の溝及び建6に伴うと思われる溝を除いたものを扱う。総数は16条で、B区溝6・7・28、C区溝11～15、D区溝19・21～25、E区溝26・27が該当する。全体的に遺物の出土量はわずかで、帰属時期を特定できるものはない。

B区溝28、C区溝13、D区溝22・23は、東西方向あるいは南北方向にほぼ直線的に延び、調査区外へ続くものと思われ、A区・E区で確認された旧堂沢とともに方形の区画を構成する区画溝と考えられる。

溝28は未掘削のため堆積の状況等は不明である。遺構検出時は暗灰褐色砂質土の範囲を拾った。途中やや北へ張り出しながらもほぼ東西方向に延び、調査区外へ続くものと思われる。幅は1～1.9mを測る。D区西半では調査区北壁沿いにわずかに遺構覆土と思われる土層が所々で確認でき、あるいはこれが溝28の続きのものであったかもしれない。調査区外であったため、これを確認することはできなかった。

溝13はほぼ南北方向に直線的に延び、調査区外へ続くものと思われる。溝12・14・15はこの溝と接続している。断面形状はU字状を呈する。覆土は上層～中層に砂層・砂礫層が観察され、流水があったものと考えられる。幅は3.1～4.2m、溝15との接合部付近は6.6mを測る。南北の比高差は、土層断面をとった箇所の底面を比較すると北が南より25cm低い。

溝13と接続する溝12・14・15は溝13と密接な関係があったものと推測される。ただし、接続部分の掘削を行っていないので、切合い等明確な関係は把握できなかった。溝12は北側は調査区外にかかり、南側ははっきりとしない。断面形状はU字状で、底面は平坦。覆土は6層からなり、いずれも砂質土。下層は鉄分を多量に含んでおり、滞水していた可能性が高い。幅は2.5～2.7mを測る。溝14は溝13の西側に接続するほぼ東西方向の溝で、西側ははっきりしなくなる。断面形状はU字状で底面は中央部がやや落ち込む。覆土は2層からなり、ともに酸化した鉄分を少量含む。流路性の堆積を確認することはできない。幅は1.6～3.2mを測る。溝15は溝13の南側に接続する北西方向の溝。断面形状は皿状で、底面は平坦。覆土下層に砂礫土が堆積しており、流水があった可能性が高い。幅は2.1～3.1mを測る。

溝22・23は土層断面から一連の溝として把握することが可能である。溝23はこの一連の溝の最終段階のものであろう。溝22は調査区南西端で一部を確認したのみで、詳細は不明。溝23は調査区西端に南北方向に伸び、西岸は調査区外にかかっている。断面形状は溝22・23ともU字状を呈する。溝23の幅は2.5m前後、深さは60cm程度である。覆土の状況は、土層断面図溝22のIV層は砂礫層で、この段階には流水があった可能性が高い。溝23覆土は灰褐色土で、流水の痕跡は確認できない。

A区・E区で確認された旧堂沢は、覆土中にビニールなど現代のものが含まれており、ほ場整備前まで機能していた用水路である。今回の調査では掘削を行わなかったため、その形成過程を明らかにすることはできなかった。

旧堂沢を含め、以上の溝は主軸が東西・南北方向でいずれも調査区外へ延びているものと思われる。調査区外に延長した場合、方形の区画が形成されることになる。方形の区画と考えた場合、その規模は、南北（溝28と旧堂沢の距離）が136～142m、東西（溝13と溝22・23）が240mとなる。なお、溝13とE区東端との距離は138mで、溝13と溝22・23の間はE区の東側、現在の南北の道路のあるあたりとなる。

以上の区画溝と、関係する可能性がある溝として溝6・7・19・20・26がある。

溝6・7は溝28の北側をほぼ平行に延びる。溝6は溝28のすぐ北側に位置し、東側は調査区外に続くものと思われる。断面形状は皿形を呈し、底面は平坦である。覆土は灰褐色砂質土の単層で、流水の痕跡は確認できなかった。溝7は溝6の北側をほぼ東西方向にのび、調査区外に続くものと思われる。ただし、西半は検出時にプランがはっきりとはしなかった。断面形状は皿形で、底面は平坦。覆土は灰褐色砂質土の単層で、流水の痕跡は確認できなかった。

溝19・20はともにL字状を呈し、溝19の南側に溝20が接続する。溝20は溝23と接続するよう見えるが、掘削を行っていないため、両者の関係は不明である。溝19は覆土上層に砂礫土層が堆積し、流路の可能性はある。幅は東西部分が0.7～0.9m、南北部分が1.2～2.1m。溝20は、幅が東西部分が2～2.7m、南北部分が0.7～1.2m。未調査のため詳細は不明。検出時には溝19と同様の覆土を拾った。

溝26はE区北側を東西方向に直線的に延びる。西側ははっきりとしなくなるが、東側は調査区外へ延びる。覆土は暗灰褐色土の単層で流路性の堆積は確認できない。区画溝との距離は、溝28から68m、旧堂沢から68～74mで、位置的には両者の中間に位置する。

その他の溝で、用途のわかるものはなかった。いずれも覆土の堆積状況からは流水・滞水の痕跡は確認できなかった。

第4表 竪穴状遺構一覧

No.	区	平面形	規模 (cm)			床面積 (㎡)	主軸方向	時期	備考
			長軸	短軸	深さ				
1	A	不整形長方形	284	288	22	4.5	N-4° -E		溝4、P164を切る。P130・190・647に切られる
2	C	不整形長方形	400	336	16	10.4	N-21° -E		P714に切られる。
3									欠番
4	C	隅丸長方形	436	300	60	10.4	N-3° -E	中世2期	
5	C	不明	500	(172)	8	5.7	N-4° -E		区域外にかかる。
6	C	隅丸長方形	340	220	44	5.3	N-13° -E	中世3期	土83、溝16を切る。土84、P761に切られる
7	C	隅丸長方形	312	224	20	5.8	N-1° -E		建5とかかわる。
8	C	隅丸長方形	680	388	28	19.2	N-0°		P720・721に切られる。
9	C	長方形	360	188	4	5.9	N-72° -E		建4とかかわる。P981に切られる。
10	C	楕円形	248	220	100	4.5	N-6° -W	中世2期	溝16を切る。23住、土72、P810に切られる。
10	D	隅丸長方形	340	312	12	(9.8)	N-8° -E		堅20を切る。土133・161、P1000・1050・1053・1054・1056・1064に切られる。
11	D	不明	300	(160)	16	(3.4)	N-10° -W		P1051・1295に切られる。攪乱を受ける。
12	D	長方形	(368)	240	26	(7.7)	N-6° -E		P118を切る。堅23、土137、P1120に切られる。
13	D	不整形長方形	464	232	12	8.7	N-5° -E		土137、P1122を切る。P1121・1123・1124に切られる。
14	D	隅丸長方形	660	280	18	13.5	N-8° -E		P1103・1104に切られる。
15	D	隅丸長方形	336	316	16	9.2	N-2° -E		P1082・1084・1085・1095・1099・1101に切られる。
16	D	隅丸長方形	424	236	16	8.8	N-14° -E		土135、P1110を切る。土185、P1111・1112・1114・1115・1260に切られる。
17	D	長方形	380	356	20	11.5	N-6° -E		P1266を切る。P1217に切られる。
18	D	長方形	288	276	18	6.3	N-4° -W		P1281を切る。P1286に切られる。
19	D	不明	(212)	(76)	24	(0.8)	N-11° -E		土153、P1204を切る。区域外にかかる。
20	D	不明	312	(220)	8	6.2	N-5° -W		堅10に切られる。区域外にかかる。
21	D	隅丸長方形	324	260	14	6.6	N-3° -W		P1299を切る。土166・168・184、P1237・1238・1239・1240・1247に切られる。
22	D	長方形	326	312	26	8.0	N-4° -W		P1219・1222・1231・1290・1306・1307・1310に切られる。
23	D	隅丸長方形	412	384	16	13.6	N-5° -E		堅12・26、P1287を切る。P1093・1284に切られる。
24	D	六角形	412	268	12	8.3	N-0°		P1250・1251・1252・1280に切られる。
25	D	隅丸長方形	292	172	16	4.1	N-24° -E		
26	D	長方形	700	(364)	16	(17.9)	N-7° -E		土156を切る。土140・149、P1162に切られる。
27	E	長方形?	204	(188)	12	(3.2)	N-2° -E		39住、トレンチに切られる。
28	E	楕円形	368	252	40	4.2	N-0°	中世3期	土241を切る
29	E	隅丸長方形	364	232	28	6.2	N-4° -E		41住を切る。P1356から1360に切られる。
30	E	隅丸長方形	390	268	8	8.5	N-3° -W		P1490を切る。P1382・1491・1541に切られる。
31	D	長方形	244	168	24	3.3	N-0°		
32	E	隅丸長方形	288	(264)	26	3.2	N-0°		堅36に切られる。区域外にかかる。
33	E	隅丸長方形	242	240	64	4.5			47住を切る。土220に切られる。建7に含まれる。
34	E	長方形	256	(152)	12	(3.2)			溝27に切られる。
35	E	不明	228	(100)	20	(1.7)		中世3期	区域外にかかる。
36	E	隅丸長方形	300	224	44	4.2			堅32、土244を切る。
37	E	隅丸長方形	308	284	36	7.2			49住を切る。土215・243、P1513~1515に切られる。

第5表 中世の墓址一覧

土坑 No.	区	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	主軸方向	備考
26	B	隅丸長方形	162×122× 43	N-1° -E	長辺は東西方向 南側に張り出しあり
29	B	不整形	87× 71× 6	N-19° -E	
134	D	隅丸長方形	116× 84× 13	N-2° -E	
158	D	隅丸長方形	146× 86× 22	N-2° -E	
169	D	隅丸長方形	106×107× 42	N-3° -E	西側に張り出しあり
175	D	隅丸長方形	117× 84× 20	N-4° -E	
184	D	隅丸長方形	150×110× 15	N-3° -E	銭貨出土
236	E	隅丸長方形	163× 94× 10	N-14° -E	

第6表 中世の竪穴住居址一覧

No.	区	平面形	規模 (cm)					カマド形態		時期	備考
			長軸	短軸	深さ	床面積 (㎡)	主軸方向	種類・位置			
14	B	長方形	296	228	28	5.4	N-0°	なし	中世1期	15住、溝7を切る P517に切られる	
15	B	方形	404	328	28	10.7	N-88°-E	東壁		14住、P588に切られる	
23	C	隅丸長方形	480	408	24	16.7	N-0°	なし		竪10、溝16を切る 土85、P859・860に切られる	
24	C	長方形	512	436	28	19.8	N-2°-E	なし		土87を切る 土86・88に切られる	
25	C	隅丸長方形	436	390	24	13.8	N-0°	なし		27住を切る P827に切られる	
27	C	不明	300	(220)	20	(5.8)	N-8°-W	不明		25住に切られる	
29	C	方形	360	312	22	9.8	N-1°-W	なし		28住を切る	
32	D	隅丸長方形	576	432	18	22.5	N-3°-W			34住を切る 土111、P1230、溝17に切られる	
33	D	隅丸長方形	488	456	18	19.5	N-0°		中世2期	35住を切る P1033、溝17・18に切られる	
40	E	不明	320	(268)	12	(7.2)	N-5°-W			土194・195、P1350~1352に切られる	
41	E	隅丸長方形	372	320	16	10.7	N-0°			49住、竪37、土215を切る 竪29、P1354・1356・1357・1404に切られる	
42	E	隅丸長方形	384	336	16	11.2	N-0°			43住、P1408を切る 土199を切る	
43	E	隅丸長方形	376	308	12	9.6	N-1°-E			42・44住、P1309に切られる	
44	E	隅丸長方形	256	244	20	5.0	N-3°-W			43住、土203を切る	
45	E	隅丸長方形	384	352	48	6.4	N-1°-E		中世2期		
46	E	方形	404	388	32	13.3	N-1°-E		中世2期	50住、土207、P1570を切る 土205・206に切られる	
47	E	隅丸長方形	(580)	(552)	16	(27.6)	N-1°-E			48・50住、竪33、建7、土219・223・224、P1364・1588・1590に切られる	
48	E	隅丸長方形	396	270	22	8.2	N-0°			47住、土219、溝26を切る	
49	E	隅丸長方形	460	404	16	15.3	N-0°			P1502を切る 41住、竪37、土215・243、P1513・1515、トレンチに切られる	
50	E	隅丸長方形	556	472	20	21.8	N-0°			47住を切る 46住、土205・208・209・223~225、P1486・1487・1492・1494・1498に切られる	

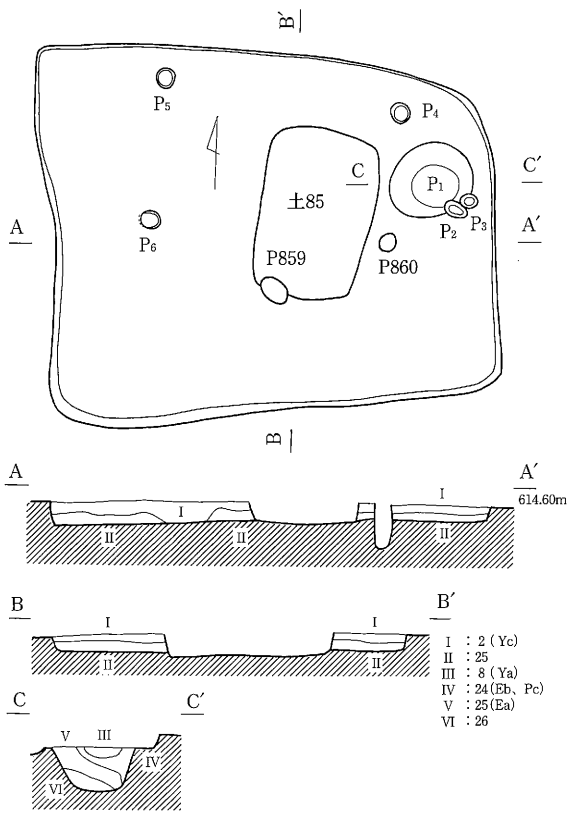
第7表 中世の建物址一覧

No.	区	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱 痕	
1	B	長方形 側柱式	N-3°-W 23.5	3間×2間 596×389	桁行 180~228 (197) 梁間 180~208 (193)	円形	径 24~52 深 19~33		土20を内包する
3	A	長方形 側柱式	N-5°-W	6(5)間×5(6)間 544×428	桁間 80~100 (90) 梁間 40~100 (76)	円形	径 12~44 深 6~30		土坑を含む
4	C	長方形 側柱式	N-0° 8.6	2間×2間 380×221	桁間 156~216 (186) 梁間 96~116 (105)	円形	径 24~36 深 10~28		竪9とかかわる
5	C	長方形 側柱式	N-13°-E 8.5	1間×1間 326×260	桁行 320~332 (326) 梁間 260	円形	径 24~48 深 16~32		竪7とかかわる
6	D	長方形 総柱式	N-2°-W (主屋) 52.2 (庇) 58.1 (孫庇) 16.1	2間×5間 452×1140 872×1452 112×1452	桁行 216~232 (228) 梁間 212~240 (227)	円形 楕円形 方形	径 36~104 深 22~56	10基 φ36~20	主屋の周囲に1間の庇 北側に1間×7間の孫庇
7	E	長方形 総柱式	N-90°-W 30.7	3(4)間×2間 734×440	桁行 144~220 (183) 梁間 192~248 (217)	円形	径 20~56 深 15~31		47住を切る
8	E	長方形 側柱式	N-1°-E 7.0	2間×2(1)間 288×248	梁行 100~184 (143) 梁間 68~260 (164)	円形	径 20~32 深 11~25		
9	E	入側柱式		3間×2(3)間	梁間 68~260 (164)				

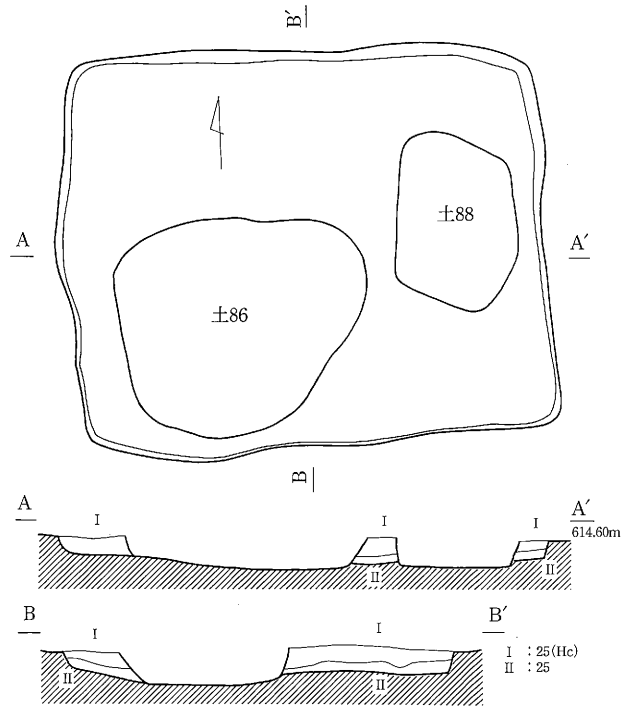
第8表 中世の柱穴列一覧

No.	区	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱 痕	
2	E	L字形	N-93°-E	2間×1間 468×184	184~244	円形	径 20~380 梁 10~49		
3	E		N-90°-E	5間 560	36~184	円形	径 20~28 梁 15~23		

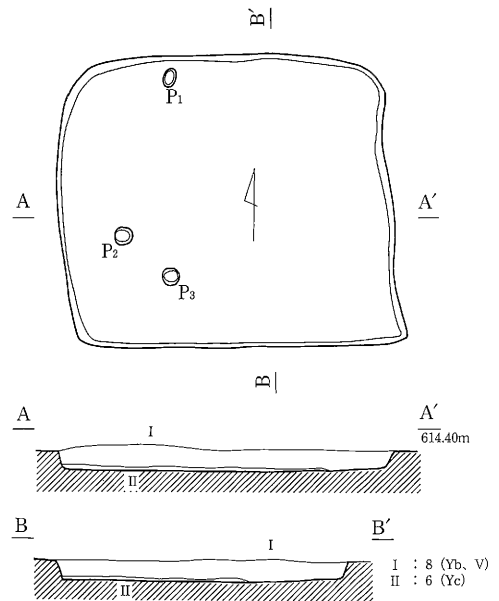
第23号住居址



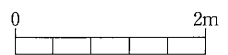
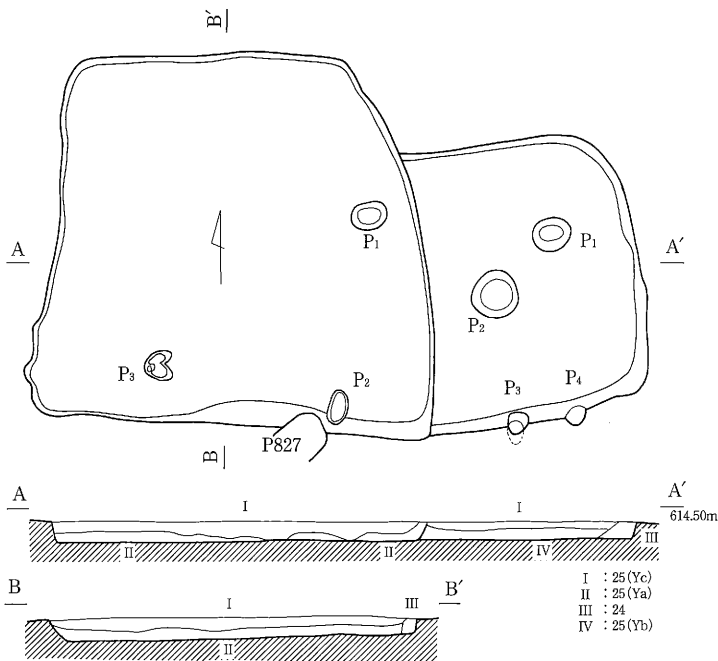
第24号住居址



第29号住居址

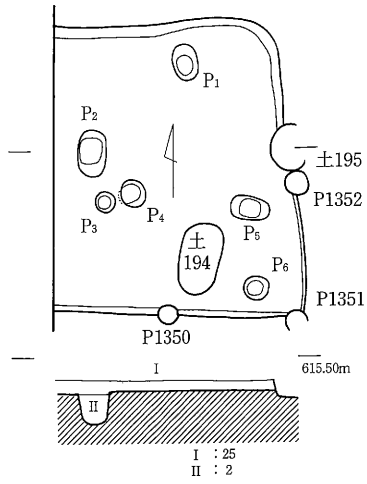


第25・27号住居址

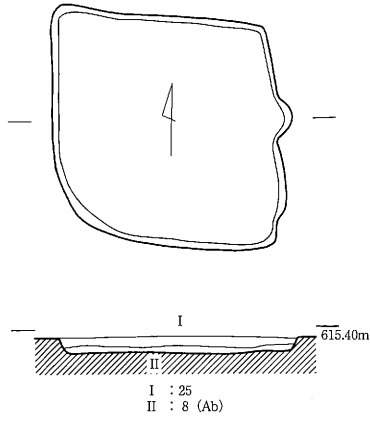


第17図 中世の遺構(1)

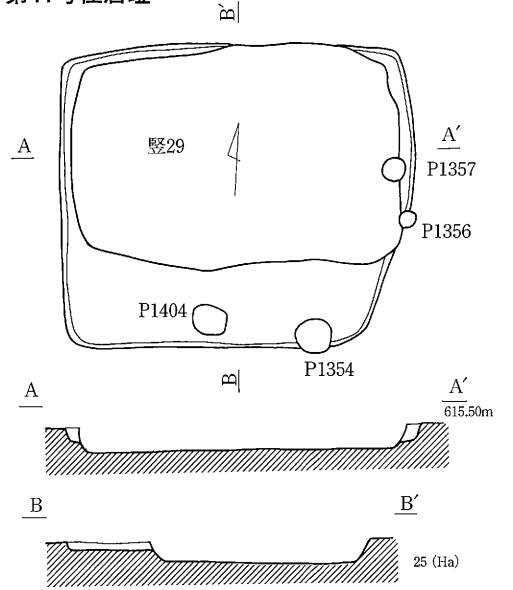
第40号住居址



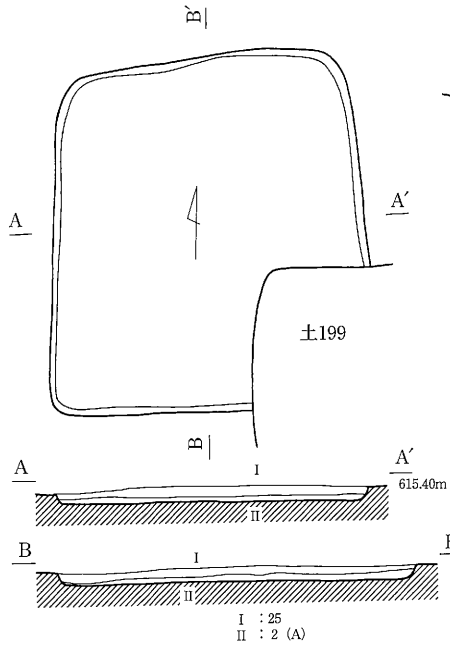
第44号住居址



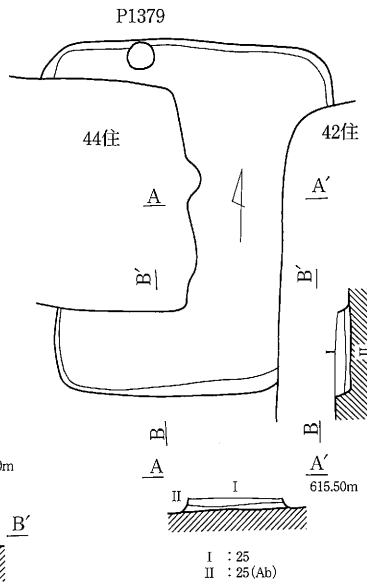
第41号住居址



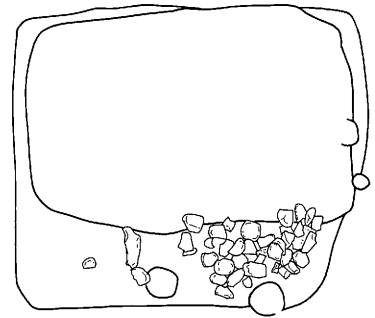
第42号住居址



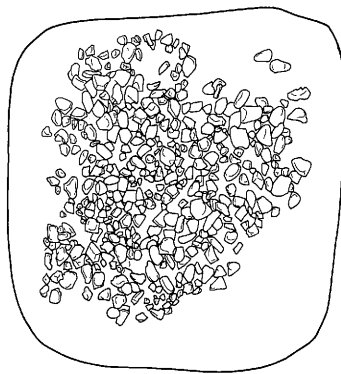
第43号住居址



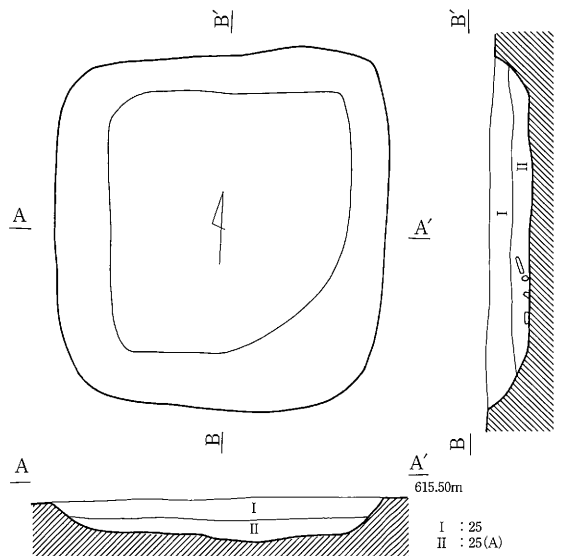
41住遺物出土状況



45住遺物出土状況

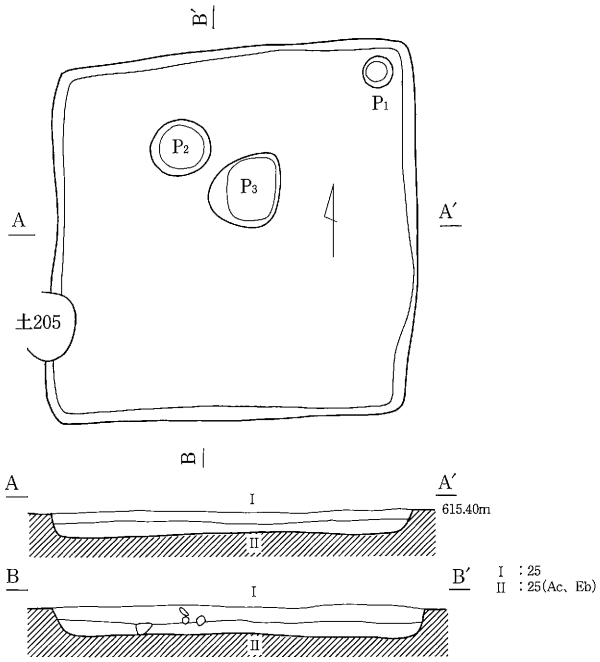


第45号住居址

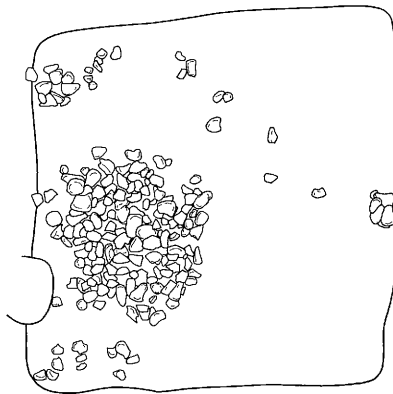


第18図 中世の遺構(2)

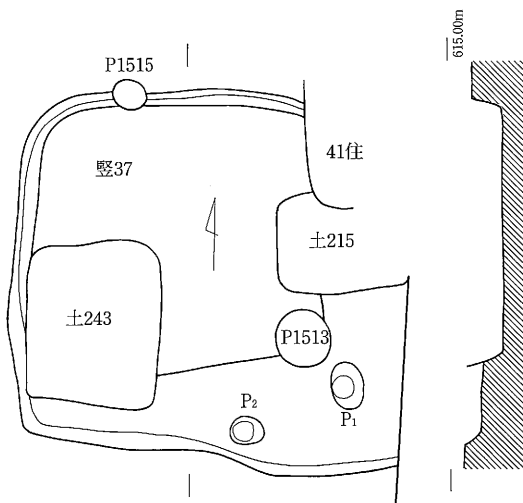
第46号住居址



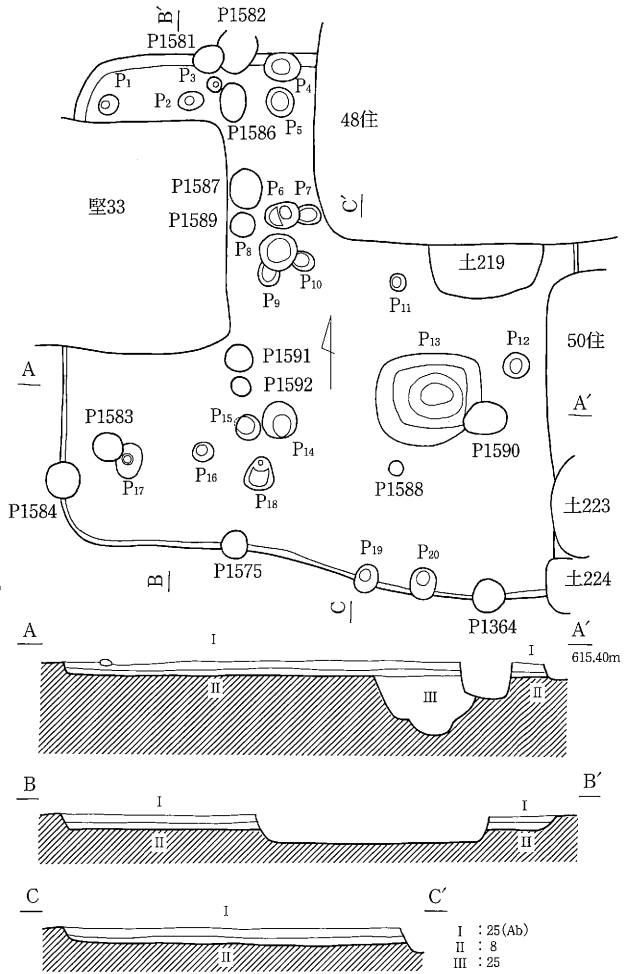
46住遺物出土状況



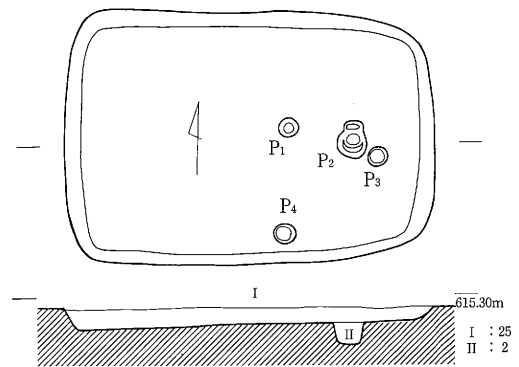
第49号住居址



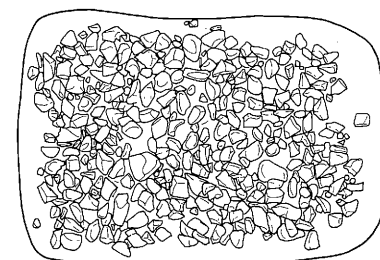
第47号住居址



第48号住居址

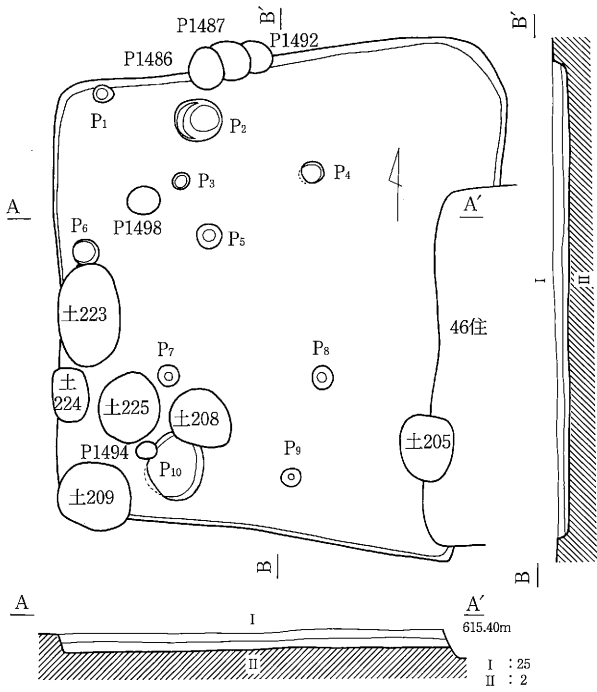


48住遺物出土状況

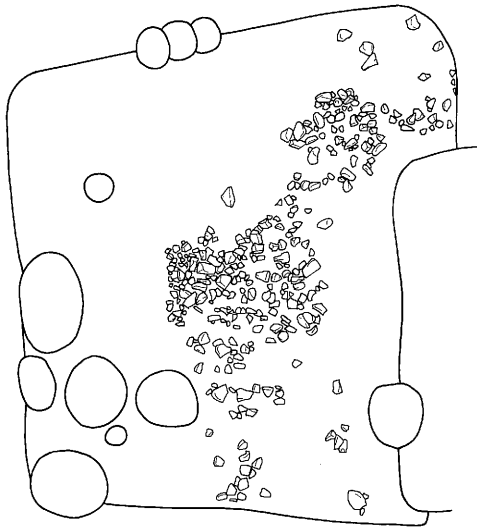


第19図 中世の遺構(3)

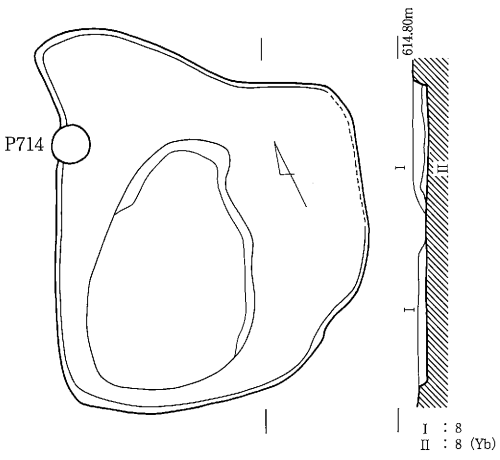
第50号住居址



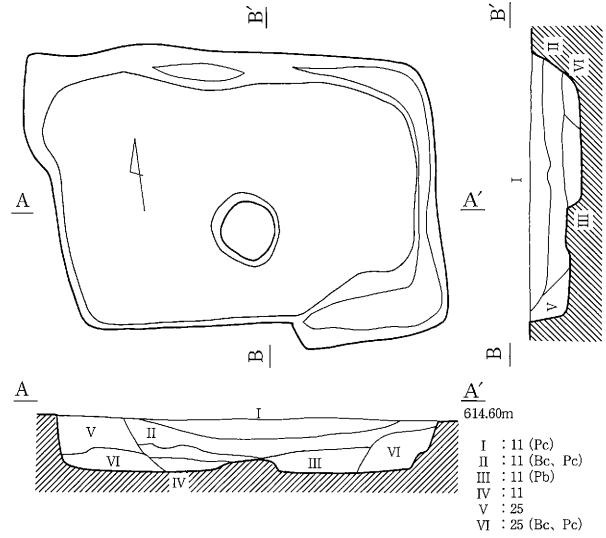
50住遺物出土状況



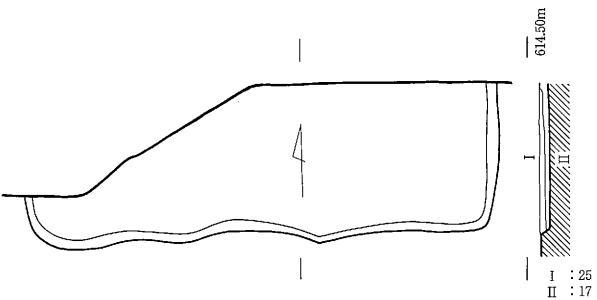
第2号竖穴状遺構



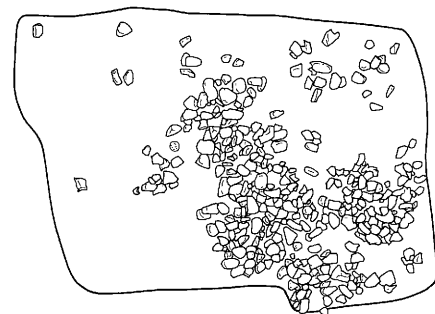
第4号竖穴状遺構



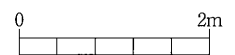
第5号竖穴状遺構



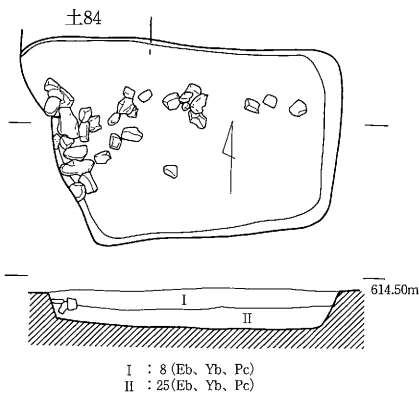
竖4遺物出土状況



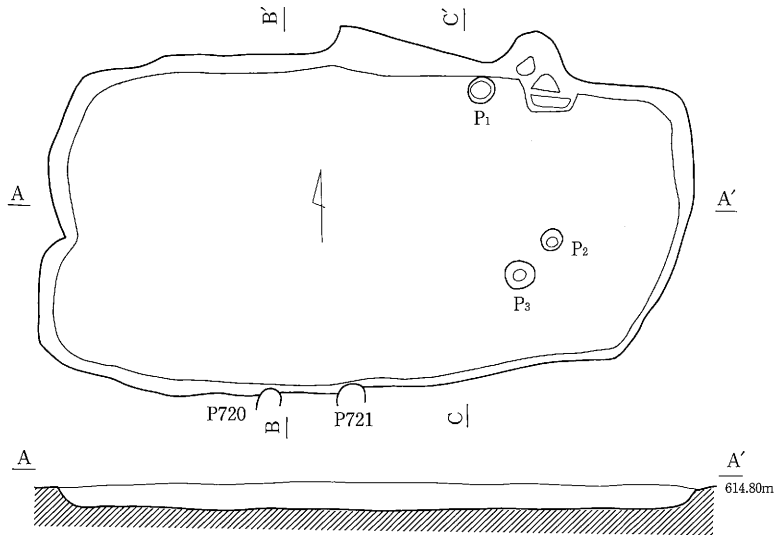
第20図 中世の遺構(4)



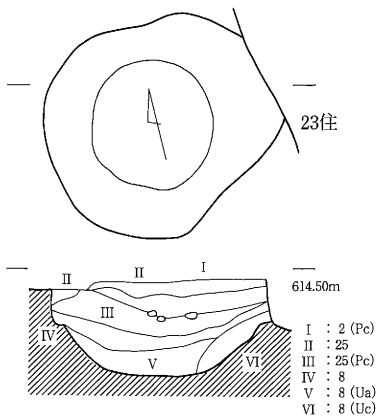
第6号竖穴状遺構



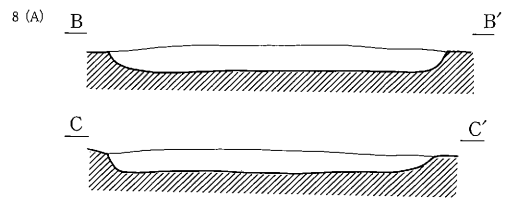
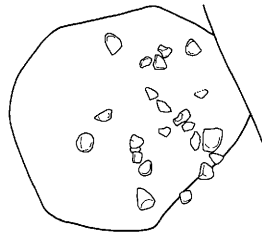
第8号竖穴状遺構



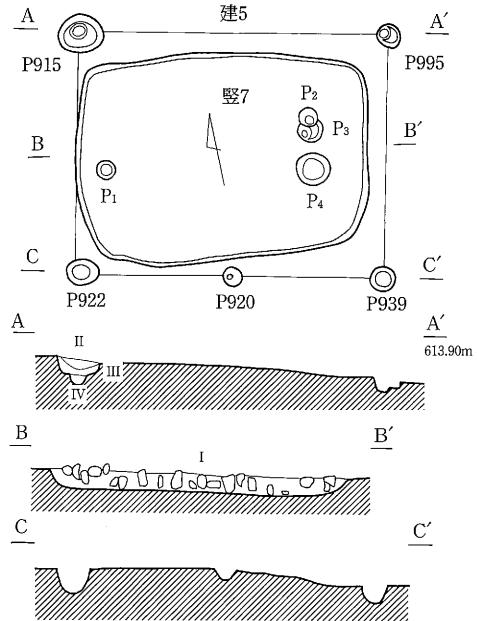
第10号竖穴状遺構



竖10遺物出土状況



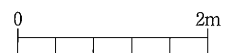
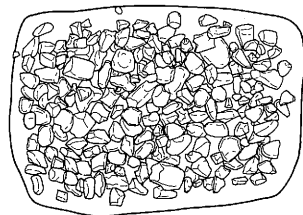
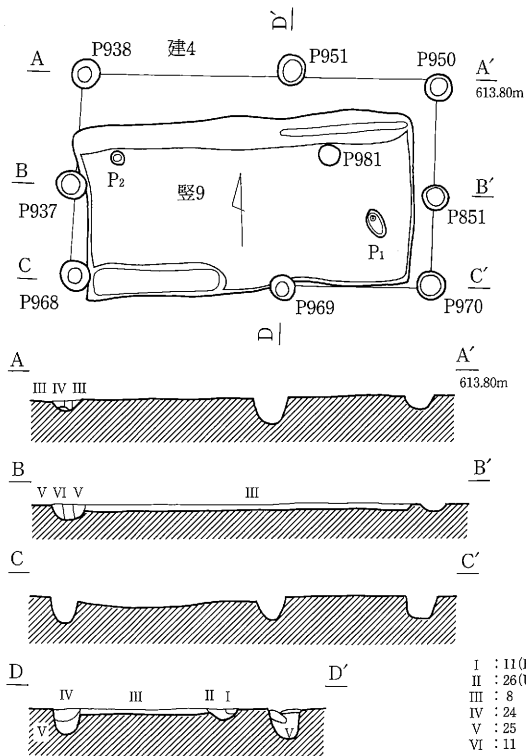
第7号竖穴状遺構
第5号掘立柱建物址



竖7遺物出土状況

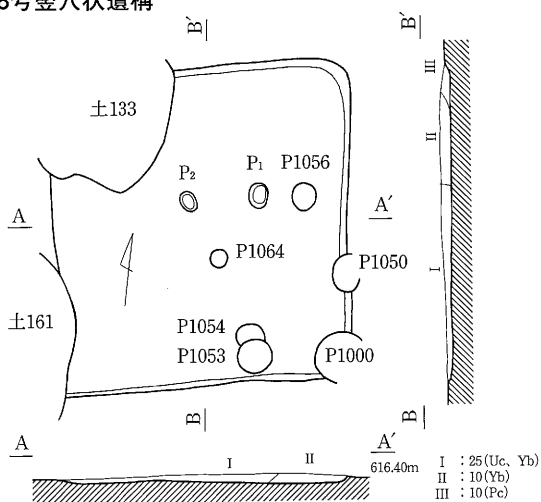
- I : 25 (Ac, Bc)
- II : 11
- III : 8
- IV : 25

第9号竖穴状遺構
第4号掘立柱建物址

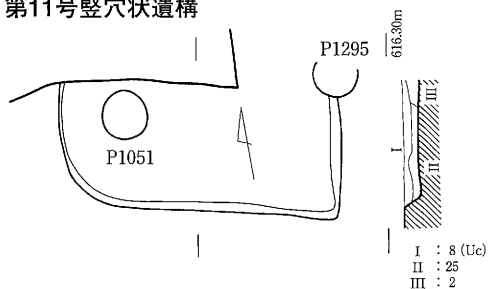


第21図 中世の遺構(5)

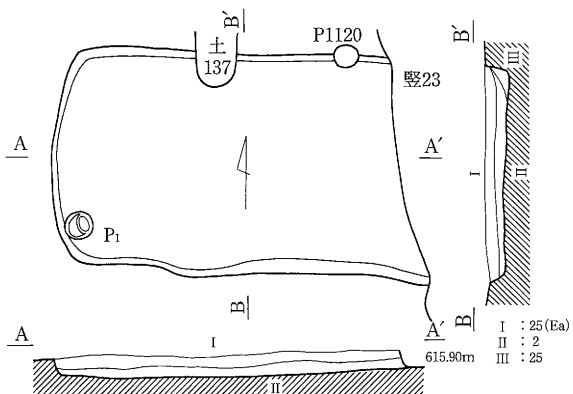
第38号竖穴状遺構



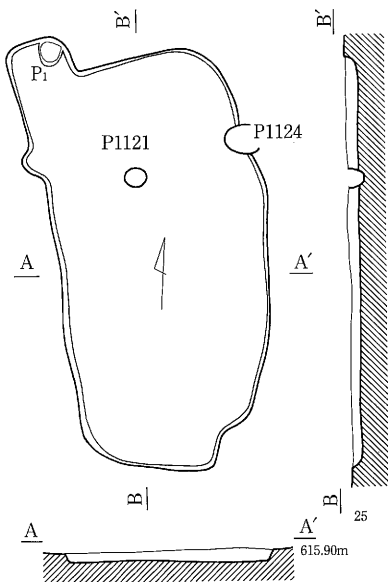
第11号竖穴状遺構



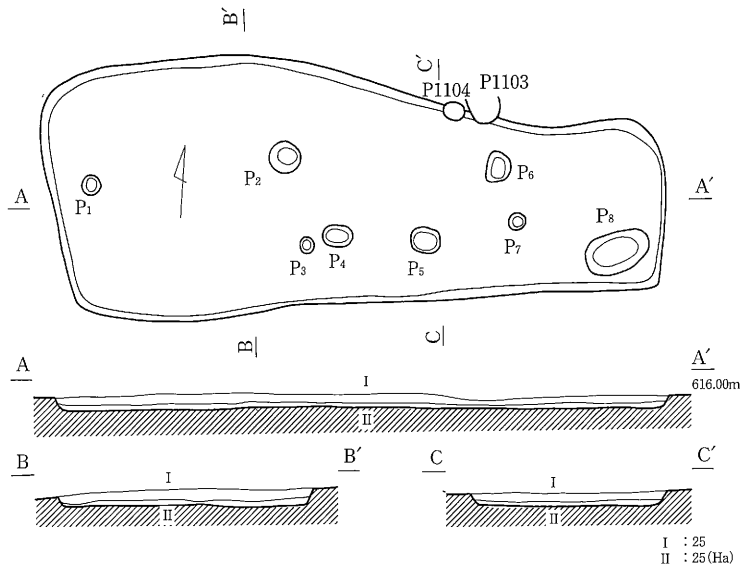
第12号竖穴状遺構



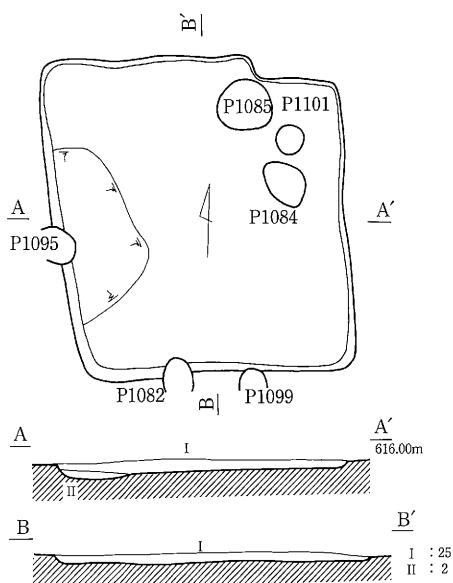
第13号竖穴状遺構



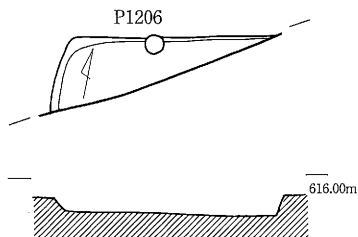
第14号竖穴状遺構



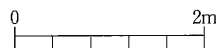
第15号竖穴状遺構



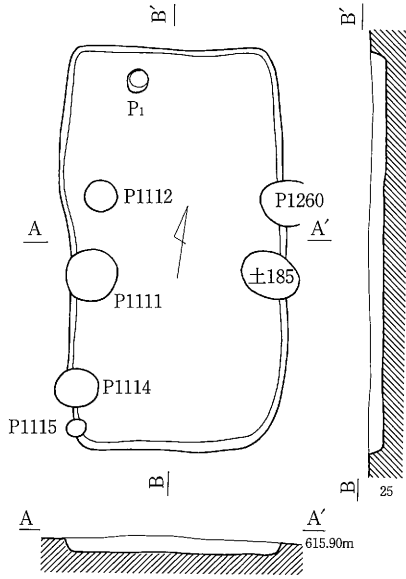
第19号竖穴状遺構



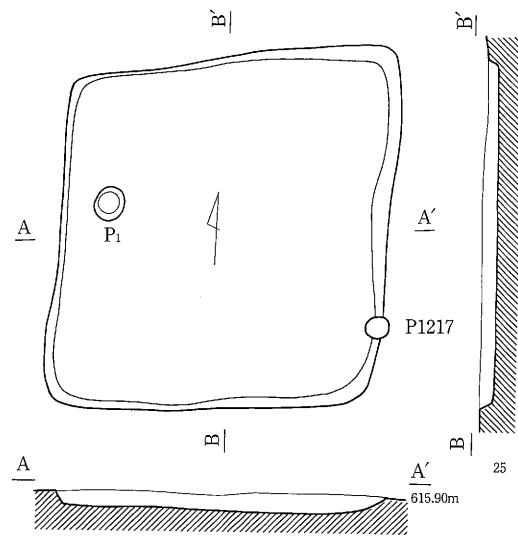
第22図 中世の遺構(6)



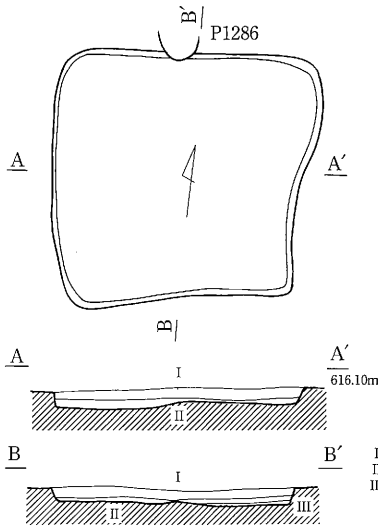
第16号竖穴状遺構



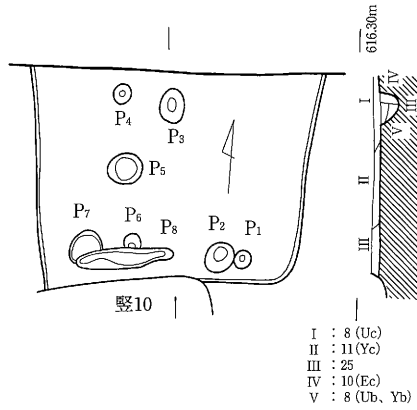
第17号竖穴状遺構



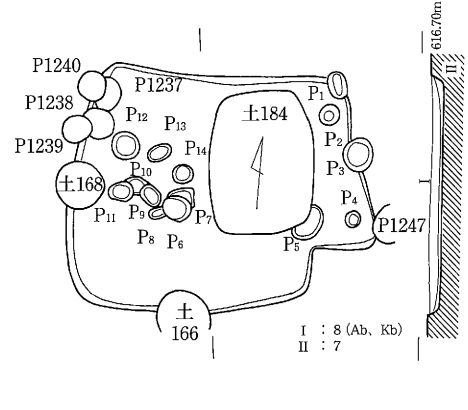
第18号竖穴状遺構



第20号竖穴状遺構



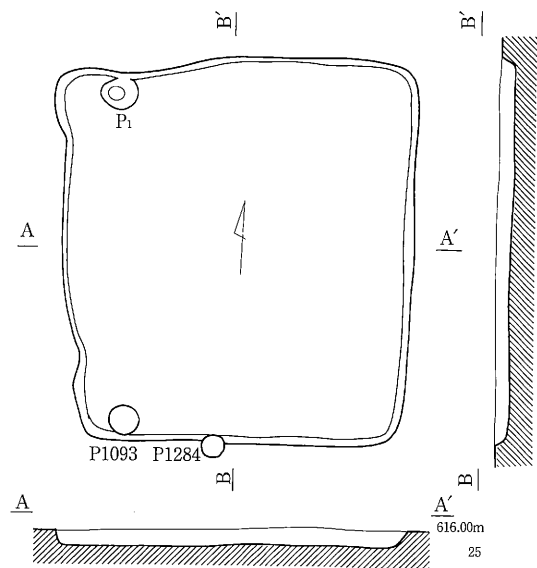
第21号竖穴状遺構



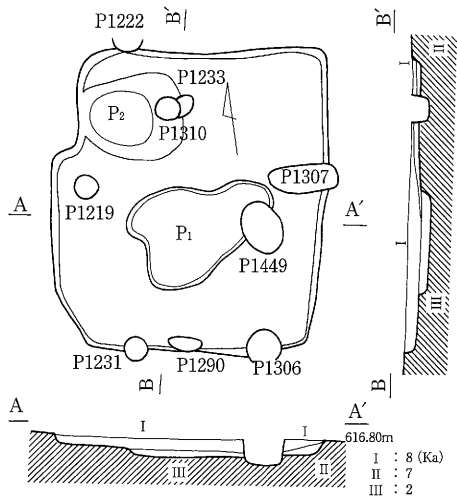
- I : 8 (Uc)
- II : 11 (Yc)
- III : 25
- IV : 10 (Ec)
- V : 8 (Ub, Yb)

- I : 8 (Ab, Kb)
- II : 7

第23号竖穴状遺構

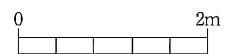


第22号竖穴状遺構

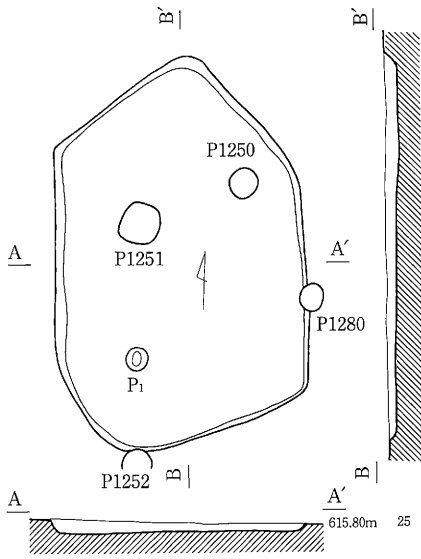


- I : 8 (Ka)
- II : 7
- III : 2

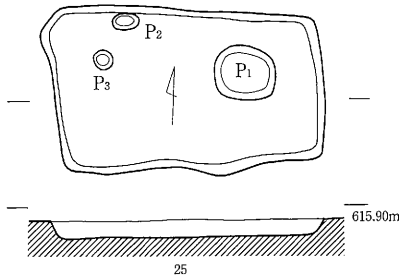
第23図 中世の遺構(7)



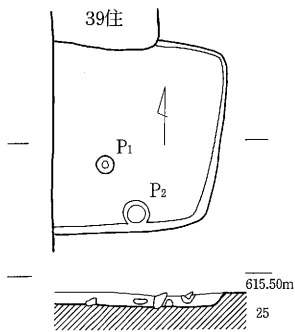
第24号竖穴状遺構



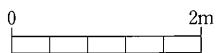
第25号竖穴状遺構



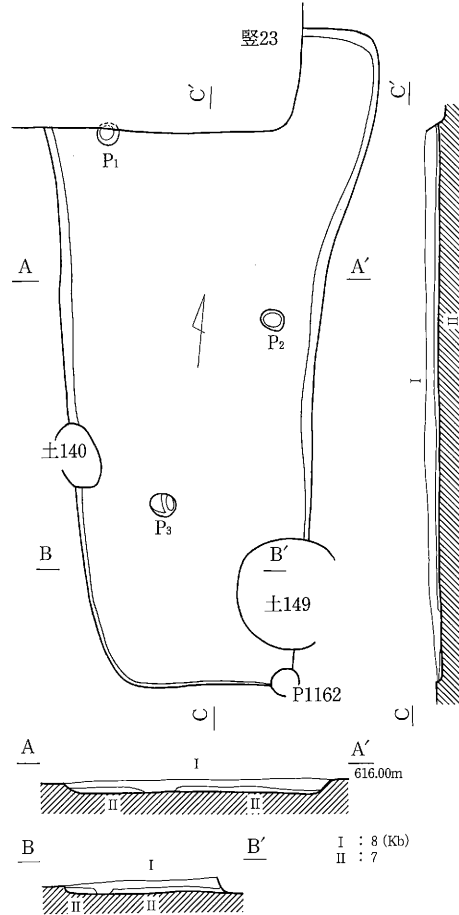
第27号竖穴状遺構



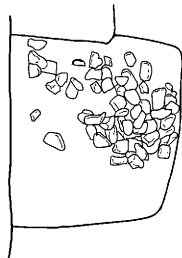
第34号竖穴状遺構



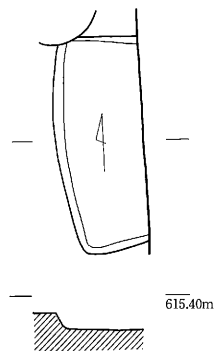
第26号竖穴状遺構



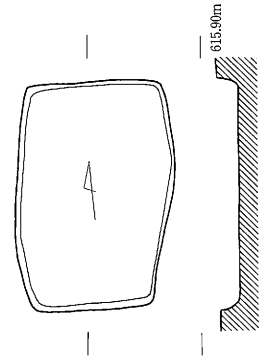
竖27遺物出土状況



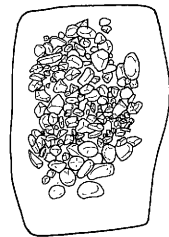
第35号竖穴状遺構



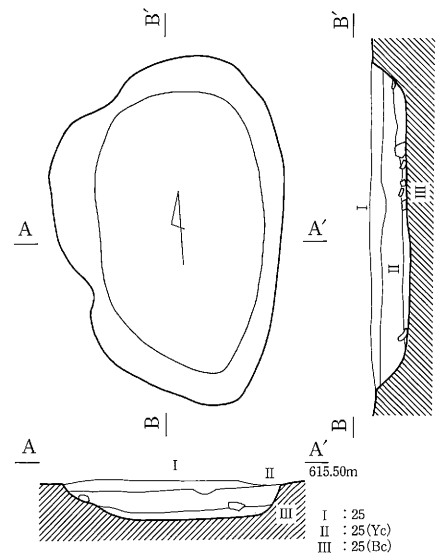
第31号竖穴状遺構



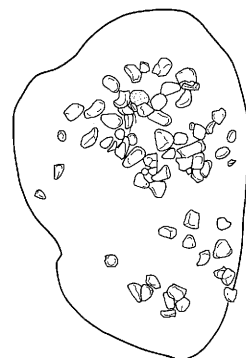
竖31遺物出土状況



第28号竖穴状遺構

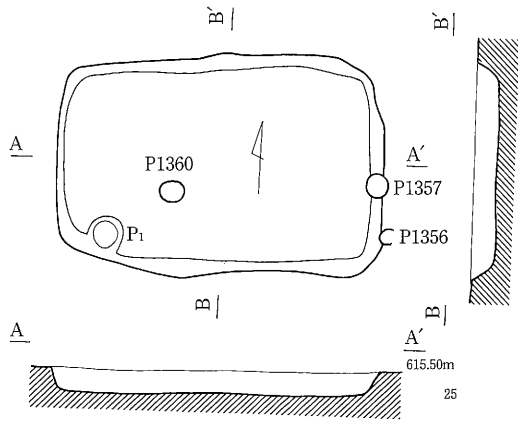


竖28遺物出土状況



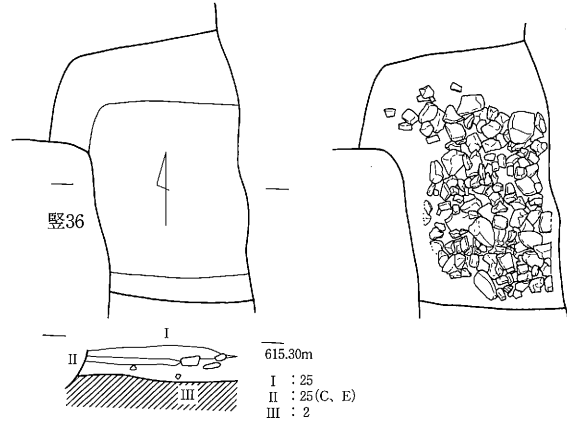
第24図 中世の遺構(8)

第29号竖穴状遺構

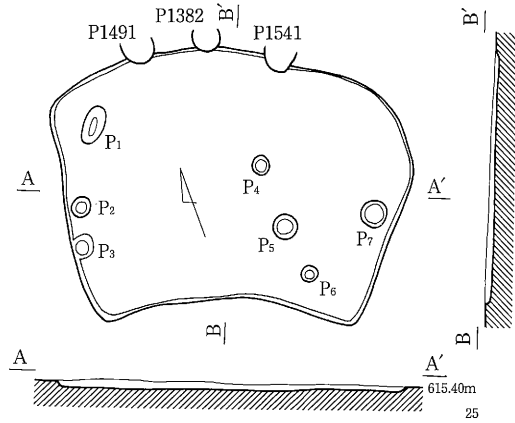


第32号竖穴状遺構

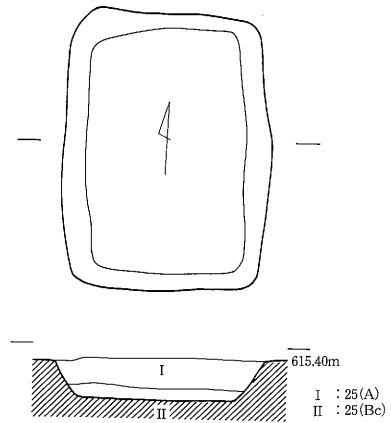
竖32遺物出土状況



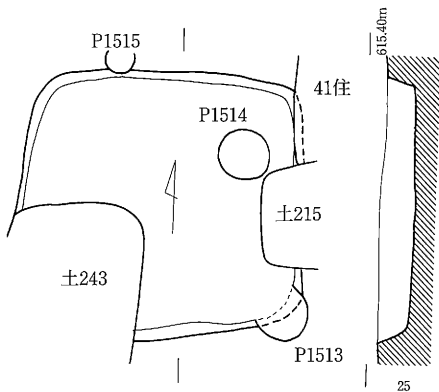
第30号竖穴状遺構



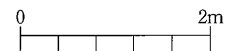
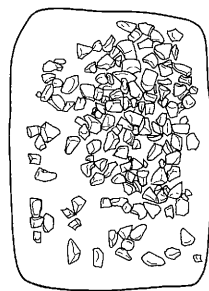
第36号竖穴状遺構



第37号竖穴状遺構

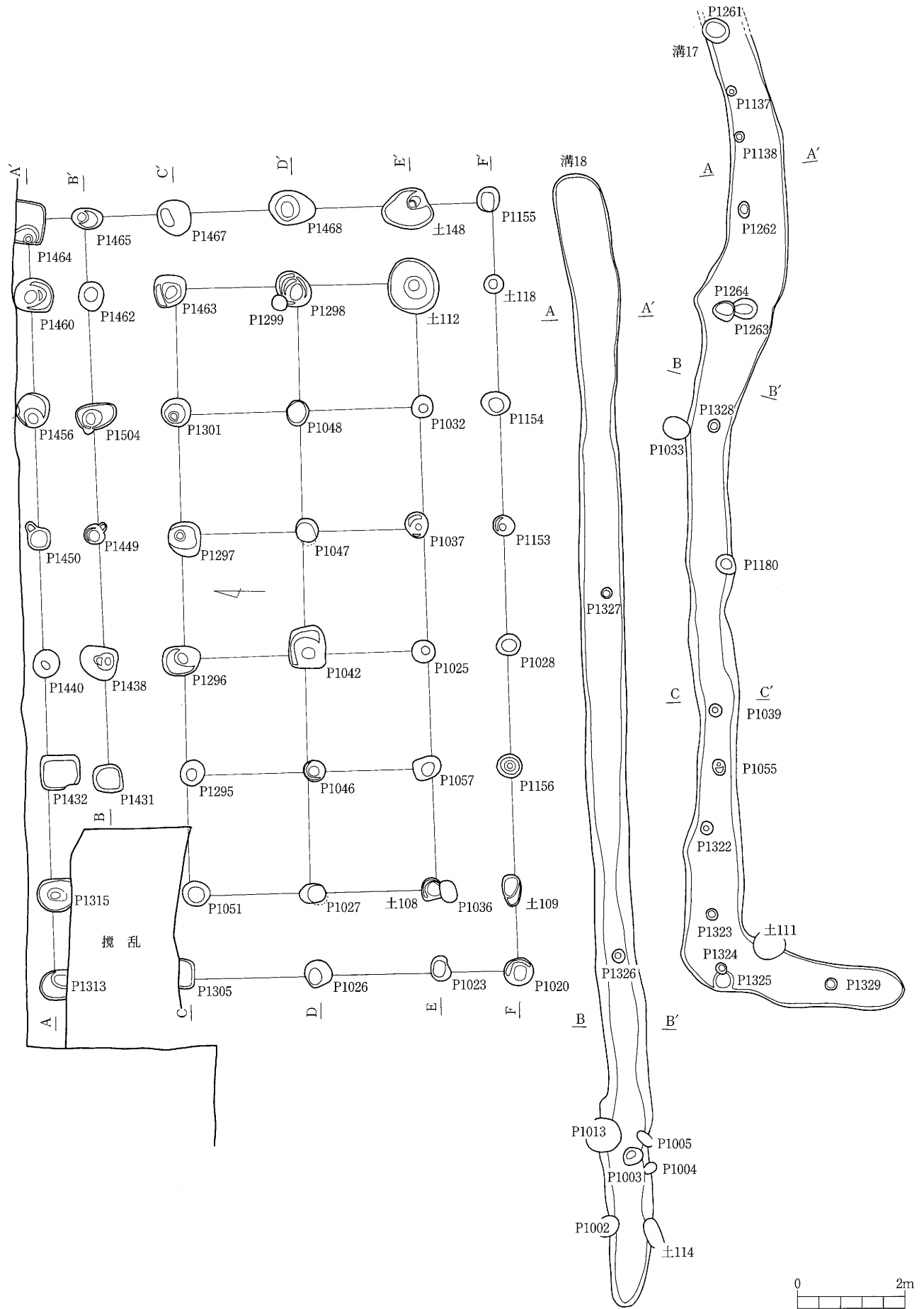


竖36遺物出土状況

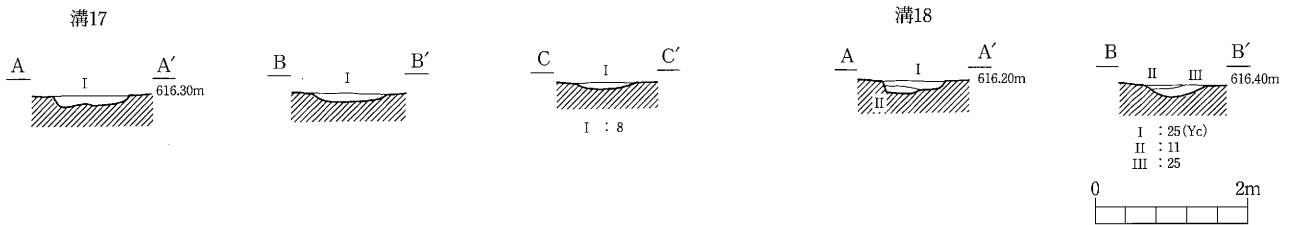
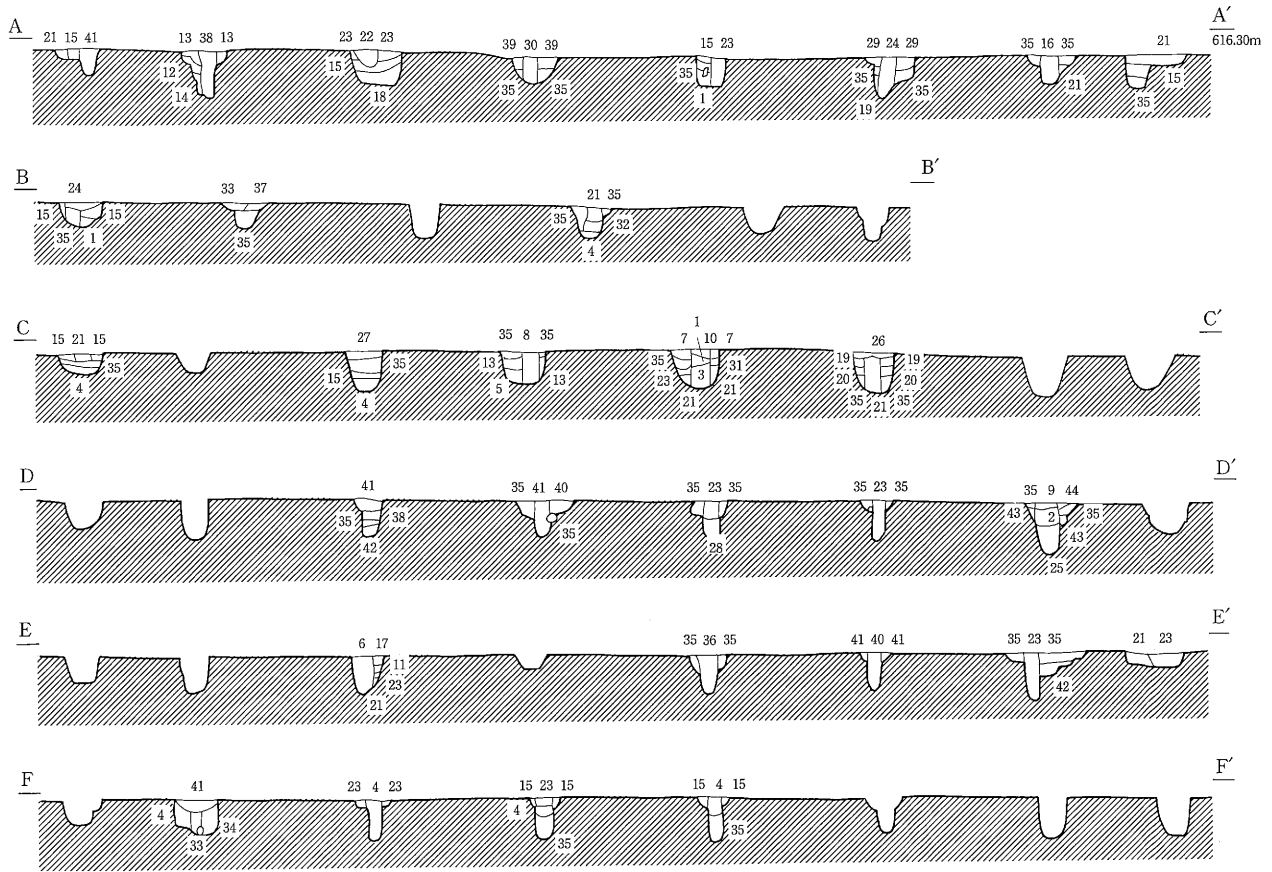


第25図 中世の遺構(9)

第6号掘立柱建物址



第26図 中世の遺構(10)

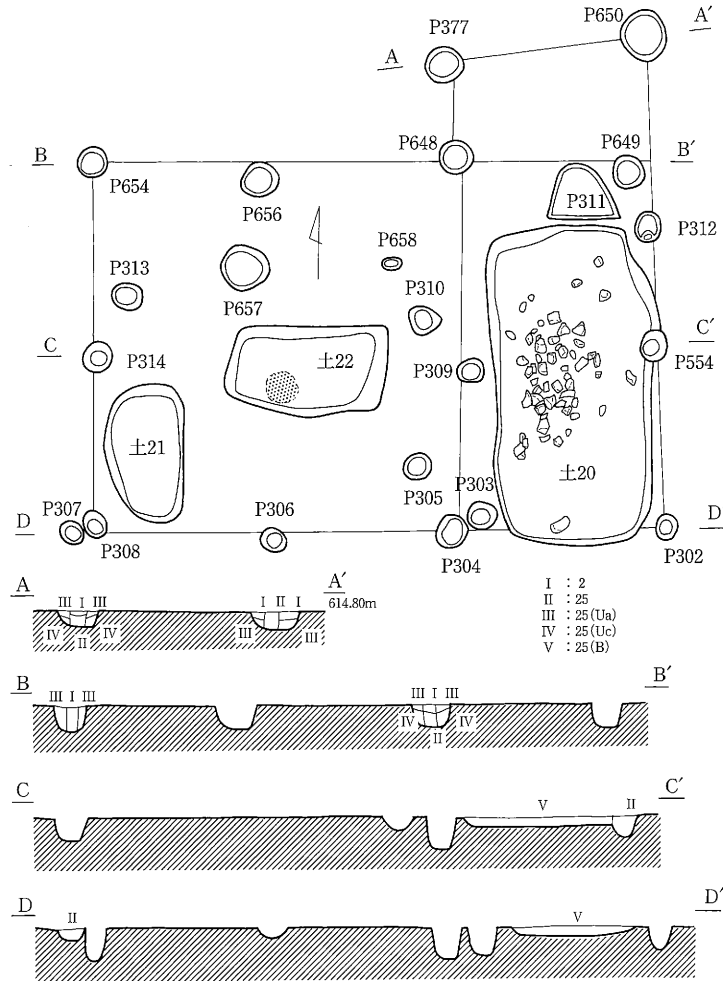


建6 土層名一覧

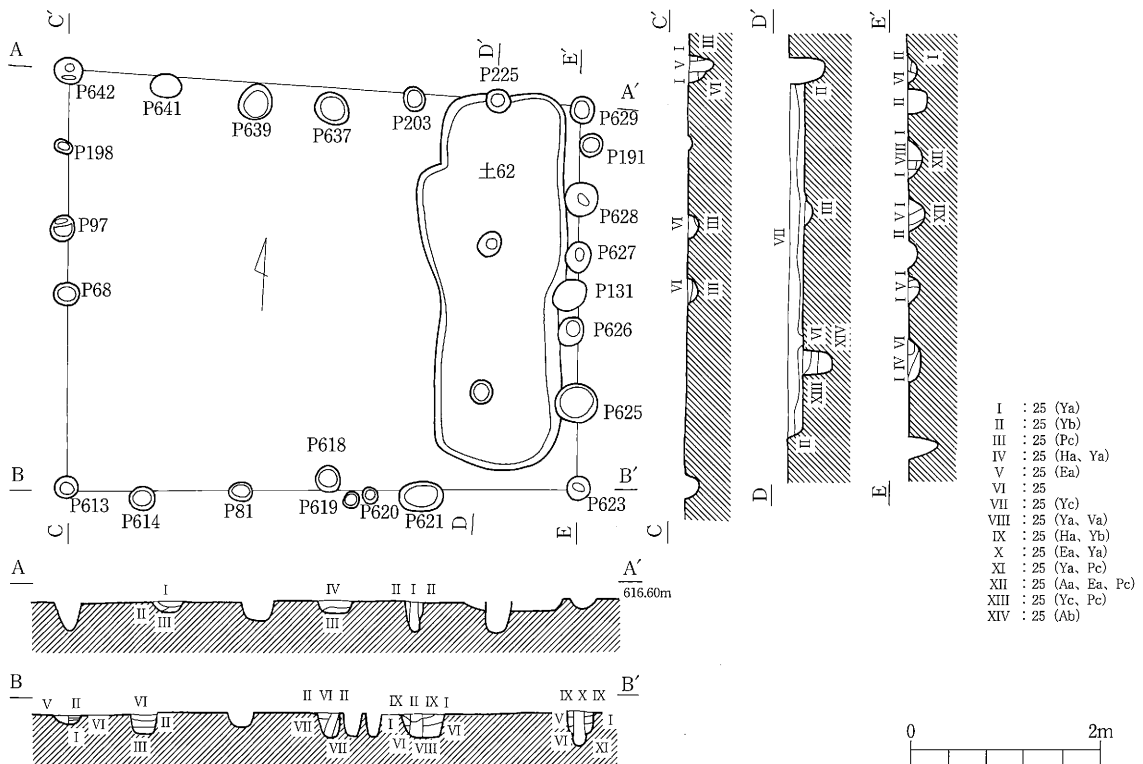
1 : 1	23 : 11
2 : 1 (Cc, Eb)	24 : 11 (Cb, Eb)
3 : 1 (Pb)	25 : 11 (Cc, Eb)
4 : 2	26 : 11 (Cc, Ec)
5 : 2 (Ab)	27 : 11 (Cc, Ec, Yb)
6 : 2 (C, E)	28 : 11 (Eb)
7 : 2 (Ca, Ea)	29 : 11 (Eb, L)
8 : 2 (Cb, E)	30 : 11 (Ec)
9 : 2 (Cc, Eb)	31 : 11 (Pb)
10 : 2 (Cc, Ec)	32 : 11 (Yc)
11 : 2 (Eb)	33 : 24
12 : 2 (U, Hb)	34 : 24 (Cb, Eb)
13 : 2 (Ub)	35 : 25
14 : 2 (Uc)	36 : 25 (A)
15 : 8	37 : 25 (Cb, E)
16 : 8 (C, Eb)	38 : 25 (Cb, Eb)
17 : 8 (Ec)	39 : 25 (D, Eb)
18 : 8 (Pb)	40 : 25 (Ea)
19 : 8 (Yb)	41 : 25 (Eb)
20 : 8 (Vb)	42 : 25 (Ec)
21 : 10	43 : 25 (Yb)
22 : 10 (E, Yb)	44 : 25 (Yc)

第27図 中世の遺構(11)

第1号掘立柱建物址

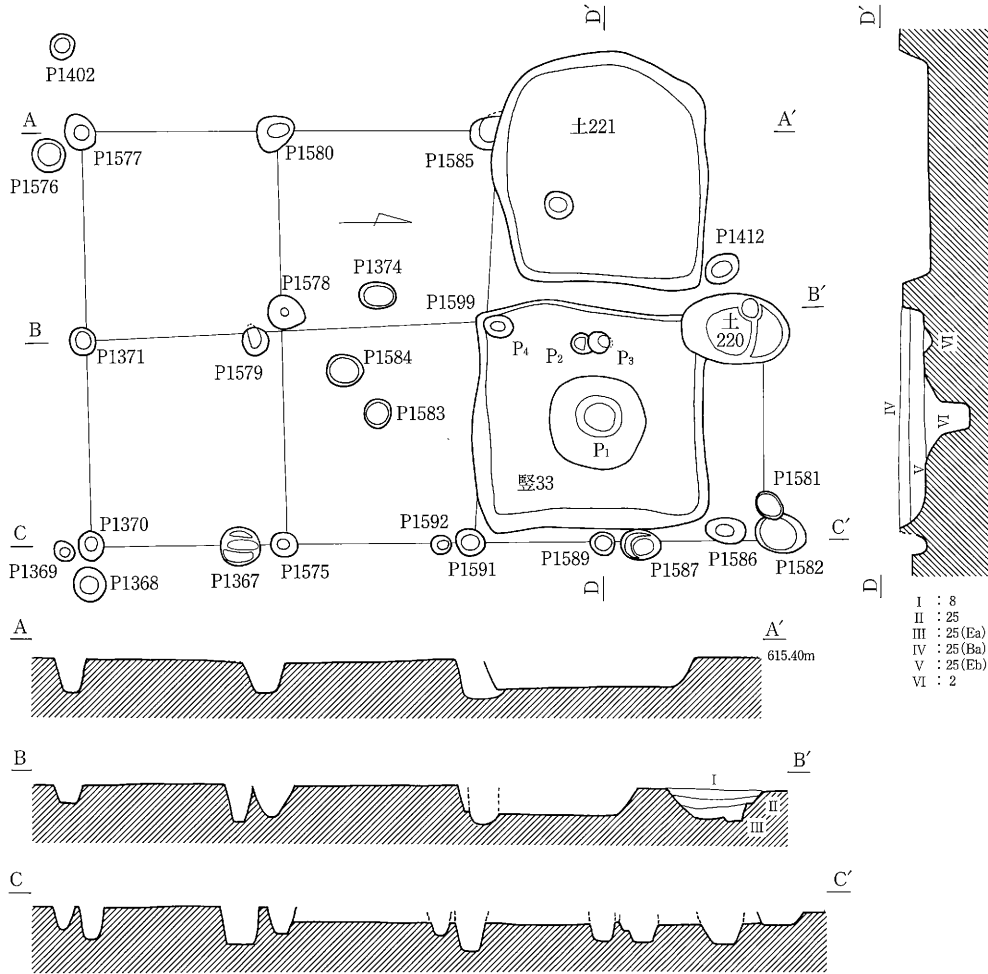


第3号掘立柱建物址



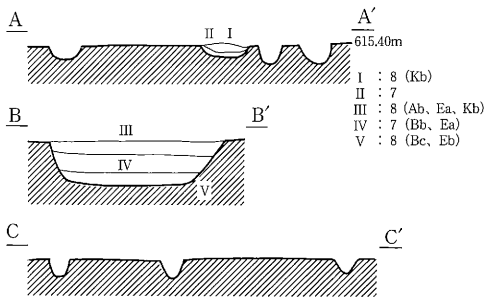
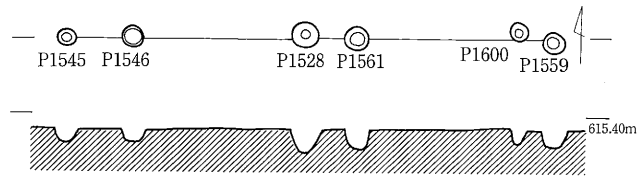
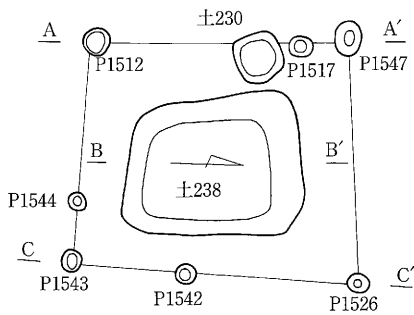
第28図 中世の遺構(12)

第7号掘立柱建物址

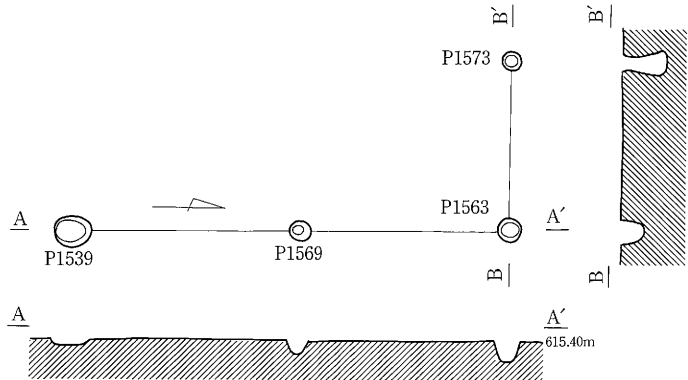


第8号掘立柱建物址

柱穴列3

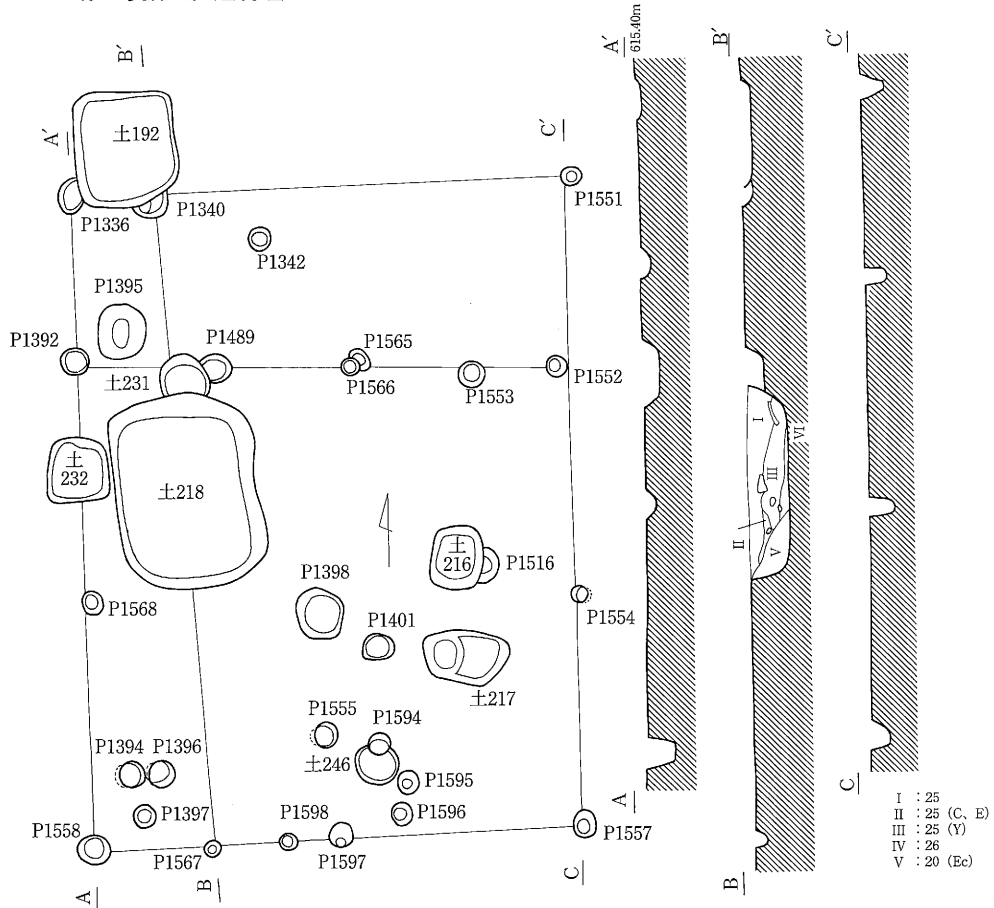


柱穴列2

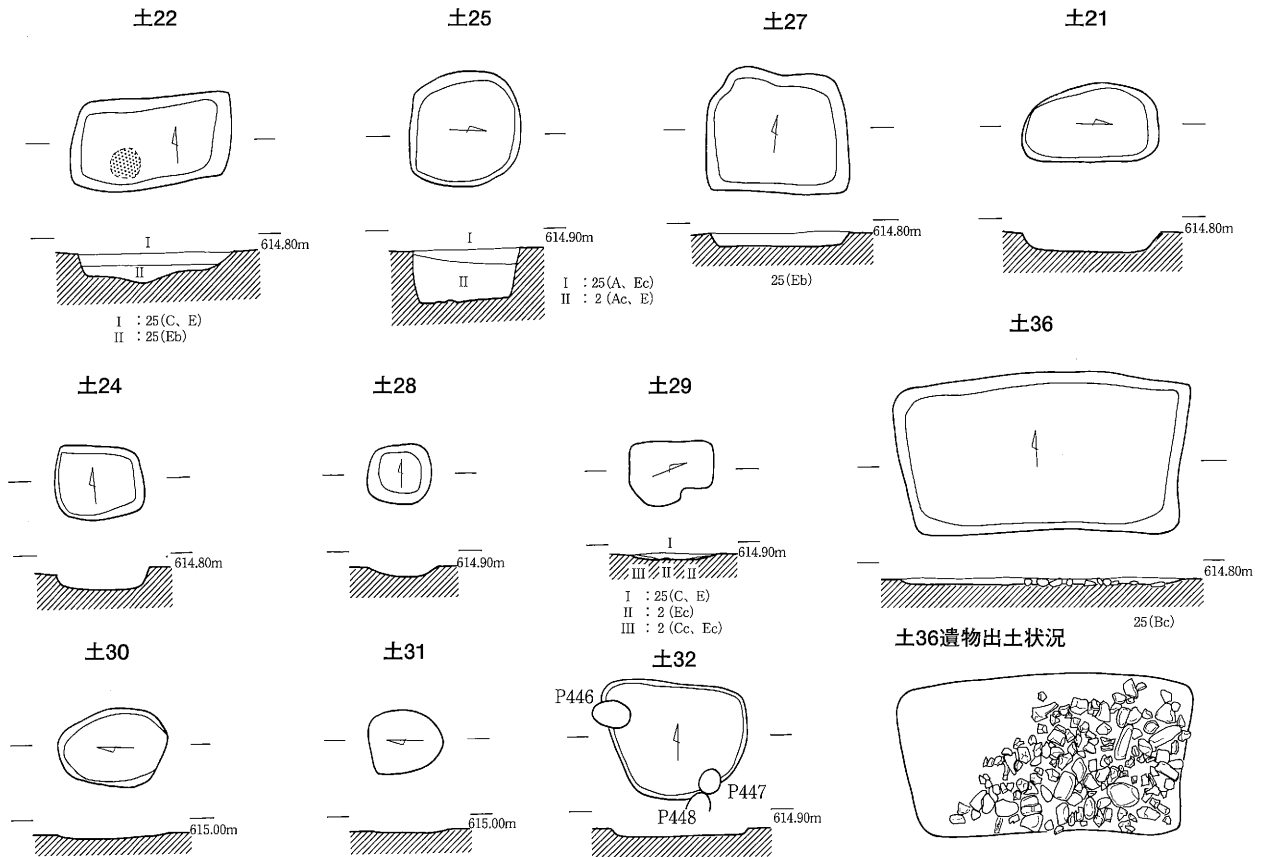


第29図 中世の遺構(13)

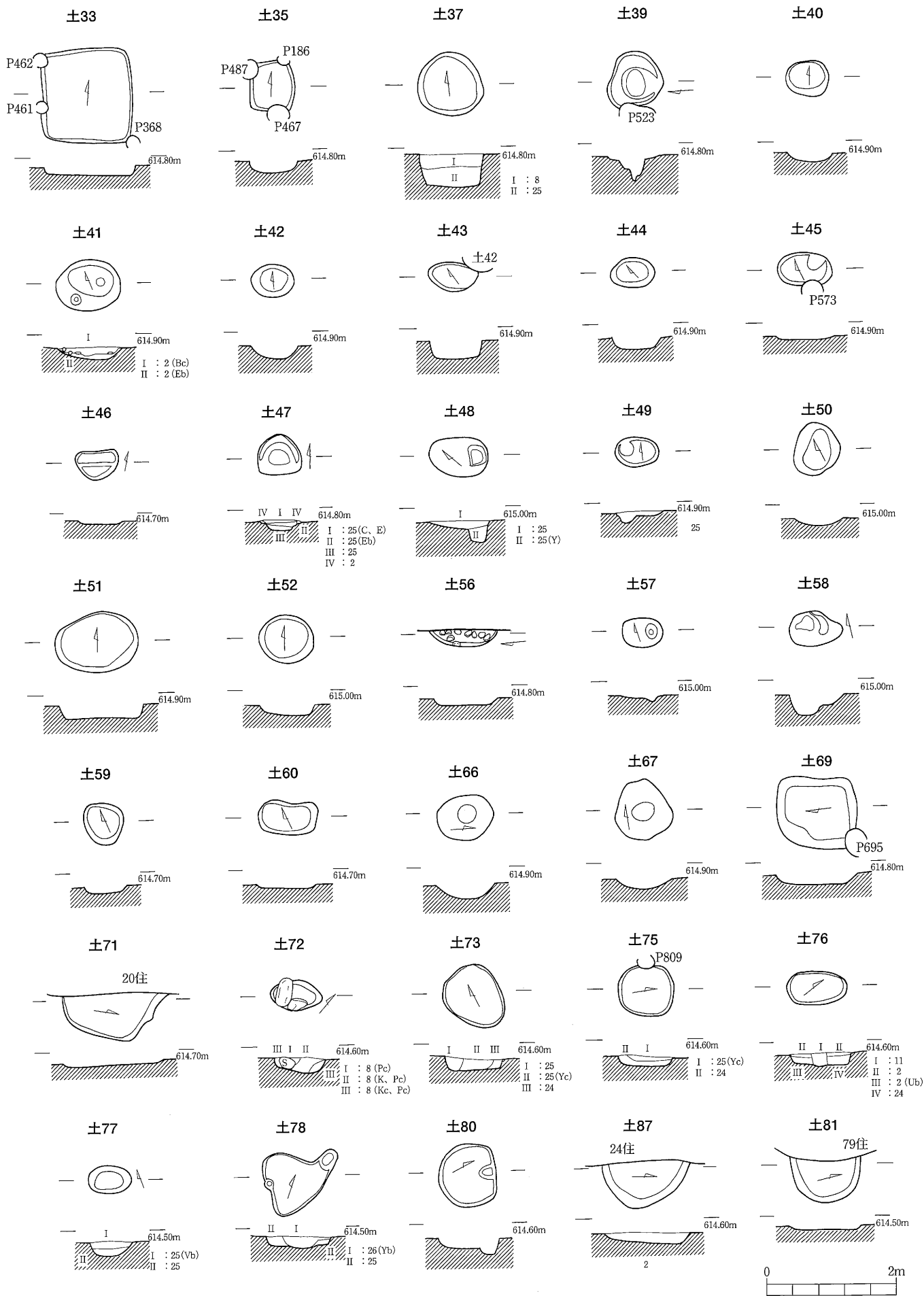
第9号掘立柱建物址



土坑

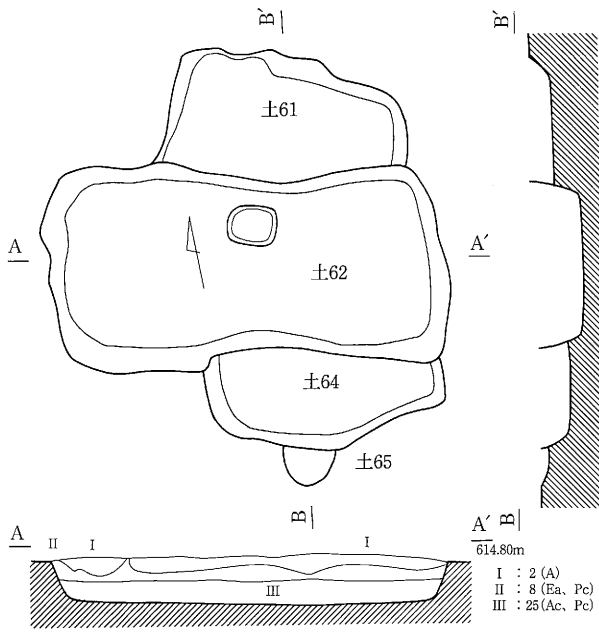


第30図 中世の遺構(14)

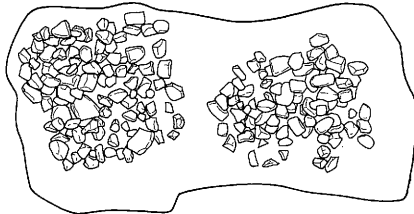


第31図 中世の遺構(15)

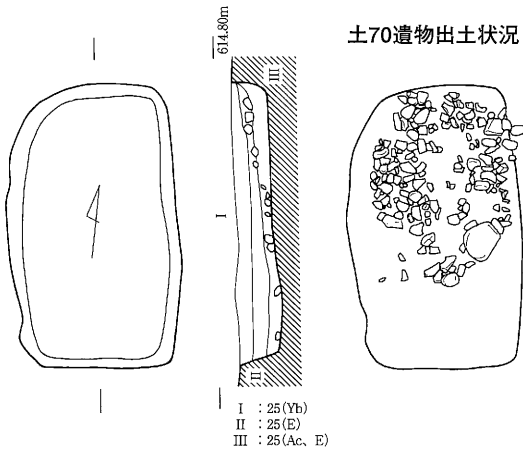
±61・62・64・65



±62遺物出土状況



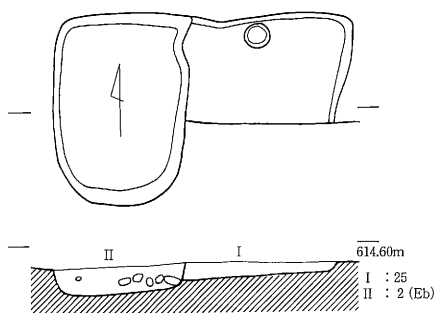
±70



±84

±83

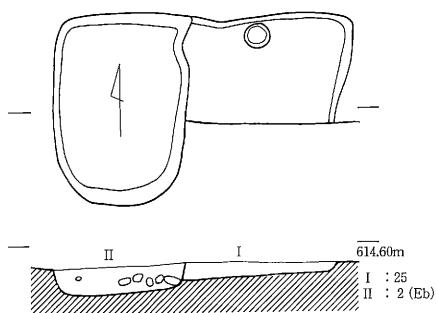
±84遺物出土状況



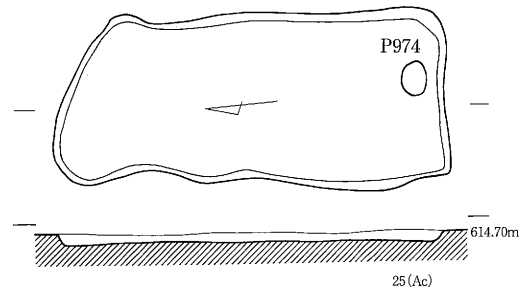
±84

±83

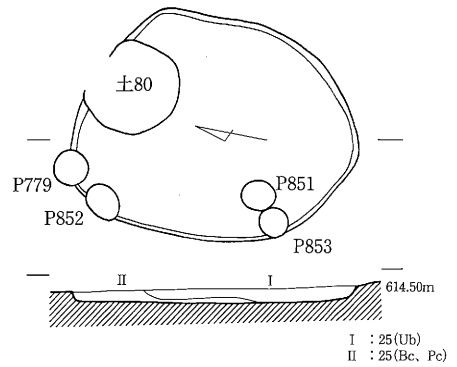
±84遺物出土状況



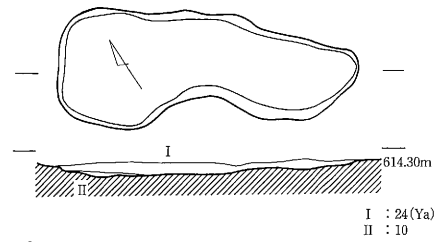
±63



±79

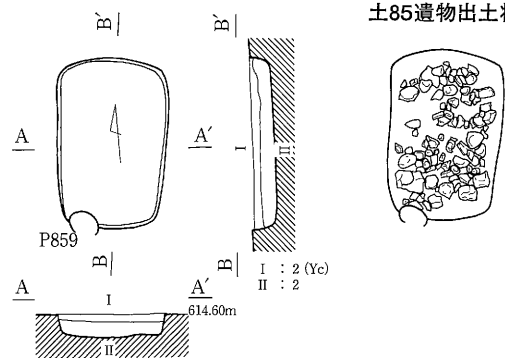


±82



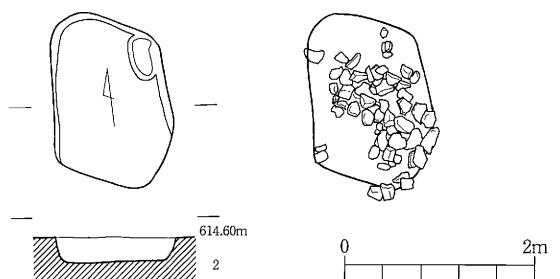
±85

±85遺物出土状況

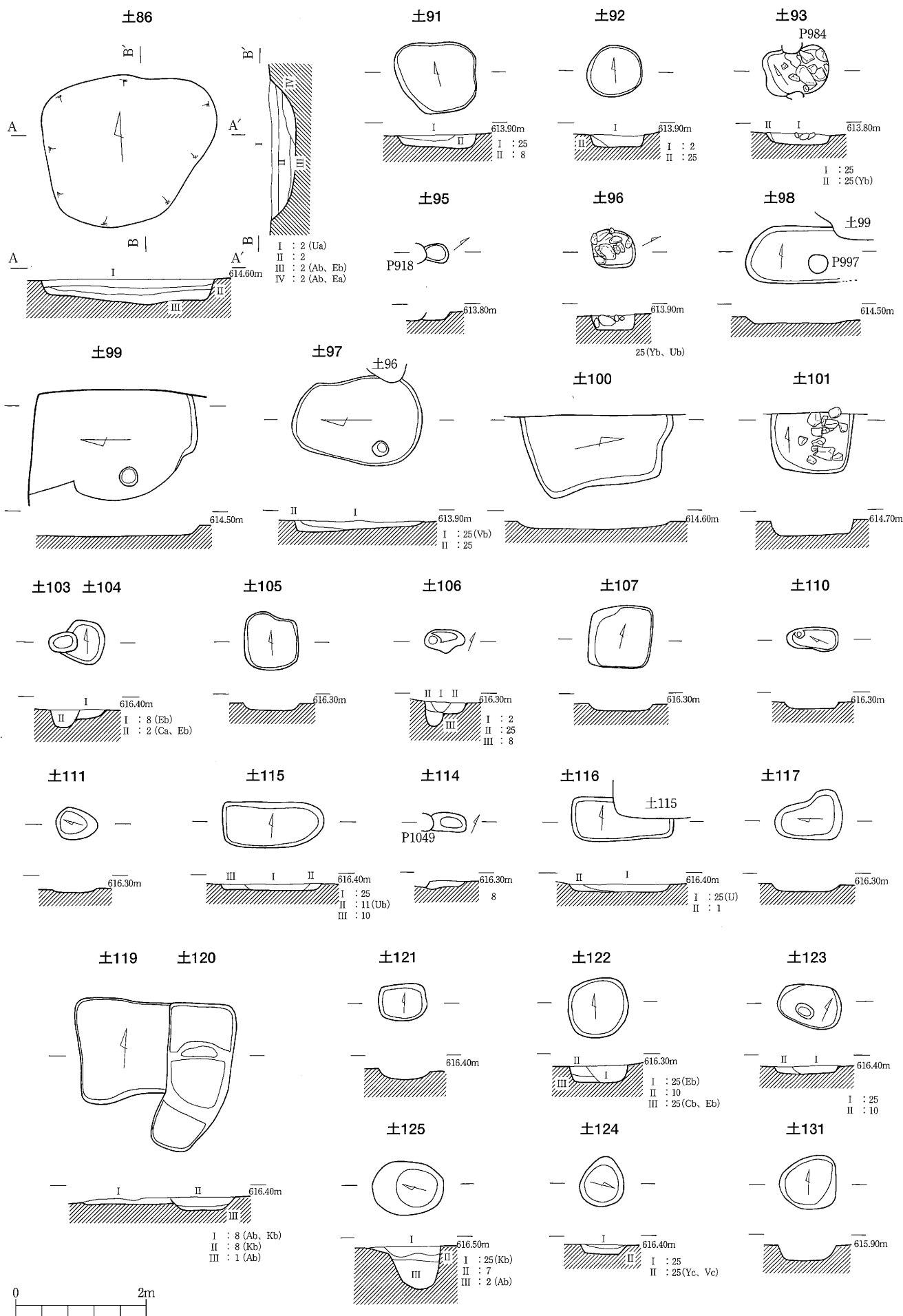


±88

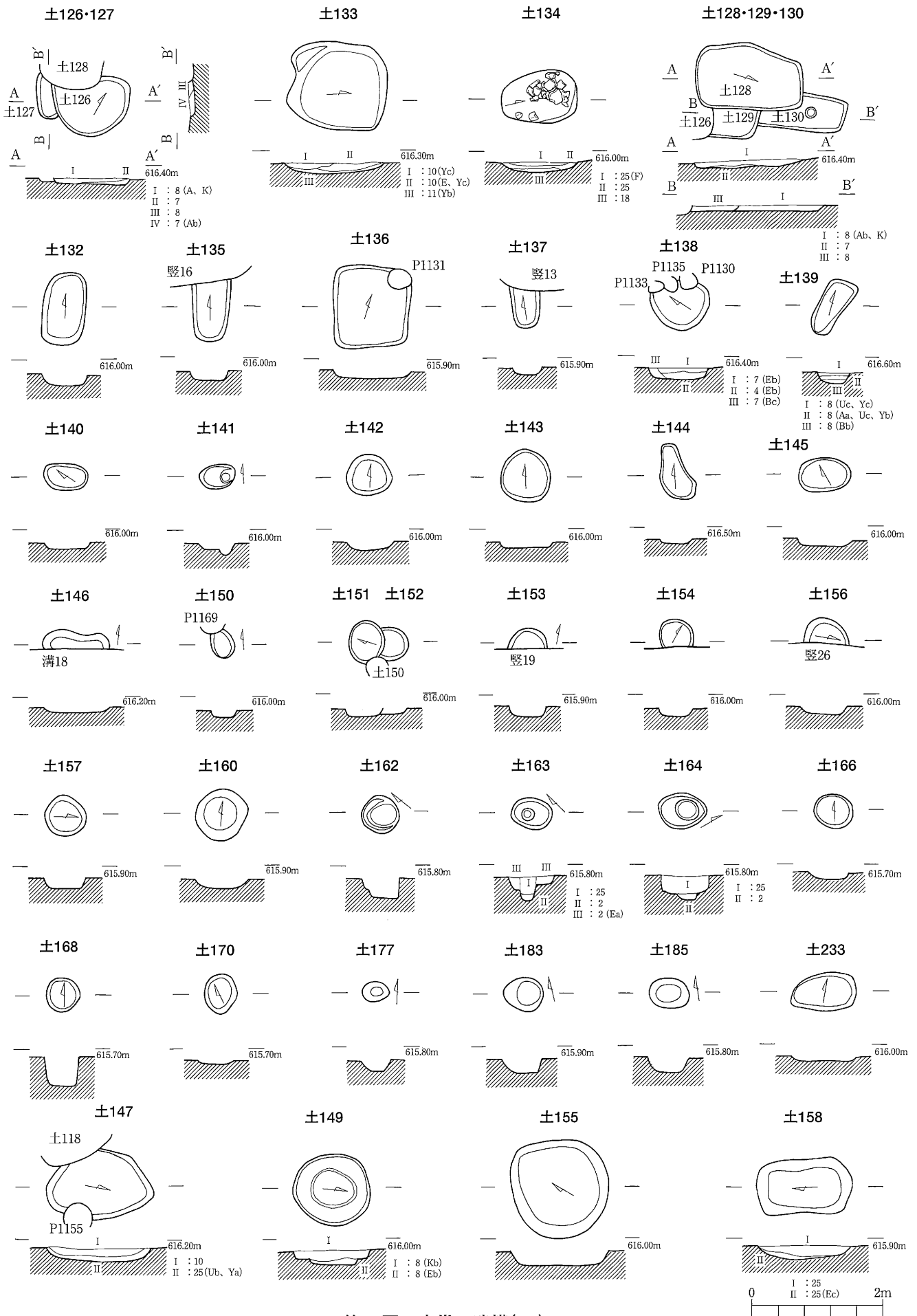
±88遺物出土状況



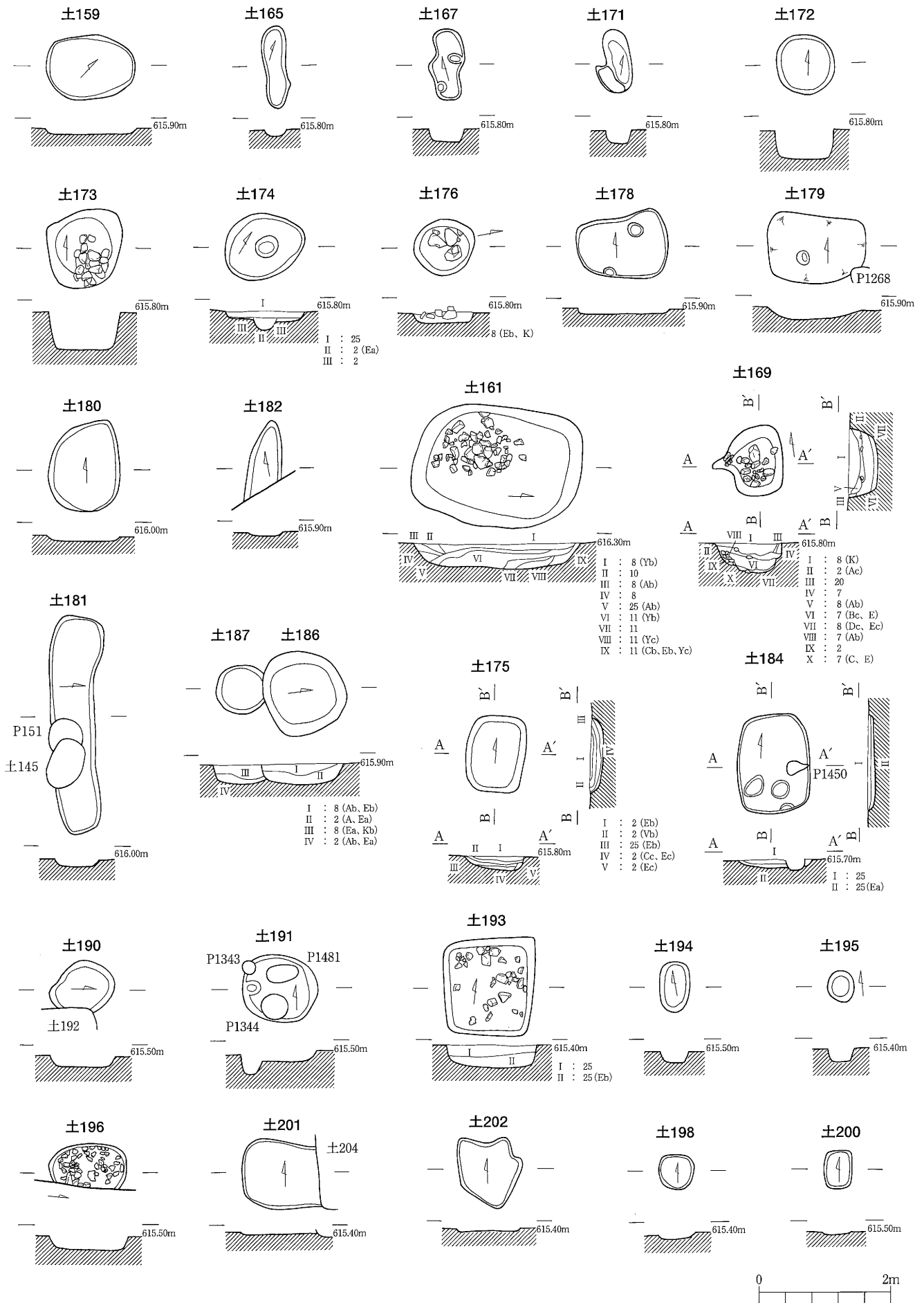
第32図 中世の遺構(16)



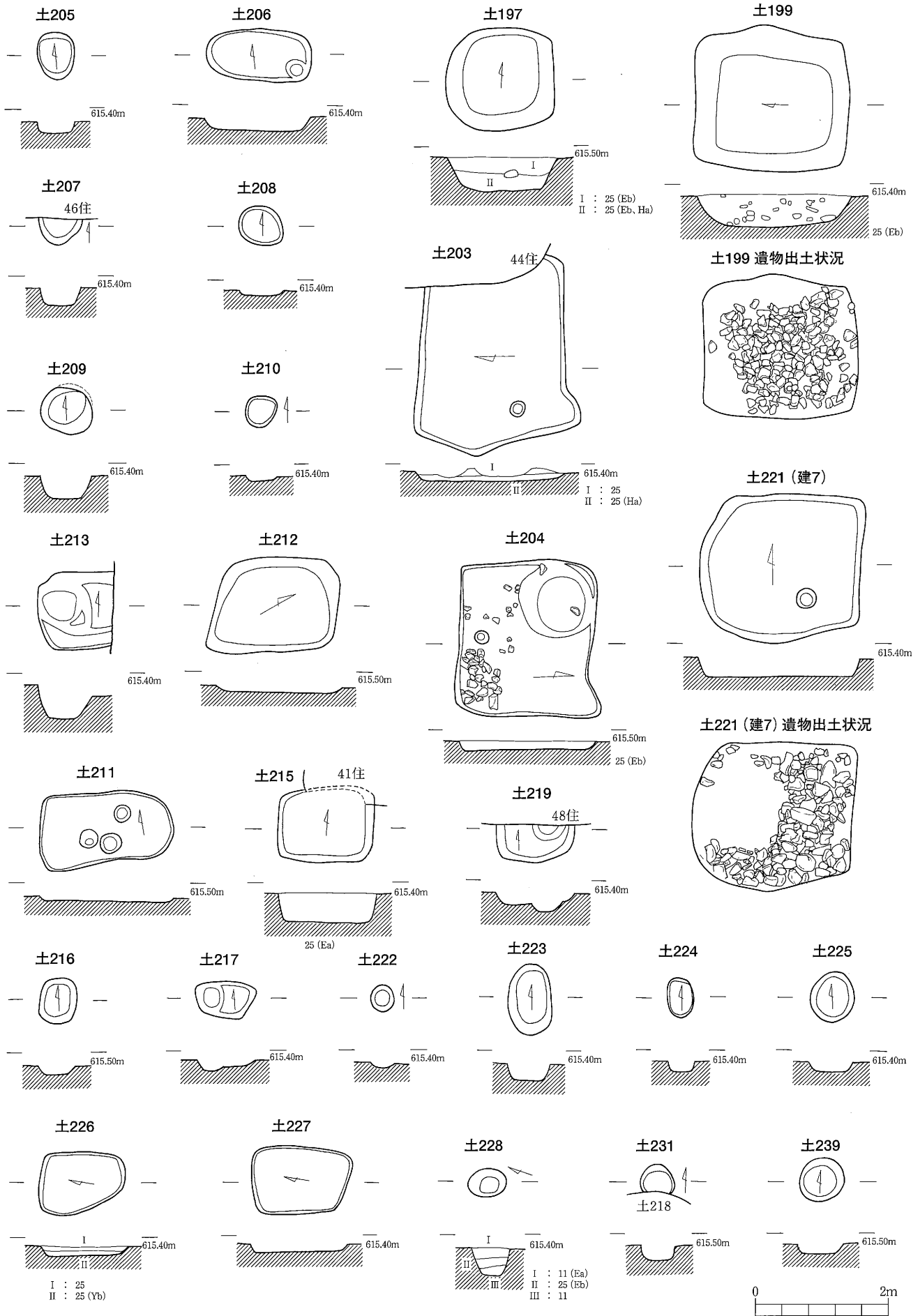
第33図 中世の遺構(17)



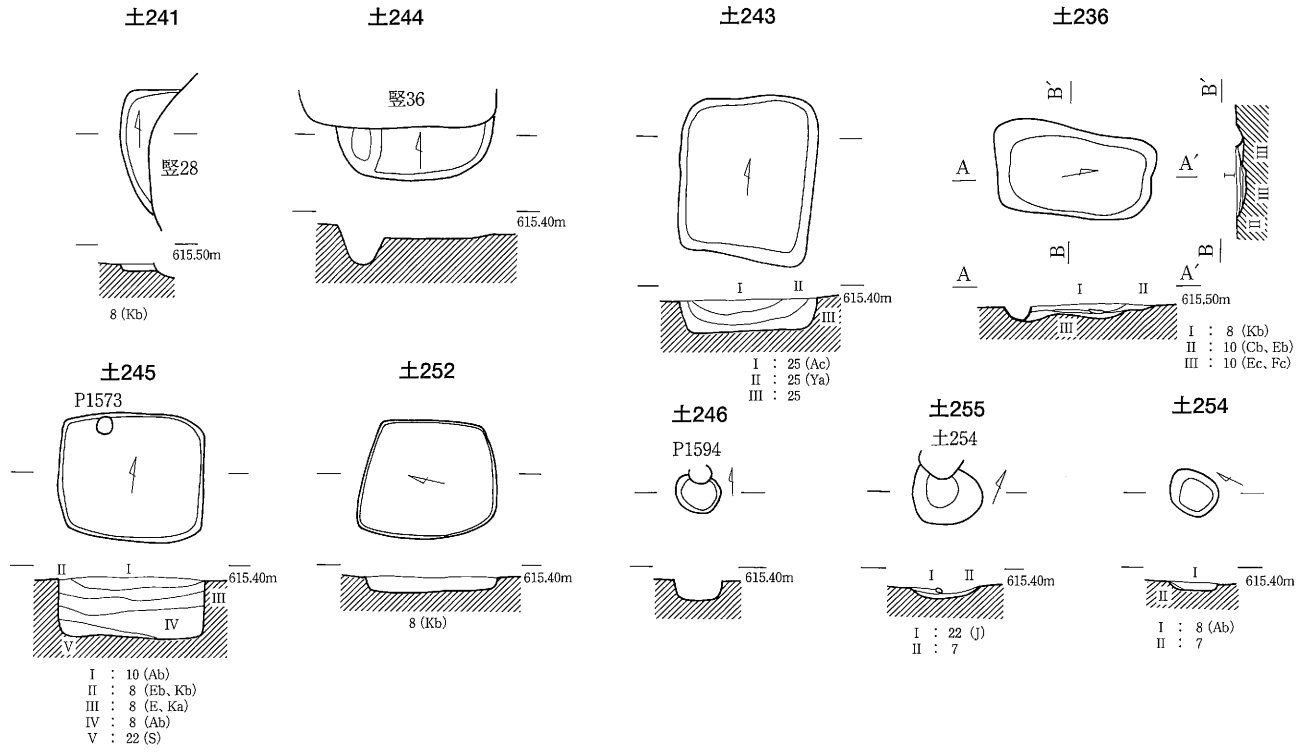
第34図 中世の遺構(18)



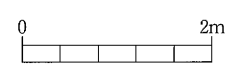
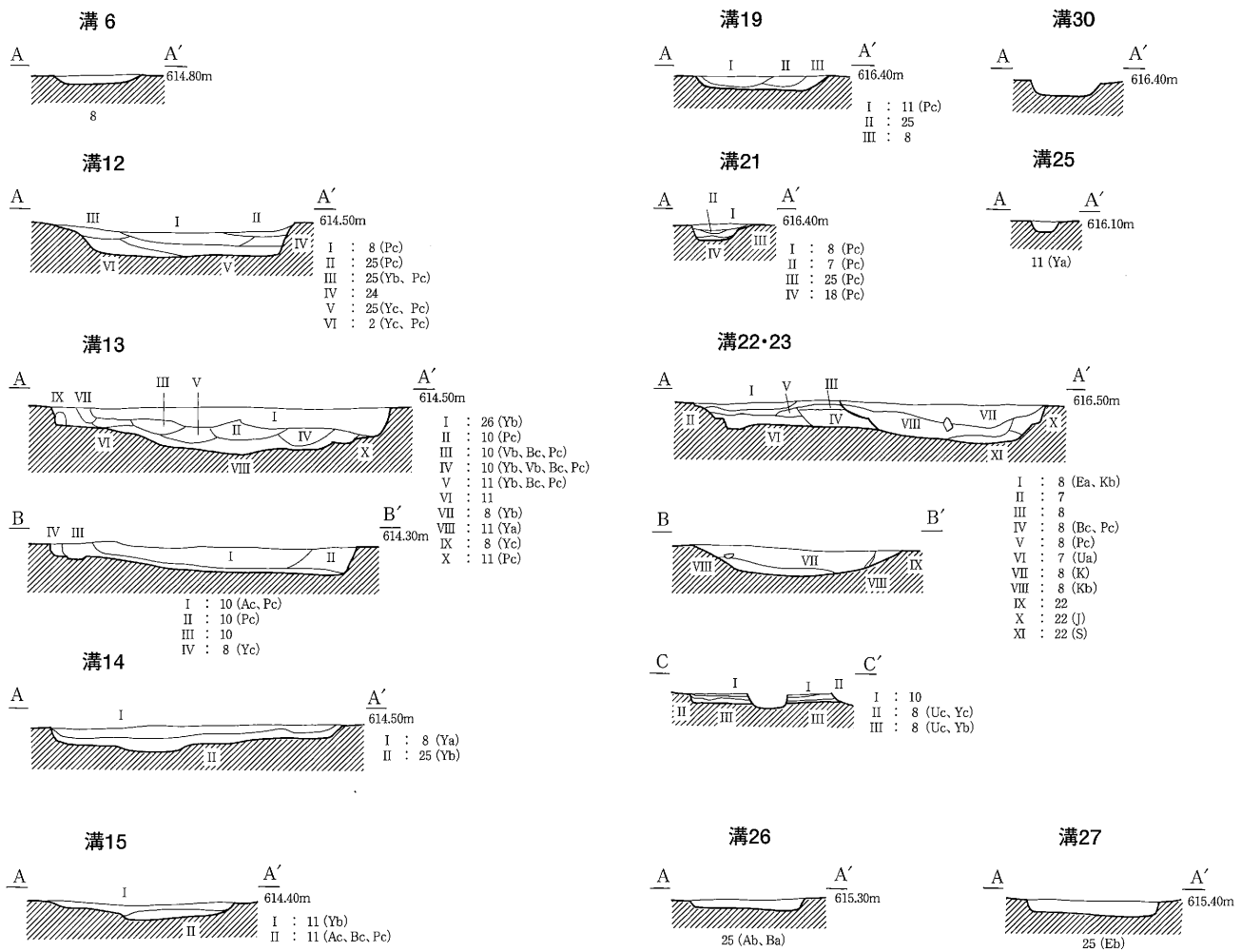
第35図 中世の遺構(19)



第36図 中世の遺構(20)



溝



第37図 中世の遺構(21)

V 遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 平安時代の土器・陶器

今回の調査では平安時代前期および平安時代後期の土器群が住居址などの遺構に伴って出土している。年代的には8世紀後葉～9世紀前葉のものと、10世紀後葉～11世紀前葉のものがあるが、その間の時期の資料は見られず、断絶が認められる。

①種別・器種

今回の調査で出土した古代の土器の種別は、土師器・黒色土器A・黒色土器B・須恵器・灰釉陶器である。各々の器種構成は以下の通りである。これら種別・器種の一覧を第38図に示した。

土師器 食器に杯A・盤BⅡ・椀がある。杯Aは大小2法量に分かれ、小型のもの（AⅡ）と大型のもの（AⅢ）とがある。煮炊き具には羽釜A・甕・小型甕Dがある。

黒色土器A 食器の椀・盤BⅡがある。

黒色土器B 食器の椀がある。

須恵器 杯A・B、杯蓋B、壺蓋A、甕が見られる。今回出土したものの大半は杯である。美濃須衛窯産の甕も出土している。

灰釉陶器 椀、皿、輪花皿、広口瓶が見られるが、ほとんどは椀に占められる。帰属時期は大原2号窯式～丸石2号窯式にわたるが、虎溪山1号窯式が多数を占める。

②住居址出土土器群の様相

遺構出土の土器群の様相を、量的にまとまっている住居址出土土器群を中心に、平安時代前期と平安時代後期とに分けて見てみたい。

<平安時代前期の土器群>

該期の土器群は全ての調査区から出土しているが、遺構に伴っているのはC区のもののみであり、量的にもC区以外のものはごくわずかである。年代的には9世紀代の範囲に収まる。土器群の構成の全体を窺えるまとまりはなく、図示できたものも食器に偏っている。C区20・21・30住出土土器群が該当する。

20住出土土器群（69～71）

3点を図示。土器は覆土中及び床面付近から散漫に出土し、出土量は少ない。図示できたものはいずれも床面付近から出土している。須恵器杯A・Bがある。杯Aはともに底部が回転糸切り未調整のもので、杯Bは高台が外側に開きふんばる形態のものである。高台底面の中央にくぼみがあり、外側で接地する。以上の特徴から5～6期あたりに位置づけられよう。

21住出土土器群（72～79）

8点を図示。土器は床面付近を中心に出土している。図示できたものは須恵器の食器のみで、杯A・B・杯蓋B・盤がある。杯Aの底部は77を除き回転糸切り未調整のもので、杯Bは高台がまっすぐ降りる形態のものである。杯蓋Bは端部がく字に湾曲する。以上の特徴から5期に帰属するものと考えたい。

30住出土土器群（93～97）

4点を図示。土器は床面付近を中心に出土している。須恵器杯A・壺蓋・甕がある。杯Aは底部が回転糸切り未調整で、外面のロクロ目が強く、薄手のもので、94の外傾指数は122である。このことから6～7期に位置づけておきたい。30住からは美濃須衛窯産の甕（97）も出土している。美濃須衛窯産の須恵器は6期以降

基本的に消滅するが、搬入が終了した後も使用され続けたものであろうか。

その他の遺構出土土器群

28住からは土師器小型甕D(92)が出土しているが、明確な帰属時期は不明。図示できなかったが、22住からは須恵器杯A・B・杯蓋Bが、29住からは須恵器杯A・土師器小型甕Dが出土しており、平安時代前期のものである。なお22住の80は、出土地点から26住に帰属するものである。

<平安時代後期の土器群>

該期の土器群はすべての調査区で出土しており、いずれも遺構に伴っている。食器の主体が灰釉陶器碗・黒色土器A碗・土師器杯により構成され、煮炊き具の主体を羽釜が占める土器群で、11～12期(10世紀後葉～11世紀前葉)にわたる。

5住出土土器群(1)

1点を図示できたのみで、出土量もわずかである。土師器ミニチュア土器を図示した。この他に灰釉陶器碗、黒色土器A碗も出土している。明確な帰属時期は不明。

7住出土土器群(2～4)

3点を図示できたのみで、出土量は少ない。図示できたのは食器の灰釉陶器碗のみで、器形の全体を窺えるものもない。2は口縁部内面に沈線があり、深碗の形態をとるものか。施釉は漬掛けによる。底部付近外面の調整はロクロナデのものと回転ヘラケズリのものがある。底面は回転糸切り未調整のものが確認できる。高台は断面形が内外とも稜がはっきりとしない。虎溪山1号窯式か。本址出土土器群は11～12期に帰属するものと考えたい。

旧8住出土土器群(6・9・16・19・20・27)

6点を図示。遺物は床面から多く出土している。食器に土師器杯A、黒色土器A碗、灰釉陶器輪花皿・皿、煮炊き具に土師器甕がある。土師器杯A(6)は口径11.6cm、器高3.7cmで、法量が大小に分化しているか判断つかない。輪花皿は輪花が4単位で、底面に墨書があるが、判読できない。胴部下半外面はロクロナデ調整で、底面は回転糸切り。皿(19)は胴部下半がロクロナデで、底面は回転ヘラケズリ。ともに虎溪山1号窯式か。11～12期に帰属するものか。

8住出土土器群(5・7・8・10～15・17・18・21～26・28)

18点を図示。遺物は床面及びカマド付近から多く出土し、特にカマド周辺からまとまって出土している。食器に土師器杯A、黒色土器A碗、灰釉陶器碗が、煮炊き具に土師器甕・羽釜Aがある。土師杯A(5)は口径10.0cm、器高2.8cmを測る。黒色土器A碗は、深碗形を呈するものが多く見られ、法量も口径14.4～15.2cm、10.6～12.8cmの大小2法量に分化している。灰釉陶器碗は、比較的器高が低いもので、深碗の形態をとるものは見られない。いずれも底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。底部付近外面の調整はロクロナデと回転ヘラケズリがあり、底面は回転ヘラケズリ調整のものと、回転糸切り未調整の双方が見られる。虎溪山1号窯式を主体とするものか。黒色土器A碗の法量が大小に分かれていることから11期以降だが、土師器杯Aは法量が分化しているか不明であり、13期までは下らないと思われる。以上から本土器群は11～12期の間位置づけておきたい。

10住出土土器群(29～49)

21点を図示。遺物は床面から多く出土している。食器に土師器杯AⅡ・Ⅲ・碗・盤BⅡ、黒色土器A碗、灰釉陶器碗が、煮炊き具に羽釜・小型甕Dが見られる。土師器杯Aは口径10.6～11.6cmの小型のAⅡと口径13.2cmの大型の杯AⅢがあり、法量が大小に分化している。灰釉陶器碗は深碗の形態をとるものが多いが、器高の低いものもある。底部付近外面はロクロナデのものと回転ヘラケズリのものがある。底面は回転糸切り未調整のもののみである。虎溪山1号窯式に比定されよう。以上の特徴から本土器群は12期に帰属するものであろう。

17住出土土器群 (57~66)

10点を図示。遺物はほとんどがカマド周辺及び床面から出土し、出土量も多い。食器に土師器杯AⅡ・椀・盤BⅡ、黒色土器A椀、黒色土器B椀、灰釉陶器椀が、煮炊き具に土師器甕・羽釜Aがある。土師器杯(57)は口径10.7cm、器高3.2cmで、法量が大小に分化したもののうち小型のAⅡと思われる。黒色土器A椀(61)は小椀で内面に暗文がある。深椀の形態をとるもの(61)もある。灰釉陶器椀は底部付近外面の調整はロクロナデで、底面は回転糸切り未調整のものと回転ヘラケズリの両者が見られる。高台は内外とも稜ははっきりとしない。虎溪山1号窯式に比定できる。以上から本土器群は12期に帰属するものであろう。

26住出土土器群 (81~91)

11点を図示。遺物はカマド周辺及び床面付近を中心に出土し、出土量も多い。食器に土師器杯、黒色土器A椀、灰釉陶器椀・皿、山茶椀、貯蔵具に灰釉陶器広口瓶がある。このうち山茶椀と土師器杯(81)は他の土器群に比べて新しいものと思われ、混入と考えたい。灰釉陶器椀は深椀の形態をとるもの、比較的器高の低いもの及び小型のものがあるが、量的には深椀が卓越する。底部付近外面の調整はロクロナデによるものがほとんどで、回転ヘラケズリによるものは1点のみ。底面は回転糸切り未調整による。高台は直立するもので断面形状が細長い三角形を呈する。虎溪山1号窯式が主体を占めるものと思われるが、87のみやや古い可能性がある。図示できたものが食器に偏っており、詳細がわからないが、12期に帰属するものであろう。

37住出土土器群 (113・114)

3点を図示。遺物は少量が覆土中より散漫に出土した。詳細な帰属時期は不明。113の土師器は摩滅が著しく、器種不明。灰釉陶器椀は深椀の形態をとり、口縁部の外反はわずかで、胴部下半は回転ヘラケズリによることから虎溪山1号窯式のものか。土器群の帰属時期は判然としない。

39住出土土器群 (115・116)

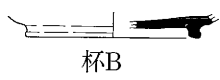
2点を図示。遺物は覆土中からわずかに出土したのみである。詳細な帰属時期は不明。図示できたのは灰釉陶器椀のみで、115は深椀の形態をとる。116は高台は低い三角高台で、底面は回転糸切り未調整による。丸石2号窯式に比定できよう。土器群の帰属時期は判然としない。

その他の遺構出土土器群

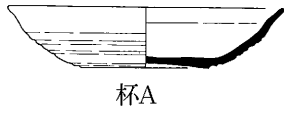
該期の遺物が遺構に伴って出土していると思われるもののうち、図示できたのはA区P282・B区土26、C区P668・826・929・988の土器群である。図示できたのは灰釉陶器椀がほとんどである。灰釉陶器椀は虎溪山1号窯式を主体とし、丸石2号窯式も見られる。注目したいのはP826出土の土器群(99~101)で、3つが折り重なって出土した。99と100は完形で出土し、101も破断面が新しいことから本来は完形であったものと思われる。99の土師器杯AⅡは口径9.7cm、器高2.3cmで、法量から14期あたりに帰属するものであろう。100の灰釉陶器椀は胴部下半外面の調整がロクロナデで、底面は回転ヘラケズリによる。高台は断面三角形であり、丸石2号窯式に位置づけられよう。101は外面が回転ヘラケズリ、底面が回転糸切りにより、高台の形状から虎溪山1号窯式か。

食器

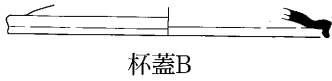
須恵器



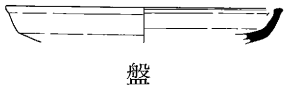
杯B



杯A

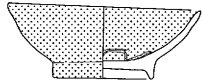


杯蓋B



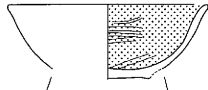
盤

黒色土器B

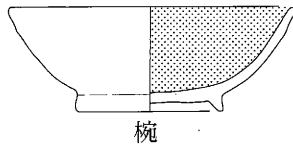


碗

黒色土器A

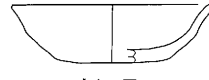


碗(小碗)



碗

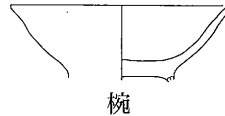
土師器



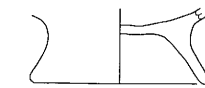
杯A II



杯A III

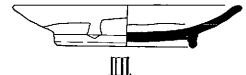


碗



盤B II

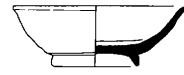
灰釉陶器



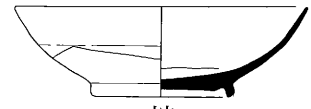
皿



輪花皿



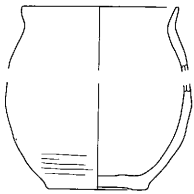
碗



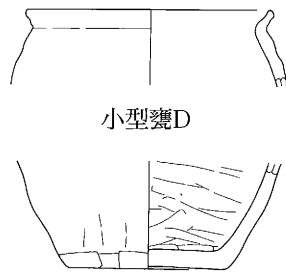
碗

煮炊具

土師器



小型甕D



小型甕D

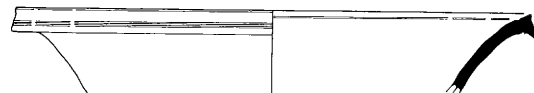
甕

貯蔵具

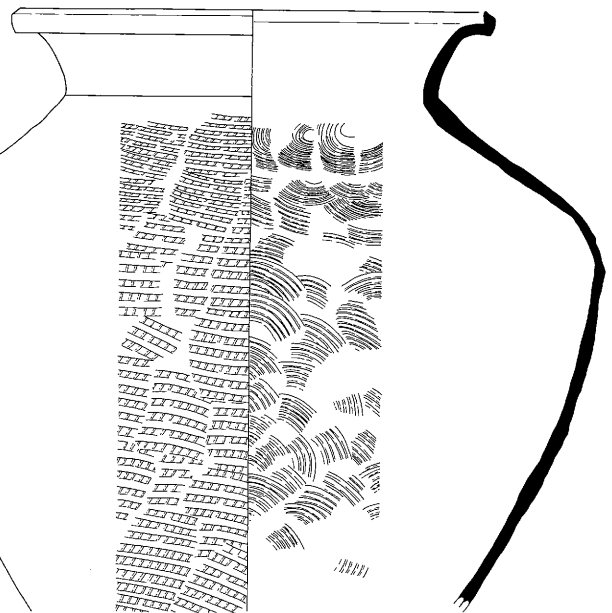
須恵器



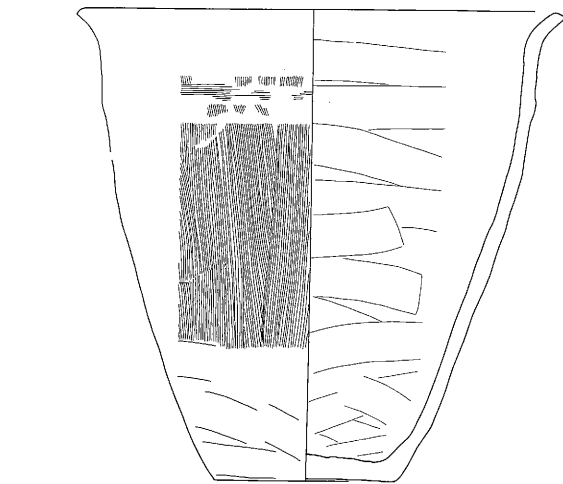
壺蓋A



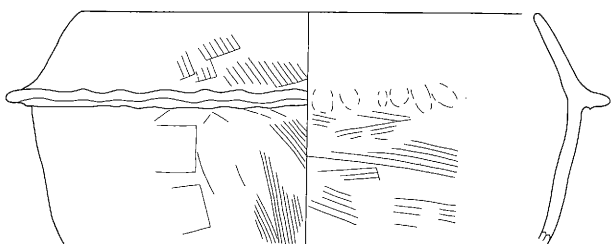
甕A



甕A(美濃須衛窯産)



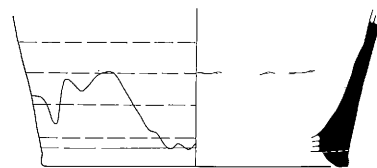
甕



羽釜A



灰釉陶器 広口瓶



第38図 平安時代の土器・陶器器種一覽

第9表 平安時代の土器・陶器一覧表

No.	実測 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			残存度	色 調		整形・調整・形態の特徴	備 考
				口径	底径	器高		外面	内面		
1	5住-1	土師器	ミニチュア					暗褐	暗褐	内・外工具ナデ	
2	7住-1	灰釉陶器	椀	(13.8)			□1/16	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
3	7住-3	灰釉陶器	椀		(7.8)		高台1/10底一部	暗灰	暗灰	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
4	7住-2	灰釉陶器	椀		(7.0)		底1/4	暗灰	暗灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
5	8住-8	土師器	杯A	(10.0)	(4.6)	(2.8)	□1/8底1/3	暗褐	暗褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
6	8住-5	土師器	杯A	(11.6)	4.8	3.7	□1/3底完	褐～橙褐	褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	スス付着
7	8住-7	土師器	杯? 椀?	(12.4)			□3/8	淡褐～暗褐	暗褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
8	8住-9	土師器	杯? 皿?	(15.0)			□1/8	暗褐	褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
9	8住-10	黒色土器A	椀		7.6		高台一部欠底完		暗褐	内面黒色処理のちミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
10	8住-17	黒色土器A	椀		7.4		高台4/5底3/4	褐～暗褐	暗褐	内面黒色処理のちミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切?	
11	8住-16	黒色土器A	椀		6.8		底4/5	褐～暗褐	黒	内面黒色処理のちミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
12	8住-14	黒色土器A	椀		7.8		底完	暗褐	黒	胴部ロクロナデ、内面内面黒色処理のちミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
13	8住-12	黒色土器A	小椀					暗褐	黒	胴部ロクロナデ、内面内面黒色処理のちミガキ、付高台剥離、底部回転糸切	
14	8住-11	黒色土器A	小椀	(10.6)			□1/8	褐～黒	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面黒色処理のち横ミガキ、付高台剥離、底部回転糸切	
15	8住-15	黒色土器A	小椀	(12.8)			□1/6	暗褐～黒	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面内面黒色処理のち横ミガキ	
16	8住-13	黒色土器A	椀	(14.8)			□1/6	暗褐	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面内面黒色処理のち斜と横ミガキ	
17	8住-4	黒色土器A	椀	14.4			□1/2高台欠底完	暗褐～橙褐	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面黒色処理のちミガキ、高台剥離、底部回転糸切	黒ぬけ
18	8住-6	黒色土器A	椀	(15.2)	7.8	5.6	□1/4底完	暗褐～暗橙褐	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面黒色処理のちミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切	黒ぬけ
19	8住-23	灰釉陶器	皿	12.0	7.5	2.2	□・高台一部欠底完	暗灰	黒～暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ (重焼痕)	
20	8住-22	灰釉陶器	皿	13.5	6.8	2.5	□・高台一部欠底完	灰～暗黄灰	暗褐～暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切 (重焼痕)	墨書有、輪花4単位
21	8住-19	灰釉陶器	椀		(7.6)		高台1/4底1/5	暗灰	暗灰	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ (重焼痕)	墨付着・転用硯
22	8住-24	灰釉陶器	椀	12.7	7.2	3.75	□1/2底1/2	暗黄灰	灰～黄灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切 (重焼痕)	墨付着?
23	8住-18	灰釉陶器	椀	(13.2)	(8.0)	(4.4)	□1/2高台1/2底2/3	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	墨付着・転用硯
24	8住-21	灰釉陶器	椀	15.3	7.5	4.8	□1/2底完	灰～黄灰	黄灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切 (重焼痕)	
25	8住-2	土師器	羽釜A	(24.6)			□一部	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、鏝部貼付のちナデ、鏝上下部ハケメ、内面ナデ・指頭圧痕・ハケメ	
26	8住-3	土師器	甕					暗褐	暗褐	胴上部ロクロナデ・下部ヘラケズリ、内面ロクロナデ	
27	8住-1	土師器	甕	(27.6)			□1/4	暗褐～橙褐	暗褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ、内面工具ナデ	
28	8住-20	土師器	甕	(25.8)	10.0	(25.0)	□1/10底完	暗褐～暗橙褐	暗褐～暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴上部ハケメ・下部ヘラケズリ、内面工具ナデ、底部ナデ	

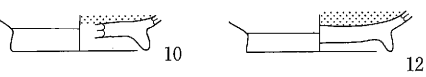
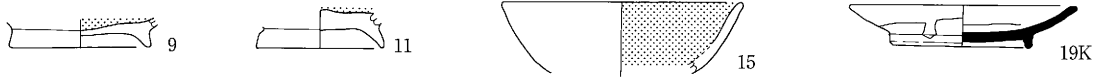
No.	実測番号	種別	器種	法量 (cm)			残存度	色調		整形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
29	10住-7	土師器	杯AⅡ	(11.6)	(7.0)	(2.1)	口1/8底1/8	暗褐～黒変	暗褐～黒変	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
30	10住-6	土師器	杯AⅡ	(10.6)	(6.0)	(3.1)	口一部底4/5	暗褐～黒変	暗褐～黒変	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
31	10住-4	土師器	杯AⅢ	13.2	7.2	4.2	口5/8底完	暗褐～暗橙褐	暗褐～暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
32	10住-9	土師器	杯? 椀?	(12.8)			口1/4	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
33	10住-5	土師器	杯?	(14.8)			口1/4	暗淡褐	暗淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
34	10住-8	土師器	杯? 椀?	(16.4)			口1/8	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
35	10住-10	土師器	椀	(13.0)			口1/6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面ロクロナデのちミガキ摩滅	
36	10住-11	土師器	椀	(14.6)			口1/10高台欠底完	暗褐～暗橙褐	暗淡褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台剥離、底部回転糸切	
37	10住-13	土師器	椀				高台欠底一部欠	暗褐	暗褐	胴部・内面ロクロナデ、付高台剥離、底部回転糸切	
38	10住-12	土師器	椀		6.6		高台・底一部欠	暗褐	暗褐	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
39	10住-14	土師器	椀		(7.6)		高台1/6底完	暗褐	暗褐	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
40	10住-15	黒色土器A	椀	(13.2)			口1/5	暗褐	黒	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面黒色処理のちミガキ摩滅	
41	10住-16	黒色土器A	椀		(6.2)		高台1/6底1/3	褐～黒変	黒	胴部ロクロナデ、内面黒色処理のちミガキ摩滅、付高台のちナデ、底部回転糸切	
42	10住-17	灰釉陶器	椀	13.1	6.9	3.5	口1/2底完	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
43	10住-21	灰釉陶器	椀	(14.8)			口1/12	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ	
44	10住-19	灰釉陶器	椀	(16.8)			口1/10	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
45	10住-20	灰釉陶器	椀	(16.8)			口1/8	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、沈線	
46	10住-18	灰釉陶器	椀	(17.8)	(9.6)	(6.7)	口1/8高台1/4底一部	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
47	10住-3	土師器	小形甕D	(13.2)			口1/8	暗褐	暗褐～黒変	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面工具ナデ	
48	10住-1	土師器	羽釜A	(17.2)			口1/3	褐～暗褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、鋳部貼付のちナデ、内面ナデ	
49	10住-2	土師器	羽釜A	(26.0)			口1/6	暗褐～暗橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ、鋳部貼付のちナデ、内面ナデ	
50	60土-1	灰釉陶器	皿	(12.6)			口1/12	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
51	ピット282-1	灰釉陶器	椀		(7.4)		高台1/8底1/3	暗灰	暗灰	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
52	2溝-1	灰釉陶器	椀		(7.8)		底1/5	暗灰	暗灰	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
53	5溝-1	灰釉陶器	椀	(12.4)			口1/12	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
54	A検-3	須恵器	杯B		(7.6)		底1/4	暗灰		胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、回転ヘラケズリ	
55	A検-1	灰釉陶器	椀		7.2		高台1/2底完	灰	暗灰	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、回転ヘラケズリ	鉄分付着
56	A検-2	灰釉陶器	椀	(15.2)			口1/8	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
57	17住-1	土師器	杯AⅡ	10.7	5.1	3.2	口・底完	暗～橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ・底部回転糸切	被熱
58	17住-3	土師器	小椀	(11.8)			口1/8高台欠	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ・底部糸切痕摩滅	
59	17住-6	黒色土器B	小椀	10.3	5.4	3.85	口・底完	黒	黒	口縁ヨコナデ、胴部黒色処理のち横ミガキ、付高台のちナデ・ミガキ、内面黒色処理のちミガキ、8単位の2重円暗紋、底部ナデのちミガキ	内外黒色処理

No.	実測番号	種別	器種	法量 (cm)			残存度	色調		整形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
60	17住-2	黒色土器A	椀		(6.2)		高台一部欠	暗橙褐	暗褐	胴部ロクロナデ、内面ミガキ、付高台のちナデ、底部回転糸切	黒ぬけ
61	17住-5	黒色土器A	椀				高台欠	暗褐	黒	胴部ロクロナデ、内面暗紋摩滅、高台剥離、底部回転糸切	
62	17住-11	灰釉陶器	椀		(7.0)		底1/3	灰	灰	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
63	17住-10	灰釉陶器	椀		(7.0)		底完	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
64	17住-4	土師器	盤BⅡ		(9.4)		高台1/3欠	暗橙褐	暗褐	内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
65	17住-7	土師器	羽釜A	(21.0)			口1/8	黄褐	黄褐	口縁ヨコナデ鋳部貼付のちヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
66	17住-8	土師器	甕		(8.6)		底完	暗褐	暗褐	胴上部ナデ・下部ヘラケズリ、内面工具ナデ、底部回転糸切	
67	26上-1	灰釉陶器			3.4		底完	暗灰	暗灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
68	B検-1	灰釉陶器	椀		(7.2)		底1/3	黄灰	黄灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
69	20住-2	須恵器	杯A		(7.8)		底1/2	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
70	20住-3	須恵器	杯A		(7.6)		底1/4	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
71	20住-1	須恵器	杯B		(8.0)		底1/4	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
72	21住-8	須恵器	杯A		(6.8)		底1/8	青灰	青灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
73	21住-7	須恵器	杯A		(6.8)		底1/4	淡灰	淡灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
74	21住-2	須恵器	杯A		(7.0)		底1/3	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
75	21住-4	須恵器	杯B		(10.0)		底1/6	灰	灰	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
76	21住-3	須恵器	杯B		(9.2)		底1/3	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
77	21住-1	須恵器	杯	(13.8)			口1/6	暗青灰	暗青灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部ヘラ切?	
78	21住-6	須恵器	盤	(14.6)			口一部	黒灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
79	21住-5	須恵器	杯蓋B	(17.0)			口1/12	黒灰	黒灰	上面・内面ロクロナデ、端部ヨコナデ	
80	22住-1	灰釉陶器	椀	8.9	4.6	3.2	口3/4底完	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
81	26住-11	土師器	杯AⅡ	9.7	3.75	2.3	口3/4底完	淡褐～橙褐	淡灰褐～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	スス付着
82	26住-7	土師器	杯	(10.4)			口1/3	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
83	26住-9	黒色土器A	椀		(6.2)		高台一部	暗褐	黒	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
84	26住-5	灰釉陶器	椀		(6.8)		底完	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
85	26住-4	灰釉陶器	椀		(7.2)		底完	白灰	白灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
86	26住-6	灰釉陶器	椀		6.6		底2/3	暗灰	暗灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
87	26住-2	灰釉陶器	椀	(15.0)			口1/4	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ	
88	26住-1	灰釉陶器	椀	(14.8)			口2/3	白灰	白灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
89	26住-8	灰釉陶器	椀		7.0		底完	灰	淡緑	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
90	26住-3	灰釉陶器	皿	(11.4)			口1/8	灰	灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
91	26住-10	灰釉陶器	広口瓶		(16.4)		底1/4	淡灰	淡灰	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ	
92	28住-1	土師器	小形甕D	(8.2)	(5.4)		口一部底完	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部カキメ、内面ロクロナデ、底部回転糸切	
93	30住-4	須恵器	杯A		(6.2)		底完	灰	灰	胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	内外面火だすき痕
94	30住-2	須恵器	杯	(14.6)	(6.8)	3.2	口1/8底完	灰	灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	内外面火だすき痕
95	30住-3	須恵器	杯A	(13.0)			口1/8	灰	灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	内外面火だすき痕
96	30住-5	須恵器	壺蓋A	(13.8)			口1/8	暗灰	暗灰	天井部回転ヘラケズリ・上面・内面ロクロナデ、端部ヨコナデ	

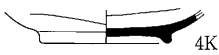
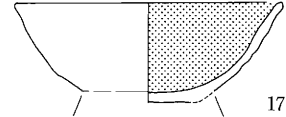
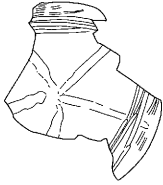
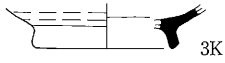
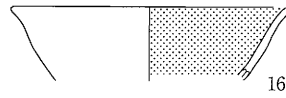
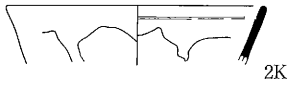
No.	実測 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			残存度	色 調		整形・調整・形態の特徴	備 考
				口径	底径	器高		外面	内面		
97	30住-1	美濃須恵	甕	(25.6)			口1/4	淡灰～淡緑灰		口縁ヨコナデ、頸部ロクロナデ、胴部タタキメ、内面頸部ロクロナデ、胴部当て具	
98	ピット 668-1	灰釉陶器	椀	(15.6)			口1/10	灰	灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
99	ピット 826-1	土師器	杯AⅡ	9.7	5.8	2.25	口・底完	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切	
100	ピット 826-2	灰釉陶器	椀	14.45	6.6	5.4	口・底完	淡灰	淡灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	
101	検-4	灰釉陶器	椀	(16.8)	(6.6)	6.1	口1/2底完	淡褐～淡緑	淡褐～淡緑	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	重焼痕
102	ピット 929-1	灰釉陶器	椀	(15.0)			口一部	灰	灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ	
103	ピット 988-1	灰釉陶器	椀	(14.4)			口1/8	白灰	灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナ	
104	16溝-1	土師質土器	内耳鍋	(27.6)	(11.2)		口1/12底一部	暗褐		口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部ナデ	
105	16溝-2	土師器	甕		(10.2)		底1/4	褐		胴上部ナデ・下部ヘラケズリ、内面工具ナデ、底部ナデ	
106	13溝-1	須恵器	甕	(27.4)			口1/8	灰～暗灰		口縁ヨコナデ、頸部・内面ロクロナデ	
107	C検-3	須恵器	甕	(21.4)			口1/8	灰～暗灰	灰～暗灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ 内外面自然釉付着	
108	17溝-3	須恵器	壺?		(5.1)		底5/8	淡灰～灰	淡灰～灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	もみ圧痕有
109	D検-6	灰釉陶器	椀		(7.1)		底1/4	淡灰		胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ	重焼痕有
110	D検-7	灰釉陶器	椀		(6.9)		底1/2	淡灰		胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
111	D検-5	灰釉陶器	椀				底完 (一部欠)	淡黄灰～暗灰	淡黄灰～灰	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切	
112	D検-4	灰釉陶器	段皿	(14.0)			口1/10	淡灰～灰	淡灰～灰	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
113	37住-1	土師器	盤B		(4.4)		底1/4	褐～橙褐	褐～橙褐	胴部・内面ナデ摩滅、底部ナデ	
114	37住-2	灰釉陶器	椀	(16.5)			口1/16	淡灰	淡灰	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ	輪花?
115	39住-1	灰釉陶器	椀	(14.3)			口わずか残	淡灰白	淡灰白	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ	
116	39住-2	灰釉陶器	椀		(6.8)		底1/4	淡灰	淡灰	内面ロクロナデ、ケズリダシ高台のちナデ、底部回転糸切	

A区

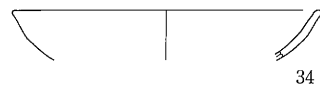
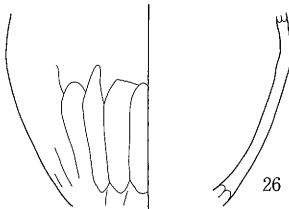
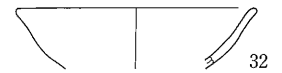
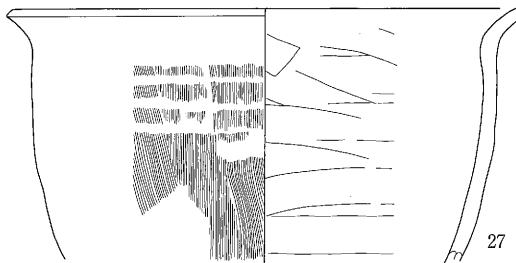
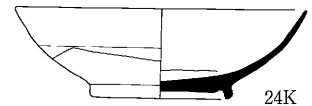
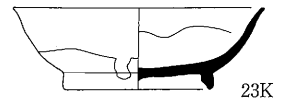
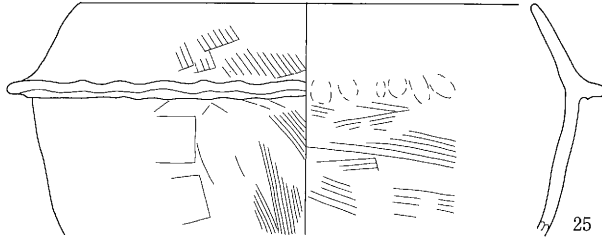
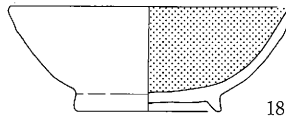
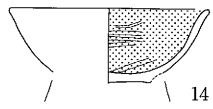
第5号住居址(1)



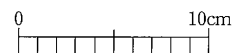
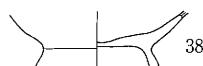
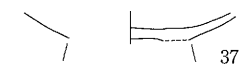
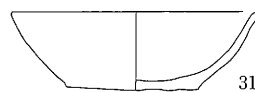
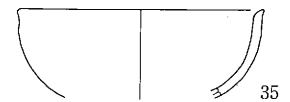
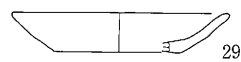
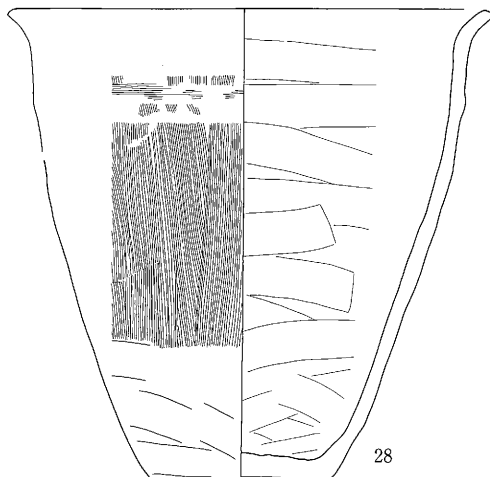
第7号住居址(2~4)



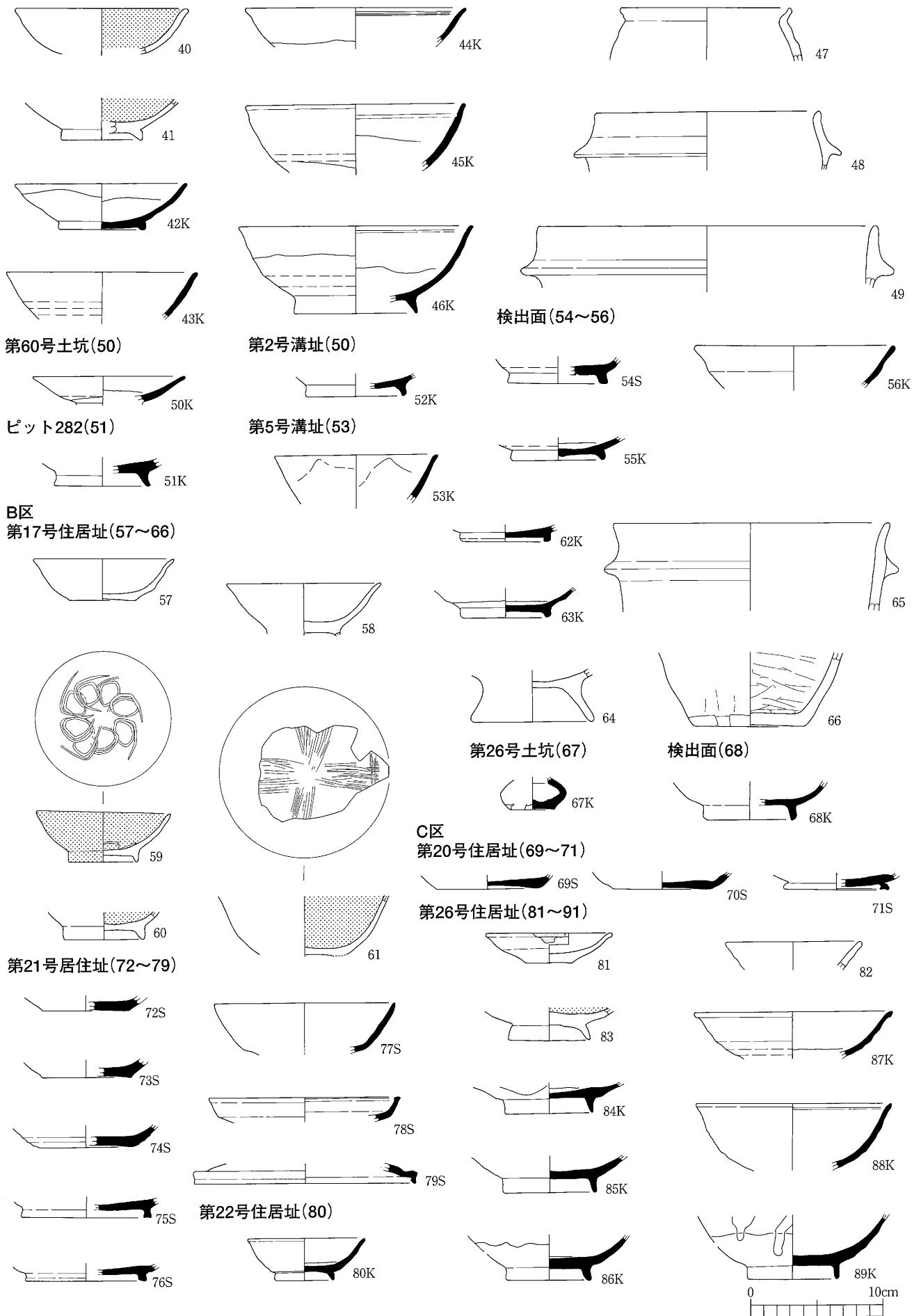
第8号住居址(5~28)



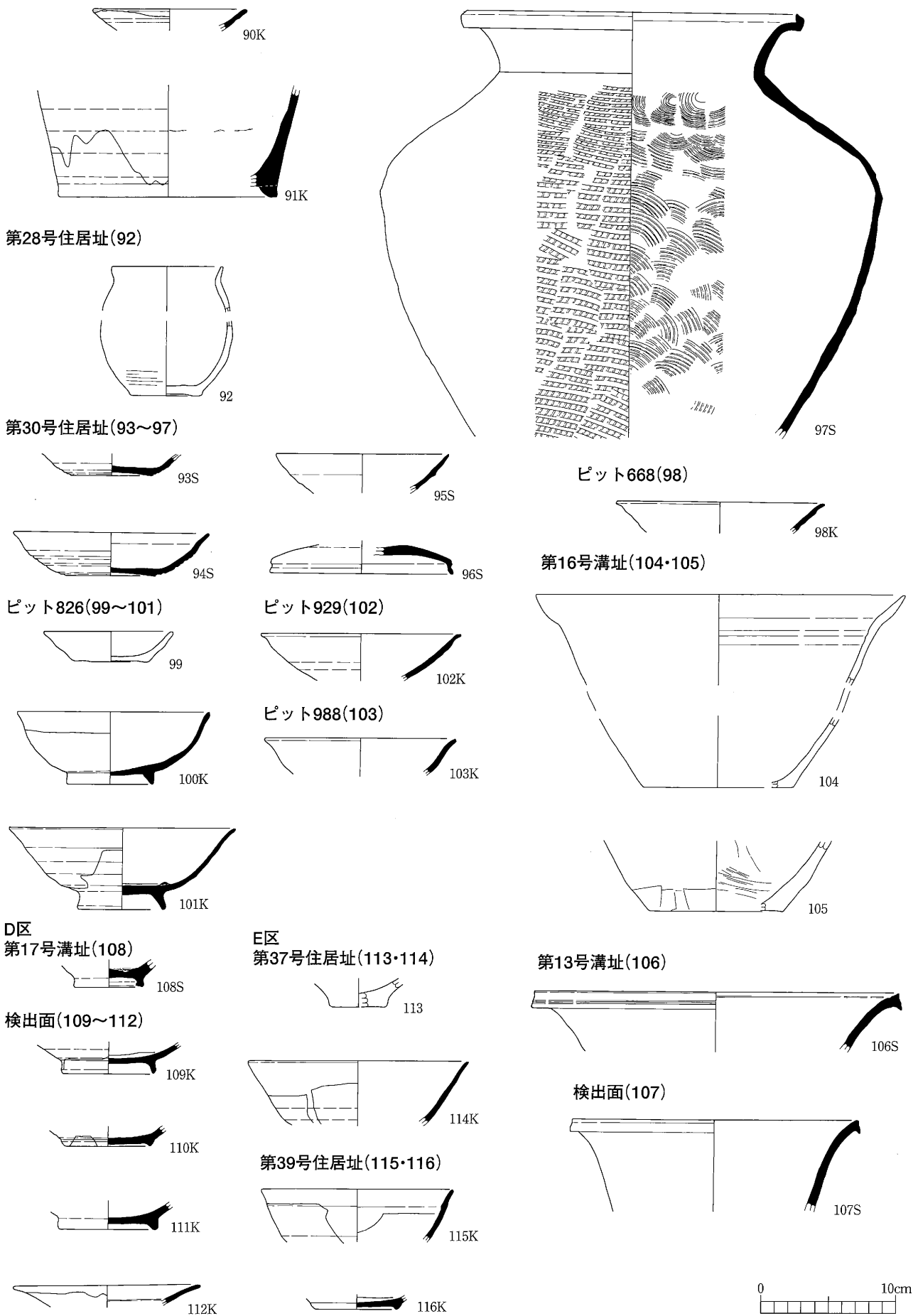
第10号住居址(29~49)



第39図 平安時代の土器・陶器(1)



第40図 平安時代の土器・陶器(2)



第41図 平安時代の土器・陶器(3)

(2) 中世の土器・陶磁器

中世の土器・陶磁器は、個体識別は容易で、出土総数で最低208個体ある。このうち実測可能な75個体を図化提示した。内訳は、輸入陶磁器35点（青磁17・白磁14・青白磁4）、東海系無釉陶器21点（山茶碗11・捏鉢6・常滑産甕4）、中世土師器皿9点、古瀬戸系陶器5点、内耳鍋2点、在地産土師質擂鉢1点、不明2点である。本遺跡は、輸入陶磁器が多いのが特徴である。以下、遺構別に触れていくことにする。

A区

溝2より山茶碗（1）が出土している。低い高台がつき、モミの圧痕が残る。A区では他に図化できるものがないが、建3から青磁小片が出土している。

B区

14住では、山茶碗（2）と白磁碗（3）が出土した。2の山茶碗は、断面三角形の高台形状であるため、古い様相を呈している。12世紀前半の所産か。15住からは白磁碗Ⅲ類（4）が出土している。体部はやや直線的に開き、口縁部には小さい玉縁をもっている。釉調は、やや黄色味を帯びている。11世紀後半から12世紀前半に所属する。17住・P428・検出面からは、山茶碗（5・8・9）が出土している。9は低い高台に、モミの圧痕が観察できる。12世紀中頃のものか。土37からは、青磁碗の底部（6）が出土している。

C区

23住からは東海産捏鉢（11）が出土。口縁の一部には、片口がみられる。24住からは、龍泉窯系青磁碗（12）が出土。26住からは、山茶碗の底部（13）が出土している。低い高台がつき、内面の一部に漆が付着している。27住からは、常滑産甕（14）が出土。口縁部は、断面N字形に折り曲げられており、体部には刻印がみられる。常滑編年6型式（13世紀後半）のものと考えられる。竪4からは、青磁皿Ⅰ類（15）が出土している。内面見込み部には、櫛状の施文具により文様が施されている。竪6からは、白磁皿Ⅸ類（口禿皿）（17）が出土している。口縁端部内面は削られ、露体している。13世紀中頃から14世紀初頭の所産か。竪8からは、龍泉窯系青磁碗の底部（19）と東海産捏鉢（18）の2点が出土した。13世紀～14世紀前半か。竪10からは、青白磁の合子（22）・中世土師器皿（21）が出土。22の合子体部には、沈線状の模様が施されている。21は、手づくね成形の土師器皿である。土62からは、青白磁合子（23）と、東海系捏鉢（24）が出土。12世紀後半と考えられる。土70からは、東海産捏鉢の口縁部（25）と、常滑産甕の底部（26）が出土した。26の常滑産甕は、体部下端がヘラ削り調整されている。土75からは、龍泉窯系青磁碗（27）が出土。体部外面には、細めの鎬連弁文がみられる。土85からは、中世土師器皿（28）1点が出土。手づくね成形されている。P775からは、手づくね成形の土師器皿（29）が出土。検出面からは、青白磁碗（31）・灰釉皿（30）・白磁碗Ⅲ類（32）が出土した。31の青磁碗の内面見込み部には、櫛描き文が施されている。

D区

33住からは、東海産山皿（33）と白磁碗（34）が出土。白磁の内面には、片彫りによる文様がみられる。竪22からは、土師器皿（35）が出土。手づくね成形で、体部外面に指圧痕が残る。土133からは、青磁壺類と考えられる口縁部（36）が出土。土161からは、中世土師器皿が2点（37・38）出土。他の土師器皿と比べて、器高の低いタイプである。P1042からは東海系山皿が出土（39）。内面に自然釉が付着している。P1155は、中世土師器皿（40）が出土。溝17からは、4点出土した。東海系山茶碗2点（41・42）、古瀬戸系陶器卸皿（43）、青磁碗（44）である。42の山茶碗は、低い高台が付く。溝18からは2点出土。46は、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。外面に細めの鎬連弁文がみられるが、釉が厚くかかり文様が不鮮明である。13世紀中頃～14世紀初頭のものと考えられる。45は、口縁内面に2本の沈線が入れられ、飛雲文らしい文様が一部にみられる。龍泉窯系青磁Ⅰ－4類か。遺構外の検出面からは9点出土した。内訳は、白磁5点（47～51）、青磁2点（52・53）、常滑産甕（55）と東海産捏鉢（54）である。50は、胎土が灰色で、外面には口縁端部近くまでヘラ削り調整がされている。11世紀後半から12世紀前半の、白磁碗Ⅴ類と考えられる。51は、内面

見込み部の釉を輪状にカキ取っている。白磁碗Ⅷ-2類と考えられ、13世紀初頭から中頃の時期に比定される。53の青磁碗は、内面見込み部にヘラ状工具により劃花文が入れている。高台は断面四角形で、畳付およびその内部は露体である。また、破断面には漆継ぎの痕跡がみられる。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、12世紀中頃から後半のものと考えられる。52は、外面に蓮弁を削り出し、櫛状工具により櫛目を縦に入れている。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類と考えられる。

E区

豎28からは、在地産土師質播鉢(64)が出土した。内面に、十条で一単位の播目が施されている。15世紀前半のものと考えられる。豎35からは、青磁碗の底部(65)が出土。豎37では、古瀬戸系卸皿(66)がある。外面に灰釉が施釉されている。土193では、内耳鍋(67)が出土。土215と土223からは、青磁碗(68・69)が出土している。69には、外面に片彫りによる文様がみられる。土240からは、ロクロ成形の中世土師器皿(70)が出土している。土247は、古瀬戸系陶器の灰釉平碗(71)である。外面下半部には回転ヘラケズリ調整がされている。37住からは56の白磁碗が出土。45住からは白磁碗が4点出土している。58は白磁Ⅴ類の碗である。59は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、内面見込み部に花文様がみられる。60は、古瀬戸系陶器卸皿である。外面に灰釉が施釉されている。57は、中世土師器皿である。手づくね調整されている。46住では、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類(62)と東海産捏鉢(61)が出土している。62には、太目の鎬連弁文がみられる。47住からは、青白磁の水注が出土している。体部に精緻な草花の模様が凸文で施されている。型文とみられる。P1596からは、内耳鍋(72)が出土している。口縁端部が外反する古い様相のもので、15世紀前半に比定される。検出面からは、白磁碗Ⅴ類が2点出土している。

新村遺跡出土中世土器陶磁器の組成

本遺跡出土の土器・陶磁器は、12世紀後半～15世紀後半に比定できる。(このうち、14世紀後半から15世紀前半と考えられる遺物は出土していない。)以下、出土した遺物について、時期別に組成の変化をみてみたい。

第1期(11世紀後半～12世紀中頃)

B区の14住・15住・土418・P428からの出土遺物群がこの時期に相当する。出土量は少ないが、白磁碗Ⅲ類、山茶碗、捏鉢で構成される。凶化できなかつたが、東海産捏鉢と手づくねの土師器皿もみられる。この時期は、白磁が主体となり、東海産無釉陶器(山茶碗・捏鉢)が共伴する。土師器皿は、古代のものとなり、すべて手づくねで成形される。

第2期(12世紀後半～13世紀前半)

C区の豎4・豎10・土62・土70・土75・土85・P775、D区33住、E区45住・46住から出土した遺物群が相当する。第1期にみられなかった青磁、青白磁が加わる。特に青磁の出土量が増加し、龍泉窯系青磁が白磁を凌駕する。その他、東海産山茶碗・山皿・捏鉢、常滑産甕、土師器皿(手づくね)がみられる。特殊品では、C区青白磁水注が出土している。

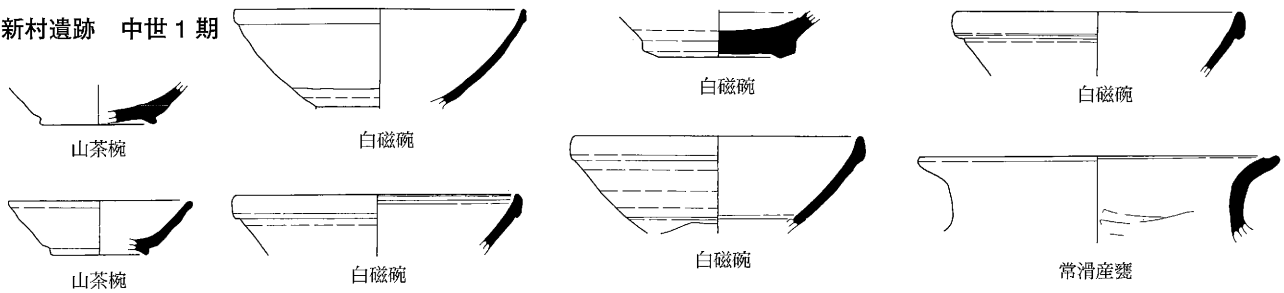
第3期(13世紀後半から14世紀前半)

C区豎6、D区溝17・18、P1042などが相当する。前期と同様に、主体となるのは龍泉窯系青磁で、白磁ⅢⅣ類(口禿皿)、東海産山茶碗・捏鉢、古瀬戸系卸皿がみられる。

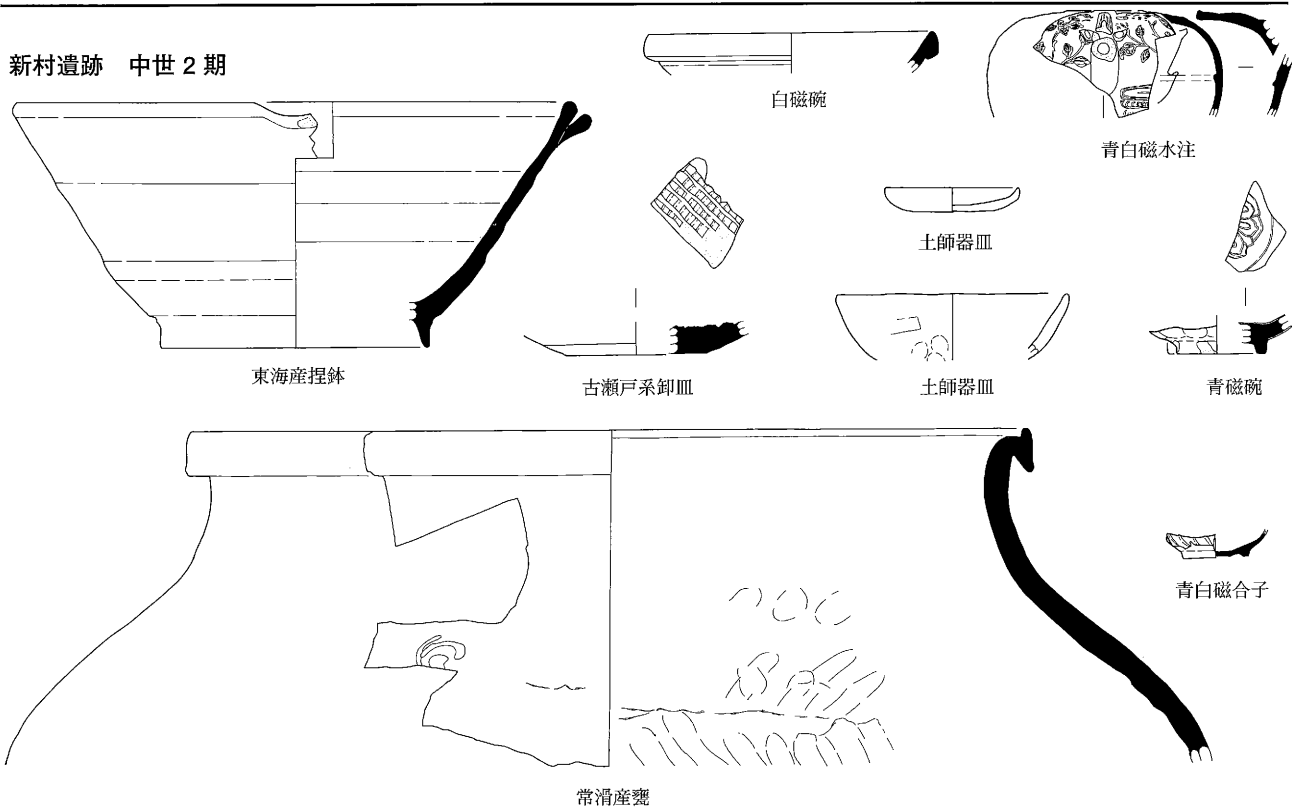
第4期(15世紀後半)

E区豎28・35・37、土193・240・247、P1596の遺構が該当する。種別では、古瀬戸系卸皿・平碗、内耳鍋、在地産土師質播鉢、土師器皿(ロクロ成形)がみられる。この時期から、内耳鍋がみられるようになる。輸入磁器が減少し、東海産陶器と在地産のもので構成されるようになる。

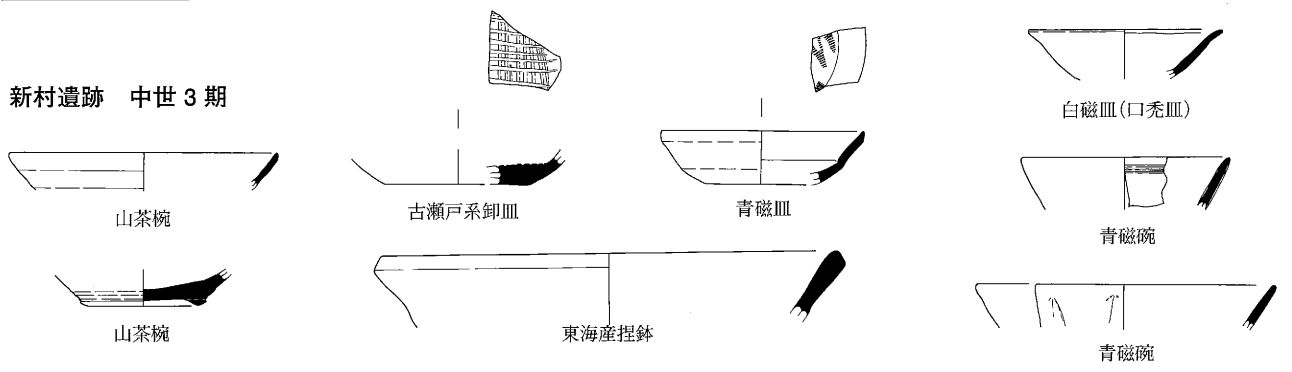
新村遺跡 中世 1 期



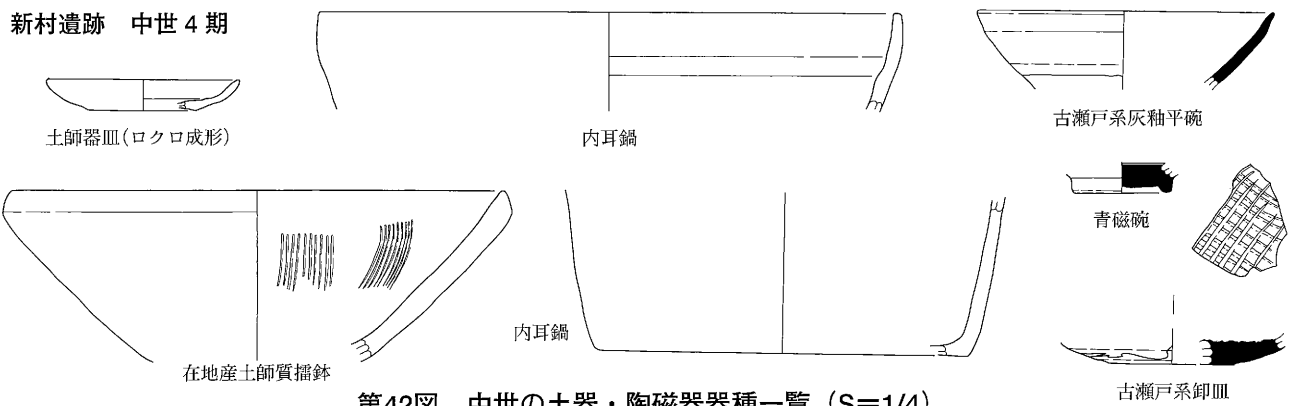
新村遺跡 中世 2 期



新村遺跡 中世 3 期



新村遺跡 中世 4 期



第42図 中世の土器・陶磁器器種一覽 (S=1/4)

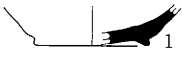
第10表 中世の土器・陶磁器一覧表

図 No.	実測番号	出土地点	注 記	器 種		法 量 (cm)			残存度		色 調	成形・調整・形態の特徴等
						口径	底径	器高	口縁	底部		
1	溝2-2	A溝2	溝2-165	山茶碗	碗		(6.2)			高台1/8 底1/4	暗灰色	内外ロクロナデ、付高台のちナデ・もみ圧痕、底部回転ヘラケズリ
2	14住-1	B14住	14住-001	山茶碗	碗	(5.6)	(5.2)	2.9	1/8	1/4	灰色	口縁ヨコナデ、内外ロクロナデ、付高台のちナデ
3	14住-2	B14住	14住-391	白磁	壺?		(8.0)			1/6	暗灰色	体部外面回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
4	15住-1	B15住	15住-004	白磁	碗	(15.4)			1/12		暗黄色	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
5	17住-9	B17住	17住-397	山茶碗	山茶碗		(8.2)			1/4	淡灰色	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ
6	土37-1	B土37	土37-078	青磁	碗		(4.8)			完	茶色	内面ロクロナデ、ケズリダシ高台露胎
7	土418-1	B土418	土418	東海系無 釉陶器	壺類	(15.0)			一部		暗灰色	口縁ヨコナデ、頸部・内面ロクロナデ
8	P428-1	BP428	BP428	山茶碗	碗		(7.4)			1/4	灰色	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ
9	検-3	B検出面	検出面-179	山茶碗	碗		4.6			3/4	暗灰色	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転糸切
10	検-2	B検出面	検出面-180	山茶碗	碗					1/3	暗褐～淡緑 色	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台露胎、底部回転ヘラケズリ
11	23住-1	C23住	23住-459・ 042・043・ 044・045・ 046・047・ 048・049・ 052	東海系無 釉陶器	捏鉢	(30.0)	(14.3)	(13.0)	1/2	1/8	灰～黄灰色	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ
12	24住-1	C24住	24住-013	青磁	碗	(14.0)			1/12		暗緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
13	26住-12	C26住	26住-017	東海系無 釉陶器	山茶碗		(6.8)			1/4	淡灰色	胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部ヘラケズリ、(もみ圧痕)
14	27住-1	C27住	27住-484・ 豎10-593・ 土70-512・ 検-603	常滑	甕	(44.4)				1/8	淡灰～暗灰 色	口縁ヨコナデ、頸～胴部輪積みのちタタキのちナデ、内面頸部ロクロナデ・胴部雑な指ナデ
15	タテ4-1	C豎4	豎4-050	青磁	皿?	10.8			1/12		淡緑色	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
16	タテ4-2	C豎4	豎4-586	常滑	甕	(19.0)			1/4		灰色	口縁ヨコナデ、頸部ロクロナデ、内面工具ナデ
17	タテ6-1	C豎6	豎6-051	白磁	?				1/10		乳白色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
18	タテ8-1	C豎8	豎8-589	山茶碗	碗		(7.0)			1/4	灰色	胴部・内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部回転ヘラケズリ
19	タテ8-2	C豎8	豎8-055	青磁	碗		(5.6)			1/4	暗緑色	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、削り出し高台、底部回転ヘラケズリ
20	タテ8-3	C豎8	豎8-054	東海系無 釉陶器	捏鉢	(25.0)			一部		灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
21	タテ10-1	C豎10	豎10-058	土師器	皿	(12.4)			1/12		淡褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面指押
22	タテ10-2	C豎10	豎10-059	青白磁	合子		(3.4)			1/4	淡青灰白色	内面ロクロナデ
23	土62-1	C土62	土62-509	青白磁	合子		(3.6)			1/4	白灰色	胴部・内面ロクロナデ、底部ナデ
24	土62-2	C土62	土62-079	東海系無 釉陶器	捏鉢		(12.0)			2/7	淡褐色	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ、底部ナデ
25	土70-1	C土70	土70-083	東海系無 釉陶器	捏鉢	(27.0)				1/6	灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ

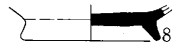
図 No.	実測番号	出土地点	注 記	器 種		法 量 (cm)			残存度		色調	成形・調整・形態の特徴等
						口径	底径	器高	口縁	底部		
26	土70-2	C土70	土70-084	常滑	甕		(15.6)			1/4	褐～茶褐色	胴上部ナデ・下部ヘラケズリ、内面ナデ、底部ナデ
27	土75-1	C土75	土75-085	青磁	碗						淡緑色	胴部・内面ロクロナデ
28	土85-1	C土85	土85-087	土師器	皿	(7.2)		1.3		1/4	淡～暗褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ナデ
29	P775-1	CP775	P775-123	土師器	皿	(13.4)				1/8	淡褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面テズクね成形
30	検-2	C検出面	検-183	古瀬戸系 陶器	灰釉皿	(12.8)				1/12	淡褐灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
31	検-1	C検出面	検-187	青白磁	碗		(6.0)			高台1/8 底1/10	暗灰色	胴部ロクロナデ?ケズリ?、内面櫛描紋、ケズリダシ高台露胎、底部回転ヘラケズリ
32	検-5	C検出面	検-183	白磁	碗	(11.4)				一部	淡緑白色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
33	33住-1	D33住	33住-621・ 625	山茶碗	皿	(7.5)	(4.5)	2.35	3/8	3/8	淡灰～淡褐 灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切
34	33住-2	D33住	33住-020	白磁	碗	(15.2)			1/16		灰緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
35	豎22-1	D豎22	豎22-064	土師器	皿	(12.9)			1/5		橙褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ナデ
36	土133-1	D土133	土133-093	青磁	壺類	(15.8)			1/16		淡褐色	口縁ヨコナデ
37	土161-1	D土161	土161-094	土師器	皿	7.85	6.3	1.2	2/3	ほぼ完	褐～明褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面・底部ナデ摩滅
38	土161-2	D土161	土161-095	土師器	皿	(7.6)	(5.6)	1.4	3/8	3/4	淡褐～褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面・底部ナデ摩滅
39	P1042-1	DP1042	P1042-128	山茶碗	皿	(8.2)			1/8		淡灰～灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
40	P1155-1	DP1155	P1155-129	土師器	皿	(8.0)			1/8		淡褐色	口縁ヨコナデ、胴部ナデ
41	溝17-1	D溝17	溝14-626	山茶碗	碗	(14.2)				1/7	淡灰～淡褐 灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
42	溝17-2	D溝17	溝17-168	山茶碗	碗					高台1/8 底1/4	淡灰白色	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のち ナデ、底部回転糸切
43	溝17-5	D溝17	溝17-167	古瀬戸系 陶器	卸皿		(7.6)			1/7	淡灰色	胴部ロクロナデ、内面ヘラ描沈線、底部回転糸切
44	溝17-4	D溝17	溝17-171	青磁	碗		(5.3)			1/5	暗緑色	胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
45	溝18-2	D溝18	溝18-172	青磁	碗	(11.0)			一部残		暗緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
46	溝18-1	D溝18	溝18-172	青磁	碗	(15.8)				1/12	暗緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
47	検-1	D検出面	検出面-188	白磁	碗	(12.4)			1/16		淡青緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
48	検-2	D検出面	検出面-193	白磁	碗	(16.05)			1/16		灰白色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
49	検-3	D検出面	検出面-186	白磁	碗	(15.2)			1/20		灰白色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
50	検-11	D検出面	検出面-190	白磁	碗	(16.2)					乳白色～淡 黄灰白色	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
51	検-12	D検出面	検出面-189	白磁	碗		(6.7)			1/3	淡灰色	胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台、底部回転ヘラケズリ、内面釉 輪剥ぎ
52	検-10	D検出面	検出面-190	青磁	碗						淡灰緑色	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデ、内面ロクロナデのち片彫り?
53	検-13	D検出面	検出面-194	青磁	碗		(5.75)			1/3	緑色	胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
54	検-9	D検出面	検出面-664	東海系無 釉陶器	捏鉢	(26.2)				わずか残	淡褐灰～灰 色	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転ヘラケズリ、内面ロクロナ デ
55	検-8	D検出面	検出面-197	常滑	甕		(15.0)			1/8	暗灰～暗褐 色	胴部・内面工具ナデ、底部ナデ
56	37住-3	E37住	37住-022	白磁	碗	(15.6)				わずか残	淡緑灰白色	口縁ヨコナデ、胴部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ
57	45住-2	E45住	45住-027	土師器	皿	(11.8)	(8.0)	3.7		1/3	橙褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切?
58	45住-1	E45住	45住-026	白磁	碗	(15.6)				1/8	乳白色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ

図 No.	実測番号	出土地点	注 記	器 種		法 量 (cm)			残存度		色調	成形・調整・形態の特徴等
						口径	底径	器高	口縁	底部		
59	45住-3	E45住	45住-029	青磁	碗		(5.2)		3/8		淡灰緑色	胴部ロクロナデのち鑄連弁文、内面ロクロナデ、ケズリダシ高台
60	45住-4	E45住	45住-028	古瀬戸系 陶器	卸皿		(7.5)			1/6	淡灰褐～淡 黄褐色	胴部ロクロナデ、内面へラ描沈線、底部回転糸切
61	46住-1	E46住	46住-031	東海系無 釉陶器	捏鉢	(34.1)			1/16		淡灰色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
62	46住-2	E46住	46住-030	青磁	碗	(12.8)			わずか残		暗緑色	口縁ヨコナデ、胴部ロクロナデのち鑄連弁文、内面ロクロナデ
63	47住-1	E47住	47住-033・ 034	青白磁	水注	(3.6)			一部		淡青色	口縁ヨコナデ、注口欠損、体部浮き彫り、内面ロクロナデ
64	豎28-1	E豎28	豎28-068・ P1564-161	土器	土師質播鉢	(26.0)			1/6		褐～灰褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ナデ
65	豎35-1	E豎35	豎35-071	青磁	碗		(5.25)			完	暗緑色	内面ロクロナデ、ケズリダシ高台のちナデ、底部回転へラケズリ
66	豎37-1	E豎37	豎37-075	古瀬戸系 陶器	卸皿		(6.4)			1/5	淡灰褐～淡 黄褐色	胴上部回転へラケズリ・下部ナデ、内面へラ描沈線、底部回転糸切
67	土193-1	E土193	土193-104・ P1596-164	土器	内耳鍋		(20.0)			1/8	暗褐～黒褐 色	胴上部ナデ・下部ヨコナデ、内面ロクロナデ、底部ナデ
68	土215-1	E土215	土215-111	青磁	碗	(11.6)			1/8		淡緑色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
69	土223-1	E土223	土223-115	青磁	碗		(24.9)			1/8	灰色	胴部・内面ロクロナデ、ケズリダシ高台
70	土240-1	E土240	土240-118	土師器	皿	(10.2)	(6.6)	2.6	1/8		褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ、底部回転糸切
71	土247-1	E土247	土247-121	古瀬戸 系陶器	平碗	(15.6)			1/8		淡緑灰色	口縁ヨコナデ、胴上部ロクロナデ・下部回転へラケズリ、内面ロクロナ デ
72	P1596-1	EP1596	P1596-164	土器	内耳鍋	(31.1)			1/14		暗褐色	口縁ヨコナデ、胴部・内面ロクロナデ
73	検-1	E検出面	検-202	白磁	碗	(15.4)			1/16		淡緑灰白色	口縁ヨコナデ、胴部回転へラケズリ、内面ロクロナデ
74	検-2	E検出面	検-200	白磁	碗	(15.3)			1/16		淡緑灰白色	口縁ヨコナデ、胴部回転へラケズリ、内面ロクロナデ
75	トレンチ 1	A トレンチ	T-204	青磁	碗		(4.6)			1/3	暗灰色	ケズリダシ高台、底部回転へラケズリ

A区
第2号溝址(1)



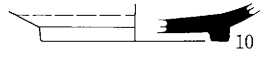
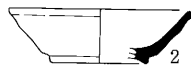
ピット428(8)



検出面(9・10)



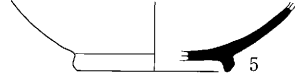
B区
第14号住居址(2・3)



第15号住居址(4)



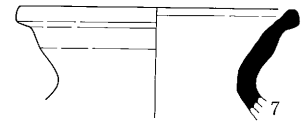
第17号住居址(5)



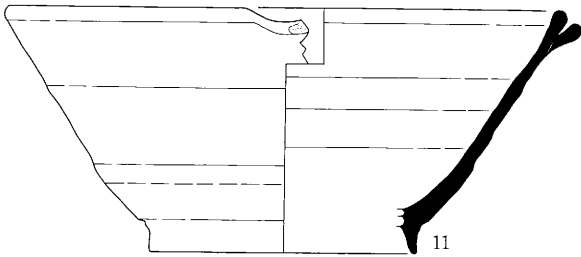
第37号土抗(6)



第418号土抗(7)



C区
23住(11)



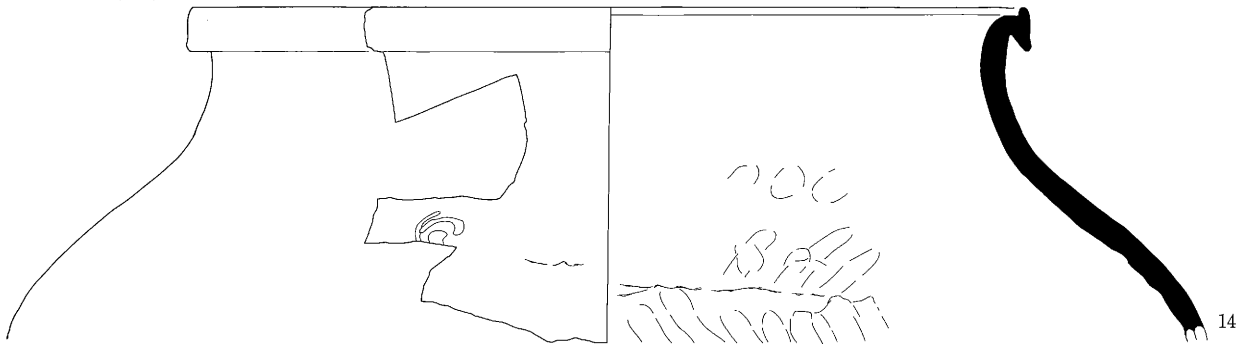
第24号住居址(12)



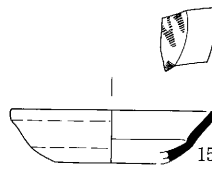
第24号住居址(13)



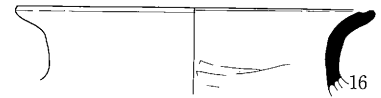
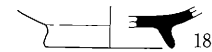
第27号住居址(14)



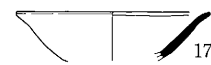
第4号竪穴状遺構(15・16)



第8号竪穴状遺構(18~20)



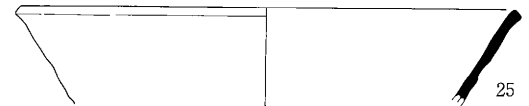
第6号竪穴状遺構(17)



第10号竪穴状遺構(21・22)



第70号土抗(25・26)



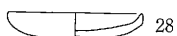
第62号土抗(23・24)



第75号土抗(27)



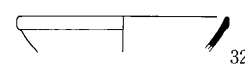
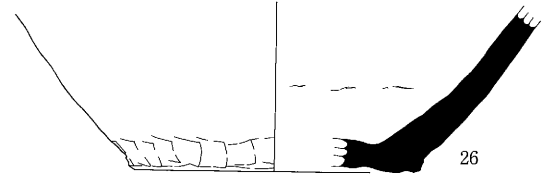
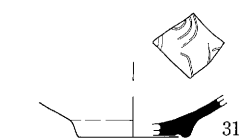
第85号土抗(28)



ピット775(28)



検出面(30~32)



第43図 中世の土器・陶磁器(1)

D区

第33号住居址(33・34)

33

第133号土抗(36)

第17号溝址(41~44)



第161号土抗(37・38)

第22号竪穴状遺構(35)

ピット1042(39)

ピット1155(40)

第18号溝址(45・46)

検出面(47~55)

第46号住居址(61・62)

E区

第37号住居址(56)

第7号建物址(63)

第47号住居址(57~60)

第28号竪穴状遺構(64)

第215号土抗(68)

第35号竪穴状遺構(65)

第193号土抗(67)

第223号土抗(69)

第37号竪穴状遺構(66)

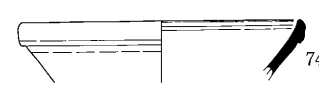
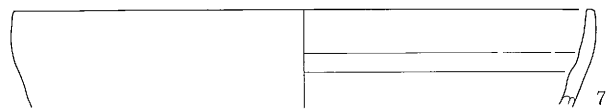
第247号土抗(71)

第240号土抗(70)

ピット1596(72)

検出面(73・74)

A区
トレンチ(75)



第44図 中世の土器・陶磁器(2)

2 金属器

金属器は、鉄器127点、銅製品37点の総計164点が出土した。このうち実測可能な鉄器42点、銅製品2点の計44点を図化提示した。鉄器は、伴出した土器によって帰属時期を推定すると、平安前期2点、平安後期8点、細時期区分不明だが平安時代のもの1点、中世1期6点、中世2期21点、中世3期7点、中世4期4点、細時期区分不明だが中世のもの16点、時期不明62点である。帰属時期の判明したものは少ないが、判明したものについて各地区の出土分布をみていくと次のとおりになる。A区では平安後期8点と平安時代1点である。中世に属するものは一点もないが、これはA区に中世の遺構が少ないためと思われる。それに比して、B区では中世1期6点及び中世1点、D区では中世2期2点と中世3期7点であり、平安期のはみられない。さらにC区、E区では平安時代のものが極少量なのに対し、中世のものは20点近くあり、E区では特に中世Ⅱ期ものが多い。また、鉄滓も総計20点、総量607g出土している。以下、実測可能であったものを器種ごとにみていくこととする。なお（ ）内の数字は、遺物の掲載No.である。

刀子類（第48・49図 第11表）

刀子類は計6点出土している。平安後期1点（2）、中世1期2点（3・4）、中世2期1点（36）、時期不明2点（18・39）である。完形品は皆無で、破損が著しいため分類は困難であるが、全て平棟平造と思われる。棟部の厚さは、ほとんどが3mmであるが、時期不明の18・39は4～5mmとやや肉厚である。比較的残存率が高く、^{まち}関部の残っているものは、3と39の2点である。3は関が不明瞭であり、^{なかご}茎部に木質部が銹着している。14は両関造りで、刀関よりも棟関の方が緩やかになっている。

鉄鏃（第48図・49図 第11表）

2点が出土しており、40は細時期区分不明だが中世の遺構出土、20は帰属時期不明である。20は刃先と^の篋代尻が欠損しているが、雁股鏃である。長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文）による中南信地方出土の奈良時代～中世における鉄鏃の分類（第46図）からすると、VIIIb類かVIIIc類に属すると思われる。40はほぼ完形である。VI類に属すると思われるが、頸部がやや短い。錆膨れにより明瞭にはわからないが、VI類であるならば両丸造か片丸造、あるいは片平鑄造であると思われる。

釘（第48図・49図 第11表）

実測可能なものは22点で、中世2期6点、中世3期2点、細時期区分不明だが中世の遺構より3点、不明11点であった。地区ごとにみると、A区は1点も出土しておらず、B区2点、C区5点、D区6点、E区9点とE区の点数が多い。頭部が欠損しているため、分類不可能なものが大半をしめている。頭部が残存しており分類が可能なものを、県埋文による古代～近世における釘の分類（第47図）によって分類すると、Ib類1点（13）、IIa類1点（9）、IIb類1点（29）、IVa類3点（5・6・30）、Va類2点（19・23）、IVaもしくはVa類と思われるもの1点（33）、IVもしくはV類と思われるもの1点（43）である。いずれも1、2点程度であり、この時期の傾向をみることはできないが、IVa類、Va類がやや多く出土している。断面形で見ると、一辺3.5mm～9mmの方形もしくは正方形であり、細いものから太いものまで種類は豊富であるが、一辺5～6mmのものが最も多い。E区出土のものは、大半がこのタイプである。

^{ひうちがね}燧鉄（第48図 第11表）

1と12の2点が出土している。1は時期不明であるが、12は中世2期の遺構出土である。どちらも断面は先端部にいくほど太くなる台形をなし、燧鉄の特徴を現わしている。1は、基部の形状が山形をなすものである。12も山形であるが、上部に透かしの飾りを持ち、山形の裾部両端が上に張り出している。大きさは、どちらも縦の長さはほぼ同じであるが、横の長さは12の方が1よりもやや大きい。

鉄鐸（第48図・49図 第11表）

鉄鐸と思われるものは、2点出土している。14は中世2期、41は中世4期の遺構から出土した。14は、厚

さ約1mmの鉄板を筒状に丸めたものであり、上端部は欠損している。残存部の合わせ目は接しておらず、粗雑な造りである。41は、胴部縦半分と上部を欠損しているが、厚さ約1mmの鉄板を丸めており、鉄鐸の破片であると考えられる。

器種不明品（第48図・49図 第11表）

実測可能な鉄製品のうち、器種が特定できなかったものが8点ある。中世2期1点（31）、中世3期2点（22・26）、中世のもの2点（7・10）、帰属時期不明3点（16・27・44）である。それぞれの形状については、第11表 鉄器・銅製品一覧を参照されたい。

鉄滓

鉄滓は、総数20点（607g）が出土した。内訳は、平安前期1点（14g）、平安後期7点（358g）、中世2期2点（62g）、細時期区分不明だが中世6点（101g）、時期不明のもの4点（72g）である。地区ごとにみると、A区では、平安後期は8住から5点（336g）、時期不明のものはP12から1点（12g）である。B区では、時期不明のものが検出面から1点（6g）出土している。C区では、平安前期のものが土97から1点（14g）、中世のものが23住から3点（43g）出土である。D区では1点も出土していない。E区では、平安後期は39住から2点（22g）、中世2期は45住から2点（62g）、中世のものは41住から1点（8g）、49住から1点（10g）、土215から1点（40g）、時期不明のものは土213から1点（44g）、検出面から1点（10g）の出土である。全体的にみて、E区からの出土が多い。

銅製品（第48図・49図 第11表）

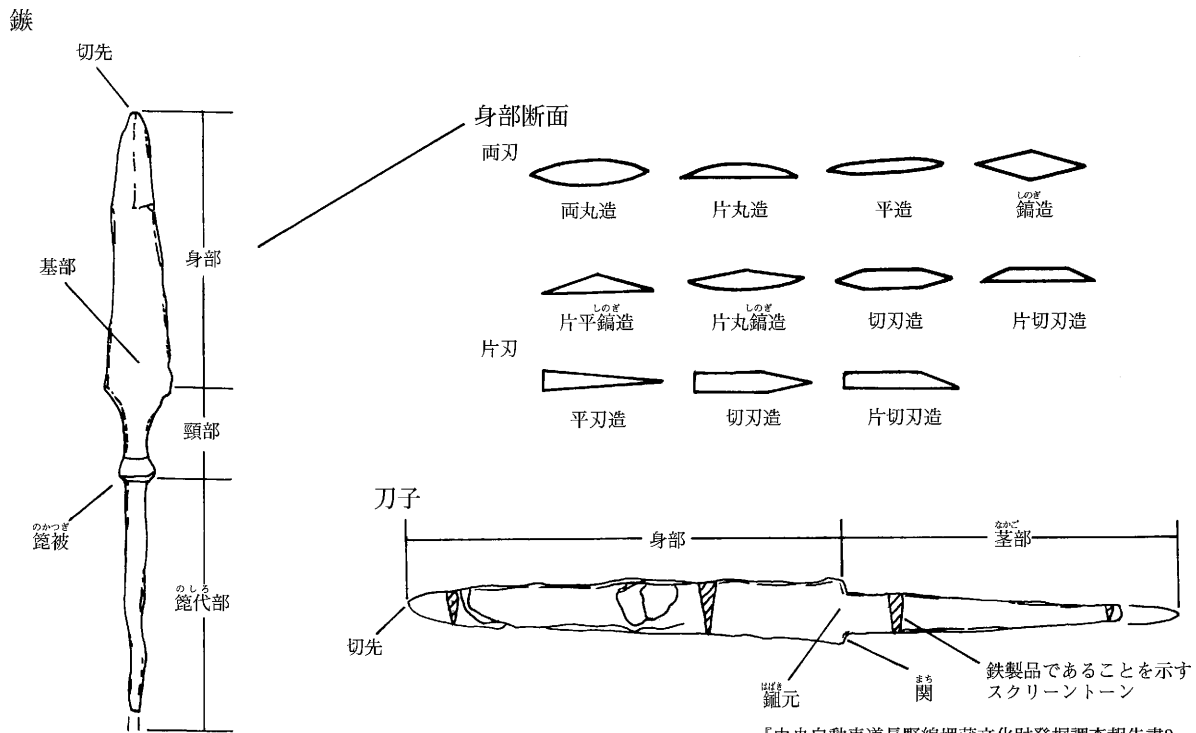
銭貨以外の銅製品は、5点出土している。うち2点のみ実測可能であった。11は平安前期の遺構からの出土である。欠損部が大きく、残存部は幅180mm、厚さ20mmの板状をしており、端が丸くなっている。15は、細かい時期区分はわからないが中世のものである。何らかの器の口縁部だと思われるが、こちらも欠損が激しく、器種を確定することは困難である。

銭貨（第50図 第12表）

総計32点が出土している。出土遺構から時期をみていくと、帰属時期不明のもの9点（1・3・4・5・6・18・30・31・32）以外は、すべて細時期区分不明だが中世のものである。地区ごとにみると、A、B区からは1点も出土しておらず、C区からは6点、D区は23点、E区3点であり、D区出土のものが大半をしめている。貨幣名が特定できたものは21枚である。その種類と数量は、開元通寶3点（11・17・23）、至道元寶1点（10）、祥符元寶1点（12）、皇宋通寶2点（2・18）、熙寧元寶^{きねい}4点（20・22・27・31）、元豊通寶3点（7・24・30）、元祐通寶2点（9・25）、政和通寶1点（3）、洪武通寶2点（8・26）、永樂通寶1点（19）である。これを鑄造時期別にみると、唐銭3点、北宋銭14点、明銭3点となる。また、下二文字が「元寶」とわかるものが一枚あり（13）、その他の10点は破損、摩滅が激しいため貨幣名は特定できなかった。C区検出面（3・4・5・6）、D区土125（7・8）、D区土162（10・11・12・13・14・15・16）、D区土184（19・20）、D区P1306（21・22・23・24・25・26）、D区P1449（27・28・29）は同一地点よりの一括出土である。このうち、土125とP1306のものは、木板に付着した状態で出土し、D区土164（17）も1点のみの出土であるが木板と供に出土しており、地鎮のためのものである可能性が高い。また、19が出土したD区土184は火葬墓である。

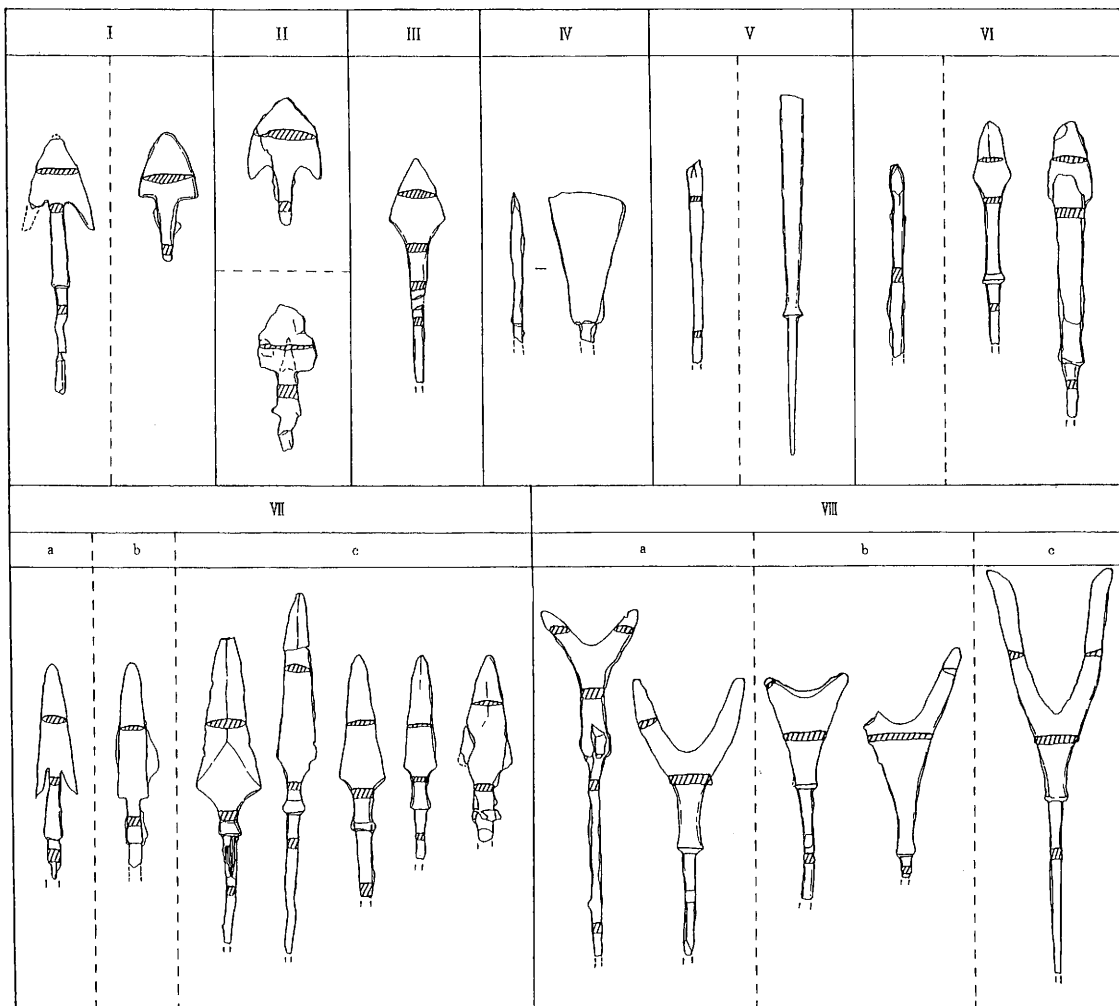
<参考文献>

（財）長野県埋蔵文化財センター 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』
永井久美男 1994『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵文化財調査会






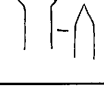
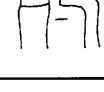



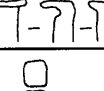
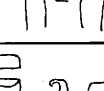
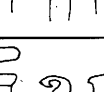
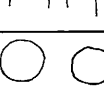

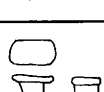
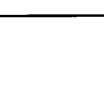
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』第260図より一部転用。

第47図 金属器凡例



『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻
市内その2—吉田川西遺跡』第347図より転用。一部改編。

第46図 鉄鍬分類図

分 類		模式図	A	B	C	D	E
I	頭部端面と平坦にし方頭形にしたもの	a 地面中心部に膨らみをもつもの					
		b 上方わずか斜めから叩かれた痕跡をもつもの				1	
II	基部上端を斜め上方から叩いて先端を尖らせたもの	a 片面から叩いたもの				1	
		b 両面から叩いたもの					1
III	基部を単に曲げ頭部にしたもの	a 基部上位を折り曲げたもの					
		b 基部中位を折り曲げたもの					
IV	基部上端を叩き延ばし、その後単に曲げたもの	a 基部断面が方形又は方形に近い長方形を呈するもの		2			1
		b 基部断面の辺の比が、2:1あるいはそれに近いもの					
V	基部上端を鑿を入れて叩き延ばし、その後折り曲げたもの	a 先端部が薄く広く叩き伸ばされ、直線的に曲げられたもの				1	1
		b 先端部は丸く曲げられたもの					
VI	基部上端を鑿を入れて叩き延ばし延伸部を折り返して頭造りをしたもの	a 延伸部は折り返されているがその後、折り曲げられず「コ」形を呈するもの					
		b 折り返され頭づくりされた後、折り曲げられたもの					
VII	基部上面に皿を載せたもの	a 円形の皿を載せたもの					
		b 菱形の皿を載せたもの					
		c 隅入長方形の皿を載せたもの					
VIII	その他						

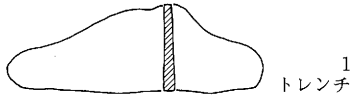
第47図 頭部形状からみた釘の分類図

長野県埋蔵文化財センター1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3-その2-吉田川遺跡』第118表をもとに作成。
A、B、C、D、Eは各地区名の欄は各地区からの出土数(ただし分類不可能なものはのぞく)。

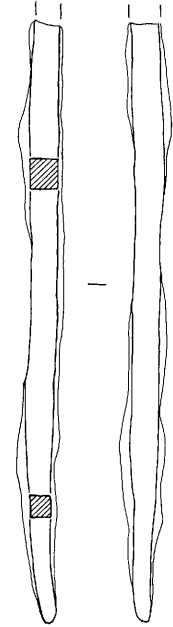
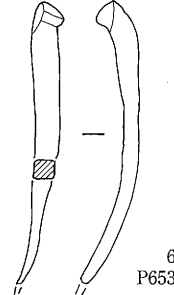
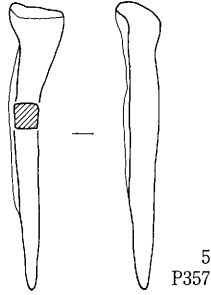
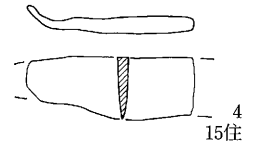
第11表 鉄器・銅製品一覧

掲載No.	器種	出土地点	時期	形状・形態・残存状態
1	燧鉄	A区 試掘トレンチ	不明	山形のもの、断面は先端部に行くほど太くなる台形、先端部厚さ3mm、全長縦24mm・横67mm
2	刀子	A区 10住	平安後期	身部の一部、切先・鏃元欠、平棟平造、棟部厚さ3mm
3	刀子	B区 14住	中世1期	茎部と身部の一部、茎尻欠、関不明瞭、平棟平造、棟部厚さ3mm、茎部に木質部錆着
4	刀子	B区 15住	中世1期	身部との一部、欠損部大、平棟平造、棟部厚さ3mm
5	釘	B区 P357	不明	IVa類? 断面方形(6×7mm)、全長77mm
6	釘	B区 P653	不明	IVa類? 脚尻欠、断面方形(5×6mm)
7	不明	C区 23住	中世	断面台形の棒状のものを一方の端を曲げ鉤状をなす、両端先欠、鉤状の側は先端に行くにつれ細くなる
8	釘?	C区 24住	中世	頭部欠、断面正方形(8×8mm)、残存部長さ83mm、比較的大きい
9	釘?	C区 24住	中世	IIa類? 脚部欠、断面正方形(5×5mm)、頭部断面は凹形に近い
10	不明	C区 24住	中世	上部・脚先欠、断面正方形(上部8×8mm、下部6×6mm)、残存部長さ160mm
11	不明	C区 31住	平安前期	銅製、欠損部大、幅180mm、厚さ20mmの板状をなす、片端が丸くなる
12	燧鉄	C区 土62	中世2期	上部左半部欠、山形であるが上部に透かしの飾りを持つ、山形の裾両端は上に張り出す、先端部厚さ5mm、全長縦23mm・横83mm
13	釘	C区 土62	中世2期	Ib類? 脚部欠、断面正方形(5×6mm)
14	鉄鐸	C区 土70	中世2期	上端部欠、厚さ1mmの板を筒状に丸めている、残存部の合わせ目は接していない
15	椀?	C区 P773	中世	銅製、何らかの器の口縁部と思われる
16	不明	C区 P827	不明	脚先欠、頭部は上部の広がる円柱形をなし、その中心に直径5mm・高さ6mmの空洞があく、脚部断面正方形(5×5mm)
17	釘	C区 P891	不明	頭部、脚尻欠、断面方形(5×4mm)
18	刀子	C区 建5 (P915)	不明	欠損部大、両端部欠損、平棟平造、棟部厚さ4mm、肉厚
19	釘	C区 検出面	不明	Va類? 脚先欠、断面方形(4.5×5mm)
20	雁股鍔	D区 豎23	不明	VIIIb類かVIIC類、刃先・篋代尻欠、刃部断面三角形、内側に刃を造る、篋被断面方形(8×9.5mm)、篋代部断面方形(6×5mm)
21	釘	D区 土181	不明	頭部・脚尻欠、断面方形(4×3.5mm)
22	不明	D区 建6 (P1027)	中世3期	ほぼ正三角形をなす、断面方形(40×5mm)
23	釘	D区 建6 (P1051)	中世3期	Va類? 脚尻欠、断面正方形(7×7mm)、残存部長さ7.3mm
24	釘	D区 P1231	不明	頭部欠、断面正方形(5.5×5.5mm)
25	釘	D区 溝18	中世3期	頭部・脚先欠、断面方形(5×6mm)
26	不明	D区 溝18	中世3期	頭部・脚尻欠、断面正方形(7×7mm)、残存部長148mm
27	不明	D区 検出面	不明	上部欠、下端部に向うにしたがって縦横共に細くなる、断面方形(中央部12×5mm、下部9×4mm)
28	釘	D区 検出面	不明	頭部・脚先欠、断面正方形(5×5mm)
29	釘?	D区 検出面	不明	IIb類の可能性もあり、断面方形(8×9mm)、全長65mm
30	釘	E区 45住	中世2期	IVa類? 頭部両端欠、断面正方形(7.5×7.5mm)、全長86mm
31	不明	E区 45住	中世2期	両端は丸みを帯び、下端部に行くにつれて細くなる直方体、断面方形(上部25×11mm、下部17×7mm)
32	釘?	E区 45住	中世2期	頭部・脚先欠、断面方形(6×5mm)
33	釘	E区 45住	中世2期	IVa類もしくはVa類、脚尻欠、断面方形(5×6mm)
34	釘	E区 45住	中世2期	頭部欠、断面方形(6×5mm)
35	釘	E区 45住	中世2期	頭部・脚先欠、断面方形(3.5×4mm)
36	刀子	E区 45住	中世2期	平棟平造、棟部厚さ3mm、身部下端・茎部欠、身部中央に木質部錆着
37	釘	E区 49住	中世	頭部欠、断面方形(6×5.5mm)
38	釘	E区 豎29	不明	頭部欠、断面方形(5×6mm)
39	刀子	E区 豎30	不明	平棟平造、両関造、刃関より棟関の方が緩やかとなる、切先・身部一部・茎尻欠、棟部厚さ5mm
40	鍔	E区 土215	中世	VI類? ただし頭部がやや短い、両丸造か片丸造か片平鑄造、全長170mm、篋被断面正方形(10×10mm)、篋代部断面正方形(7×7mm)
41	鉄鐸?	E区 土240	中世4期	厚さ1mmの鉄板を丸めたもの、胴部縦半分、上部欠
42	釘	E区 土245	不明	頭部欠、断面正方形(4.5mm×4.5mm)
43	釘?	E区 廃土	不明	VかVI類の可能性有り、両端部欠、断面方形(4.5×6mm)、上部は緩やかに段をなして細くなる
44	不明	E区 検出面	不明	片端欠、断面は扁平な板状をなす(1×8mm)、中心でやや細くなり、端に行くにつれてまた太くなる

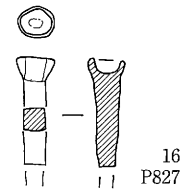
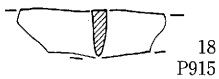
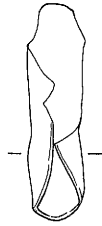
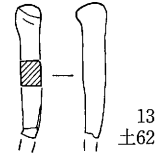
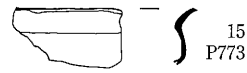
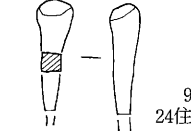
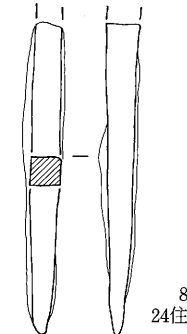
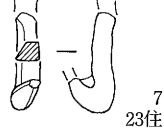
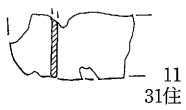
A区(1~2)



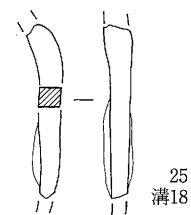
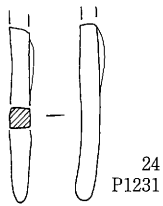
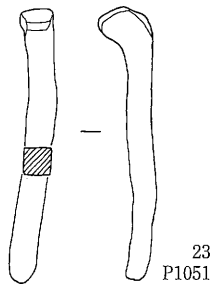
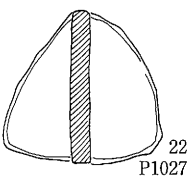
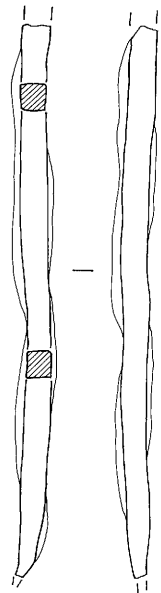
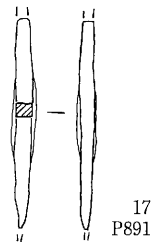
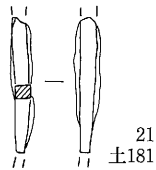
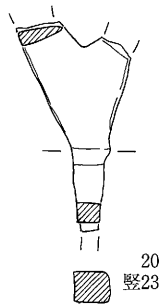
B区(3~6)



C区(7~19)

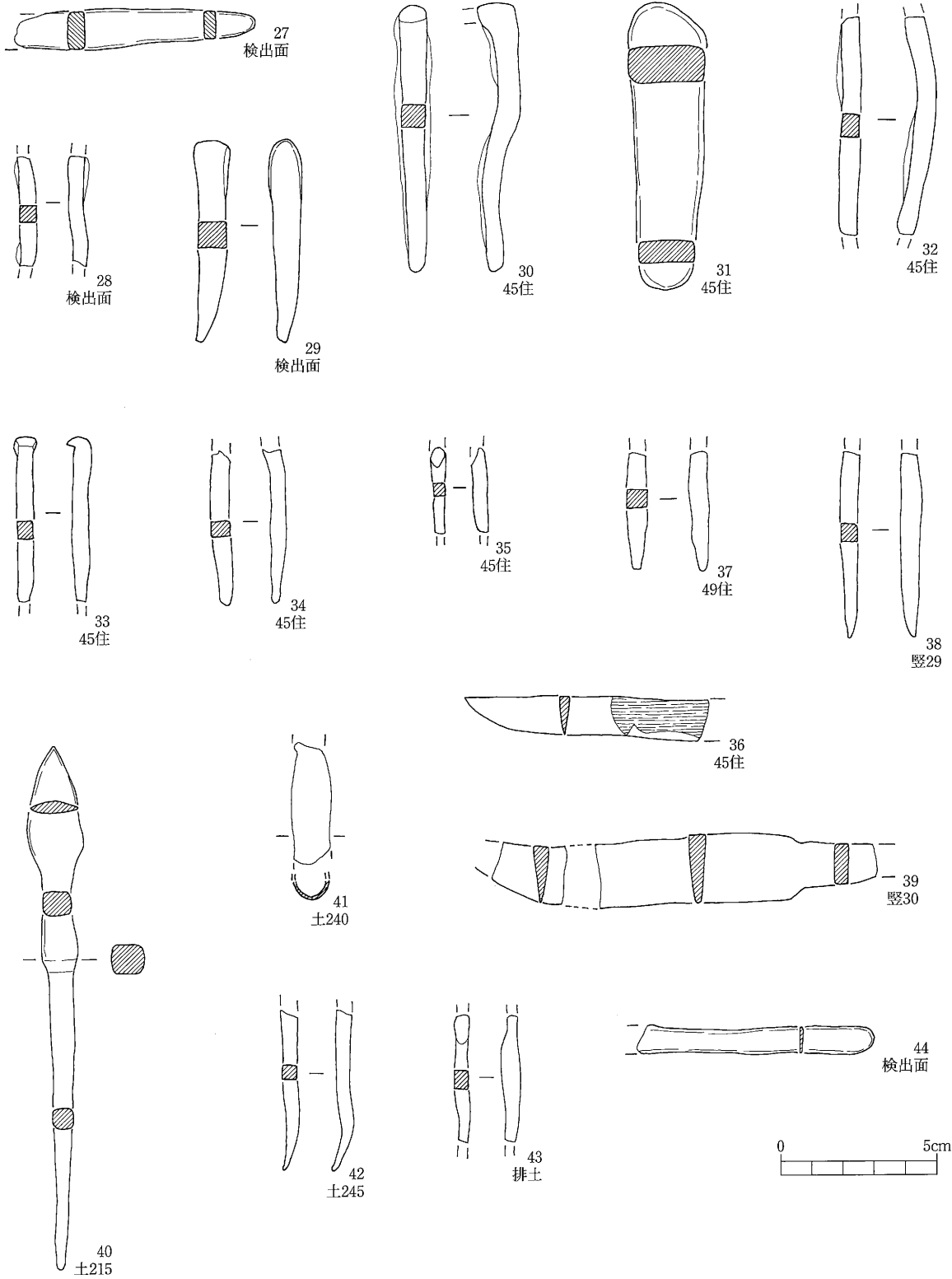


D区(20~29)



第48図 金属器(1)

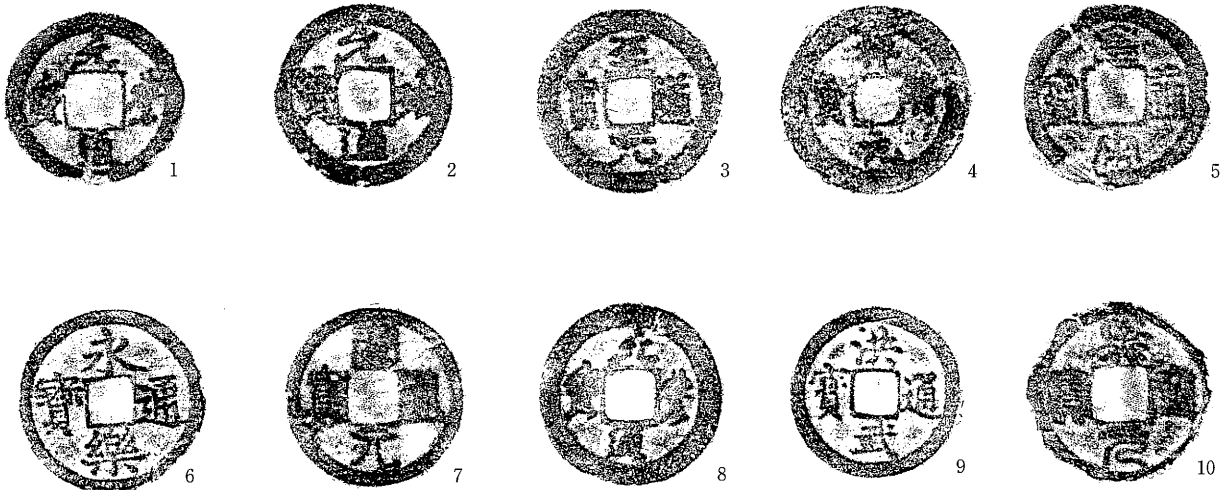
E区(30~44)



第49図 金属器(2)

第12表 錢貨一覽

掲載 No.	図 No.	貨幣名	書体	出土地点	時期	初鑄年	径	備考
1		不明		C区21住	不明	不明	22.0	完形、摩滅大
2		皇宋通寶	篆	C区P773	中世	1308(北宋)	24.0	一部欠、摩滅大
3		政和通寶	分階	C区検出面	不明	1111(北宋)	24.5	2/3残存、4点一括出土
4		不明		C区検出面	不明	不明	不明	一部欠、4点一括出土
5		不明		C区検出面	不明	不明	不明	一部欠、4点一括出土
6		不明		C区検出面	不明	不明	不明	一部欠、4点一括出土
7	1	元豊通寶	行	D区土125	中世	1078(北宋)	24.0	完形、2点一括出土
8		洪武通寶		D区土125	中世	1368(明)	24.0	完形、2点一括出土
9	2	元祐通寶	行	D区土125	中世	1093(北宋)	24.0	一部欠、8・9とは別地点出土
10	3	至道元寶	真	D区土162	中世	995(北宋)	25.0	完形、7枚一括出土、木板付着
11		開元通寶		D区土162	中世	621(唐)	24.5	完形、7点一括出土、木板付着
12	4	祥符元寶		D区土162	中世	1009(北宋)	25.0	完形、7点一括出土、木板付着
13		□□元寶	真	D区土162	中世	不明	24.0	1/2残存、7点一括出土、木板付着
14		不明		D区土162	中世	不明	24.0	完形、摩滅大、7点一括出土、木板付着
15		不明		D区土162	中世	不明	23.0	1/2残存、7点一括出土、木板付着
16		不明		D区土162	中世	不明	不明	小破片、個体数不明、7点一括出土
17		開元通寶		D区土164	中世	621(唐)	不明	1/2残存、木板付着
18	5	皇宋通寶	篆	D区土173	不明	1038(北宋)	25.0	一部欠
19	6	永樂通寶		D区土184	中世	1408(明)	24.5	完形、2点一括出土
20		熙寧元寶	真	D区土184	中世	1068(北宋)	24.0	完形、摩滅大、2点一括出土
21		不明		D区P1306	中世	不明	24.0	3/4残存、摩滅大、6点一括出土、木板付着
22		熙寧元寶	篆	D区P1306	中世	1068(北宋)	24.0	一部欠、摩滅大、6点一括出土、木板付着
23	7	開元通寶		D区P1306	中世	621(唐)	24.0	完形、6点一括出土、木板付着
24	8	元豊通寶	行	D区P1306	中世	1078(北宋)	24.5	完形、6点一括出土、木板付着
25		元祐通寶	篆	D区P1306	中世	1093(北宋)	24.5	完形、6点一括出土、木板付着
26	9	洪武通寶		D区P1306	中世	1368(明)	23.0	完形、6点一括出土、木板付着
27		熙寧元寶	真	D区P1449	中世	1068(北宋)	23.0	完形、摩滅大、3点一括出土
28		不明		D区P1449	中世	不明	24.0	一部欠、摩滅大、3点一括出土
29		不明		D区P1449	中世	不明	24.0	一部欠、摩滅大、3点一括出土
30		元豊通寶		E区豎32	不明	1078(北宋)	不明	破片、欠損大
31	10	熙寧元寶	篆	E区土245	不明	1068(北宋)	25.0	完形、32とは別地点出土
32		不明		E区土245	不明	不明	不明	破片、欠損大、31とは別地点出土



第50図 錢貨

3 石器・石製品

(1) 回収個体群の概要

新村遺跡第Ⅰ次調査では61点の石器を回収した。そのほとんどが共存出土した土器の型式から平安時代もしくは中世に帰属すると推定される。現場段階では主に硬砂岩を素材とする広義の石器（主に、竈構築材と中世に帰属すると考えられる土坑の覆土に認められた礫および礫片）を多く検出した。そのほとんどについては図面と写真で出土状況等を記録し、回収しなかった。主として、二次加工の認められる狭義の（より限定的には機能を推定し易い硯形石器と砥石状石器などに代表される）石器を回収したが、整理作業の結果、礫および機能を推定しにくい礫片・剥片類などの石器が少なからず回収されており、石器の認定・回収の基準を明確に提示できなくなった。

(2) 石材概観（第18・19表参照）

10%を超える石材は、硬砂岩（11点）、チャート（9点）、安山岩（8点）、溶質凝灰岩（8点）、凝灰岩（7点）であり、そのほか変質凝灰岩（3点）、黒耀岩（3点）、花崗閃緑岩（3点）、砂岩（2点）、砂質頁岩（2点）、粘板岩（2点）、花崗岩（1点）、頁岩（1点）、石英（1点）である。

(3) 器種概観^{註1}（第18・20表参照）

10%を超える器種は、礫片1類（10点）、砥石状石器（9点）、礫（8点）、礫片（8点）、礫片複合（7点）であり、そのほか剥片（3点）、礫片2類（3点）、礫石器2類（2点）、礫石器複合（2点）、二次加工のある剥片（2点）、硯形石器（2点、第51図ID39・44）、楔状石核（1点）、石核（1点）、鋸形石器（1点）、微細剥離痕ある剥片（1点）、礫石器3類（1点）である。

(4) 母岩別資料概観（第17表、第51図参照）

接合・母岩識別作業を行った結果、接合資料3例6点、同一母岩資料3例7点を確認した。総回収個体数61点から礫および接合の可能性のない個体数を引いた差を分母とし、総接合個体数を分子として算出した接合率は12.0%である。同様に、総同一母岩個体数を分子として算出した同一母岩率は14.0%であり、接合率と同一母岩率の和、すなわち母岩構成率は26.0%である。なお、総接合個体数を接合母岩数で除した平均接合個体数は2点である。以下では接合・同一母岩資料を母岩ごとに概観する。

母岩ID1（CrAs04、ID04・05・49）

溶質凝灰岩が素材である。ID04の帰属遺構はSB13、ID05の帰属遺構はSK060であり、ID49は帰属遺構が不明である。三点とも板状の砥石状石器である。

母岩ID2（Tu16、接合番号R16、ID16・57）

凝灰岩を素材とした板状の砥石状石器で同一遺構内（SP0652）での接合資料である。接合面は折れ、もしくは折り取り面である。

母岩ID3（HSa40、接合番号R40、ID40・41）

硬砂岩を素材とした礫片複合の同一遺構内（SP1192）での接合資料である。

母岩ID4（Tu46、接合番号R46、ID46・47）

凝灰岩を素材とした砥石状石器で、接合面は折れ、もしくは折り取りである。ID46・47ともに帰属遺構は不明である。

母岩ID5（HSa54、ID54・55）

両個体とも硬砂岩を素材とする礫片である。同一遺構内（SB02）からの出土である。

母岩ID6（An59、ID59・60）

両個体とも安山岩を素材とした礫片複合であり、同一遺構内（SK218）からの出土である。

(5) 小結

石器の認定・回収基準を統一し、個々の遺物の出土地点の三次元座標の記録による回収精度の向上が、石器群の共時態的、通時的把握には肝要である。

[補註]

註1 本項で用いた器種名は『岡の宮遺跡Ⅰ』（太田 2001）での仮設定義を用いたので、参照されたい。

[主要引用・参考文献]

太田圭郁 1998 「②石器・石製品」『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市教育委員会pp.75-105

太田圭郁 2000 「4 石器」『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp.93-122

太田圭郁 2001 「3 石器」『岡の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会 pp.25-29

加島泰祐 2001 「B 石器」『平田北遺跡Ⅵ』松本市教育委員会 pp.18-19

項目	数	率
総回収個体	61	単独率 74.0%
接合個体数	6	接合率 12.0%
同一母岩個体数	7	同一母岩率 14.0%
母岩別資料個体数	13	母岩構成率 26.0%
母岩数(接合資料母岩数)	6(3)	平均接合個体数 2.0
自然礫(非接合対象個体)	11	自然礫含有率 18.0%
三次元座標記録個体数	12	三次元座標記録率 19.7%
遺構帰属個体数	50	帰属遺構率 82.0%

第13表 主要諸元一覧

遺構略号	遺構名
SB	住居址
SC	建物址
SD	溝状遺構
SJ	竪穴状遺構
SK	土坑
SP	ピット
TK	検出面
TT	トレンチ
TY	排土
TZ	試掘トレンチ

第14表 遺構略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒耀岩
An	安山岩
CrAs	溶質凝灰岩
GrDi	花崗閃緑岩
Gr	花崗岩
HSa	硬砂岩
Sa	砂岩
SaSh	砂質頁岩
Sh	頁岩
MeTu	変質凝灰岩
Tu	凝灰岩
St	粘板岩
Ch	チャート
Qu	石英

第15表 石材略号一覧

器種略号	器種名
C	石核
F	剥片
BC	楔状石核
FP	鋸形石器
RF	二次加工ある剥片
MF	微細剥離痕ある剥片
P	礫
PT	礫片
PT1	礫片1類
PT2	礫片2類
PTC	礫片複合
P2	礫石器2類
P3	礫石器3類
PC	礫石器複合
Ws	砥石状石器
Su	硯形石器

第16表 器種略号一覧

母岩ID	母岩番号	接合番号	ID(括弧内非接合)	出土遺構	接合個体数	総個体数	残存率	重量(g)	分離順序	備考
1	CrAs04	M04	(04),(05),(49)	04(SB13 No.1),05(SK060 No.1),49(TK)	0	3	-	174.6	-	
2	Tu16	R16	16,57	16(SP0652),57(SP0652)	2	2	1/2	59.4	-	
3	HSa40	R40	40,41	40(SP1192),41(SP1192)	2	2	1/16	121.0	-	
4	Tu46	R46	46,47	46(TK),47(TK)	2	2	1/4	24.6	-	
5	HSa54	M54	(54),(55)	54(SB02),55(SB02)	0	2	-	7.0	-	
6	An59	M59	(59),(60)	59(SK218),60(SK218)	0	2	-	123.0	-	

第17表 母岩別資料一覧

石材略号	C	F	BC	FP	RF	MF	P	PT	PT1	PT2	PTC	P2	P3	PC	Ws	Su	計	接合個体数	接合率	石材略号
Ob				1	1	1											3	0	0.0%	Ob
An								2	1	4			1				8	0	0.0%	An
CrAs							1	4							3		8	0	0.0%	CrAs
GrDi									3								3	0	0.0%	GrDi
Gr											1						1	0	0.0%	Gr
HSa							2	2	4	1	1	1					11	2	18.2%	HSa
Sa							1	1	1								2	0	0.0%	Sa
SaSh			1						1	1							2	0	0.0%	SaSh
Sh								1									1	0	0.0%	Sh
MeTu											1	1		1			3	0	0.0%	MeTu
Tu								1							6		7	4	57.1%	Tu
Sl																2	2	0	0.0%	Sl
Ch	1	2	1		1		4										9	0	0.0%	Ch
Qu														1			1	0	0.0%	Qu
計	1	3	1	1	2	1	8	8	10	3	7	2	1	2	9	2	61	6	9.8%	計

第18表 石材単位器種組成

出土遺構1	Ob	An	CrAs	GrDi	Gr	HSa	Sa	SaSh	Sh	MeTu	Tu	Sl	Ch	Qu	計
SB02					2										2
SB05				1											1
SB08					1										1
SB10						1									1
SB13			1												1
SB24						1				1					2
SB25															1
SB26			1			1				1			3		6
SB33				1											1
SB39											1				1
SB45								1							1
SD25			1												1
SI04		1													1
SI14														1	1
SI17		1													1
SI20					1										1
SK060			1												1
SK062		3	1			1									5
SK081												1			1
SK191												1			1
SK193						1									1
SK218		2													2
SP0072													1		1
SP0173											1				1
SP0210			2										1		2
SP0652											2				2
SP0940													1		1
SP1007						1									1
SP1020		1													1
SP1042													1		1
SP1192					2									1	2
SP1450								1							1
SP1456								1							1
SP1458													1		1
SP1483				1											1
TK	1		3						1	3					8
TY										1					1
TZ						1							1		2
計	3	8	8	3	1	11	2	2	1	3	7	2	9	1	61

第19表 遺構単位石材組成

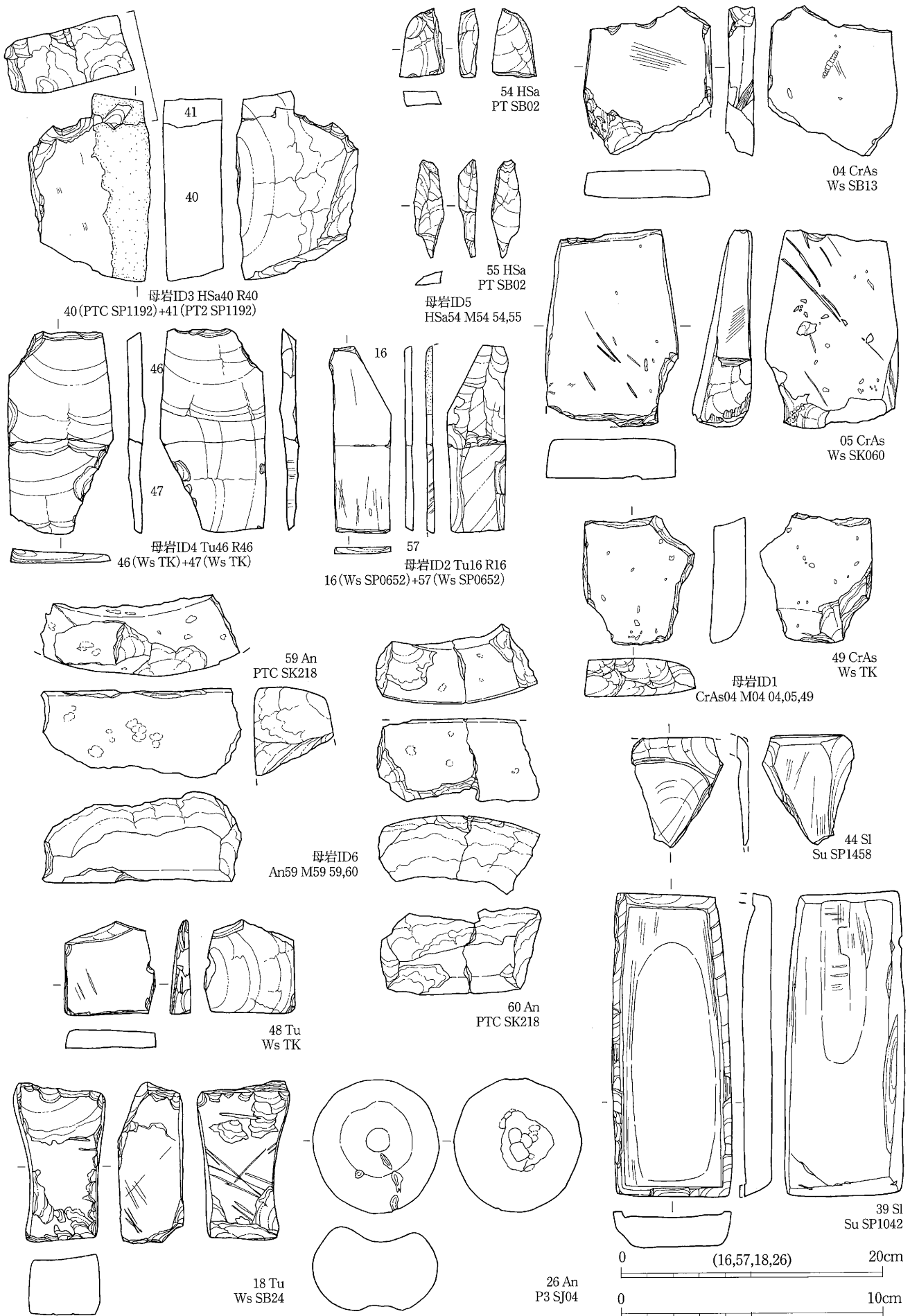
出土遺構1	C	F	BC	FP	RF	MF	P	PT	PT1	PT2	PTC	P2	P3	PC	Ws	Su	計
SB02								2									2
SB05									1								1
SB08											1						1
SB10																	1
SB13															1		1
SB24							1										2
SB25								1									1
SB26								5							1		6
SB33									1								1
SB39									1								1
SB45							1										1
SD25									1								1
SI04														1			1
SI14															1		1
SI17							1										1
SI20										1							1
SK060															1		1
SK062								1	1	1	2						5
SK081									1								1
SK191			1														1
SK193										1							1
SK218											2						2
SP0072									1								1
SP0173			1														1
SP0210										2							2
SP0652															2		2
SP0940							1										1
SP1007									1								1
SP1020									1								1
SP1042																	1
SP1192											1	1					2
SP1450										1							1
SP1456											1						1
SP1458																1	1
SP1483											1						1
TK								1	2			1			4		8
TY																	1
TZ												1			1		2
計	1	3	1	1	2	1	8	8	10	3	7	2	1	2	9	2	61

第20表 遺構単位器種組成

ID	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量	石材	母岩	接合	実測図	備考
01	SB05	No.1	PT1	580.0	GrDi	単		-	
02	SB08	籠	PTC	8200.0	Gr	単		-	
03	SB10	No.25	PT2	638.0	Sa	単		-	
04	SB13	No.1	Ws	41.6	CrAs	CrAs04	M04	○	
05	SK060	No.1	Ws	96.0	CrAs	CrAs04	M04	○	
06	SK062	No.1	PT2	406.0	An	単		-	SC3
07	SK062	No.2	PTC	458.0	An	単		-	SC3
08	SK062	No.3	PTC	878.0	An	単		-	SC3
09	SK062	No.4	PT	314.0	CrAs	単		-	SC3
10	SK062	No.5	PT1	300.0	HSa	単		-	SC3
11	SP0072	-	F	6.1	Ch	単		-	SC2
12	SP0173	-	C	54.0	Ch	単		-	
13	SP0210	-	PT1	414.0	An	単		-	
14	SP0210	-	PT1	2376.0	An	単		-	
15	TK	-	P2	138.0	MeTu	単		-	
16	SP0652	-	Ws	30.6	Tu	Tu16	R16	○	
17	SB24	NW	PT1	18.6	HSa	単		-	
18	SB24	No.1	Ws	650.0	Tu	単		○	
19	SB25	NW	P	71.0	HSa	-		-	
20	SB26	NW	PC	60.0	MeTu	-		-	
21	SB26	NW	P	110.0	Ch	-		-	
22	SB26	NW	P	13.4	Ch	-		-	
23	SB26	NW	P	120.0	Sa	-		-	
24	SB26	NW	P	9.7	CrAs	-		-	
25	SB26	NW	P	25.4	Ch	-		-	
26	SI04	No.7	P3	738.0	An	-		○	
27	SK081	-	P	252.0	Ch	-		-	
28	SP0940	-	BC	13.4	Ch	単		-	
29	TK	-	MF	1.2	Ob	単		-	
30	TZ	トレンチ	RF	5.5	Ch	単		-	

第21表 石器属性一覧

ID	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量	石材	母岩	接合	実測図	備考
----	-------	-------	----	----	----	----	----	-----	----



第51図 石器・石製品

VI 調査のまとめ

今回の新村遺跡の発掘調査では、出土遺物の検討から古代～中世を6期の時期区分に大別できる。古代では、平安時代前半と後半の2期、中世では12～15世紀を4期に区分した（V遺物1・2参照）。ここでは、この時期区分に則り、古代～中世の遺構の分布および変遷について、時期ごとに概観したい。

1 集落の変遷

平安時代前半：松本平土器編年5～7期（8世紀末～9世紀後葉）

20住・21住・22住・30住・31住・土91・土92・土95・土97が該当する。この時期の遺構は、すべてC区に分布している。住居址は5軒検出されており、すべてC区西端に集中してみられる。確認された遺構数も少なく、限定された区域にしか確認できないことから、小規模な集落形成であったと推定できる。また、20・21・30住出土遺物の中に、美濃須衛窯産の須恵器甕がみられるが、近在する秋葉原古墳群や安塚古墳群の副葬品のなかに、美濃須衛窯産須恵器が多くみられ、これらとの関連も注目される。

平安時代後期：松本平土器編年11～12期（10世紀後葉～11世紀前葉）

A区8住・旧8住・10住、B区17住、C区26住、E区37住・39住が該当する。該期の住居址は、D区を除くほぼ全域で確認されている。遺構の分布を見ると、B・C区は密集度が低く、住居址1軒あるいは2軒が近接しているだけの、散在的な状況を呈している。しかし、A区では一辺約35mの方形区画溝（溝2）に囲まれた空間に、竪穴住居址と掘立柱建物址などが集中している。この区画内部の分布状況をみると、溝2から分岐した溝5によって、区画内を更に南北2区画に分けており、北側に竪穴住居址群、南側に掘立柱建物址とピット群が集中する様相を呈している。該期のこうした遺構のあり方は、塩尻市吉田川西遺跡に類例がみられる。吉田川西遺跡では、一辺45mの方形区画の内側が、東西2区画に分けられ、西側に竪穴住居址群、東側に掘立柱建物址群が分布している。報告書では、方形区画の溝を、防御的な性格をもつ「濠」と考え、これらに囲まれる遺構群を「領主」層の「館」としている。新村遺跡A区の区画溝は、吉田川西遺跡と比較して規模が小さく、また出土遺物に特殊性が窺えるものが少ないが、遺構が平安時代後期の11世紀代が中心となっている点、区画溝で囲まれる点、区画内を2分し、竪穴住居址群と掘立柱建物址群に分けている点などの共通した特徴がある。このことから、新村地区の該期における領主の館的な性格が考えられよう。

中世1期（11世紀後半～12世紀中頃）

11世紀前半にみられた「館」的な遺構は継続せず、この時期には一旦途絶えてしまう。該期の遺構は、B区の小規模な竪穴（14・15住）と建1およびピット・土坑群が該当する。集落内に、竪穴と掘立柱建物址の2種類の建物がみられる。遺物では、白磁が多量に出土するという大きな特徴がみられる。

中世2期（12世紀後半～13世紀前半）

C区竪4・竪10・土62・土70・土75・土85・P775、D区33住、E区45住・46住が該当する。遺構のあり方は、中世1期と同様に、竪穴・ピット群（掘立柱建物址）・土坑が散在している。遺物では、中世1期に搬入がはじまった白磁に加え、青磁・青白磁が組成の中にみられるようになる。特に青磁（龍泉窯系）の出土量は、白磁を凌駕するようになる。

中世3期（13世紀後半～14世紀前半）

B区溝28、C区竪6、D区建6・溝17・溝18・土161が該当する。遺構では、この時期に大きな変化がみられる。D区に大形の建物址6が出現する。建6は、主屋2×5間で周囲に1間分の庇が付き、さらに北側に1間分の孫庇が付くという特殊な形態をしている。この建物址は、該期のものとしては、松本市内最大級の規模をもつものである。また、建6南側に建物址と主軸を同一にして延びる溝17・18は、建6の区画か、2条平行して延びる点から道路遺構の可能性も考えられる。この区画溝を伴った建6は、該期の中心的な建物とし

て考えられる。また、B区を東西に走る溝28は、この時期に開鑿されたものとして捉えられる。このことから、該期に新たな有力者の出現が窺え、新たな溝を開鑿した開発が行なわれた可能性が考えられる。

中世4期（15世紀後半）

14世紀後半～15世紀前半は遺物・遺構についてははっきりせず、今回の調査部分は居住域として利用されなくなる。15世紀後半になると、E区南東部に掘立柱建物址・柱穴列・竪穴状遺構・土坑で構成される。これらが組み合わさって、1軒の屋敷地を構成していたものと考えられる。

2 条里的区画溝について

今回の調査では、約100m～120mの間隔で、溝により方形に区画された地割が確認された。これは、以前より指摘されていた新村条里的遺構の地割である可能性が高い。以下、発見された溝区画について記述する。

(1) 今回の調査結果の検討

調査区のA区とE区の南端には、流路址が発見された。この流路は、昭和57年に行なわれた県営ほ場整備事業で、地形が改変されるまでは水流があり、実際に耕作などに使用されていたもので、「堂沢」という名称が付けられていた。この堂沢は、東へ向けて流れており、松本市島立の三の宮で奈良井川に流れ込んでいる。堂沢は、中央自動車道長野線の調査において、三の宮遺跡の北端で確認されており、その調査所見では、11世紀までは大きく蛇行した自然流路であったものを、人工的に改修している状況を指摘している。本調査A・E区で発見された堂沢も開析が深く、かなり古くから存在した自然流路と考えられる。このことから、この堂沢がこの地区の基本水路となっている可能性が高い。

これに対して、B・C・D・E区で検出された溝群（6・7・12・13・14・22・23・26・28・29）は、直線的で、主軸が東西・南北方向に一致し、人工的に開鑿された可能性が高い。これらの溝は、調査区外へ延びており、延長して想定した場合に方形区画が看取できる。方形区画と考えた場合の溝の間隔は、南北に通るD区の溝22・23とC区の溝13では240mを測る。なお、溝13とE区東端で、現在の道路と重なる部分の距離は138～140mを測る。東西に通るものとしては、B区溝28とE区溝26との距離は68m、旧堂沢と溝26は68～74mを測り、溝26は溝28と旧堂沢の中間に位置する。また、溝22・23を調査区外南側へ直線で伸ばすと、小野神社の西端の溝と一致する。

(2) 島立条里的遺構の展開との比較

島立地区では、中央自動車道長野線関係の調査で島立地区の土地開発の変遷について大きな成果を得ている。この調査では、およそ4段階の画期を設けて島立地区の条里地割の展開を考察している。

第1段階は、7世紀後半以降で、自然地形に従って流れる河川を利用して開発が行なわれた時期にあたる。このときは、まだ条里地割にはなっていなかったようである。

第2段階は、9世紀後半～9世紀後半で西から東へ流れる河川は、およそ1町ごとに配置される。しかし、南北の境界線は、地形に合わせた開発となっている。

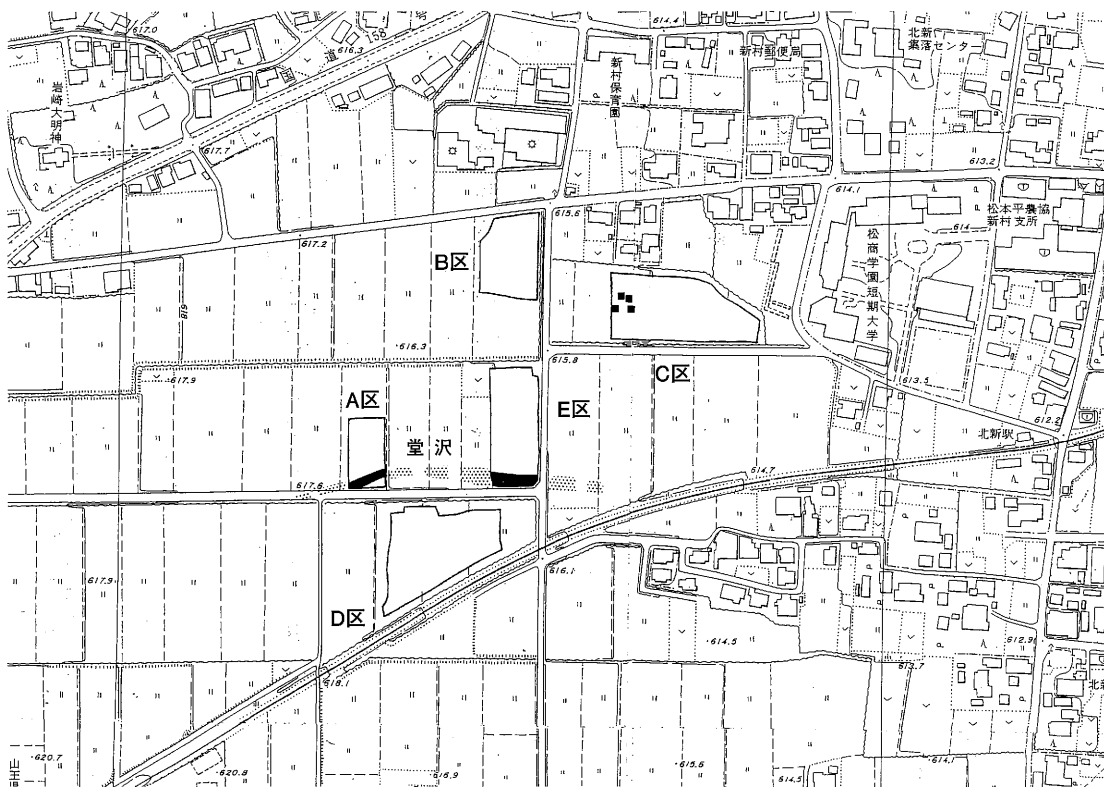
第3段階では、11世紀後半～12世紀前半で、再開発が行なわれた時期である。第2段階で開発された河川が10世紀代に荒廃するが、これを再び利用して開発される。

第4段階は14世紀以降で、これ以降安定した土地管理が行なわれ、現在の地割の基礎となった。この島立地区の開発状況では、4つの画期がみられるが、新村においては、3つの画期がみられる。第1の画期は、今回の調査地が初めて居住地として利用される8世紀末～9世紀にかけての時期である。この段階には、堂沢は存在していたものの、その他の区画溝は未開鑿であったものと考えられる。第2の画期は、A区に区画溝に囲繞された「館」跡が出現した10世紀後半から11世紀である。島立地区での本格的な再開発は11世紀の後半からであり、それに先行する形で新村が開発されていることが注目される。しかし、まだ安定した土地管理がなされていなかったようで、大規模な条里区画の溝の開鑿などは、あまり進んでいなかった

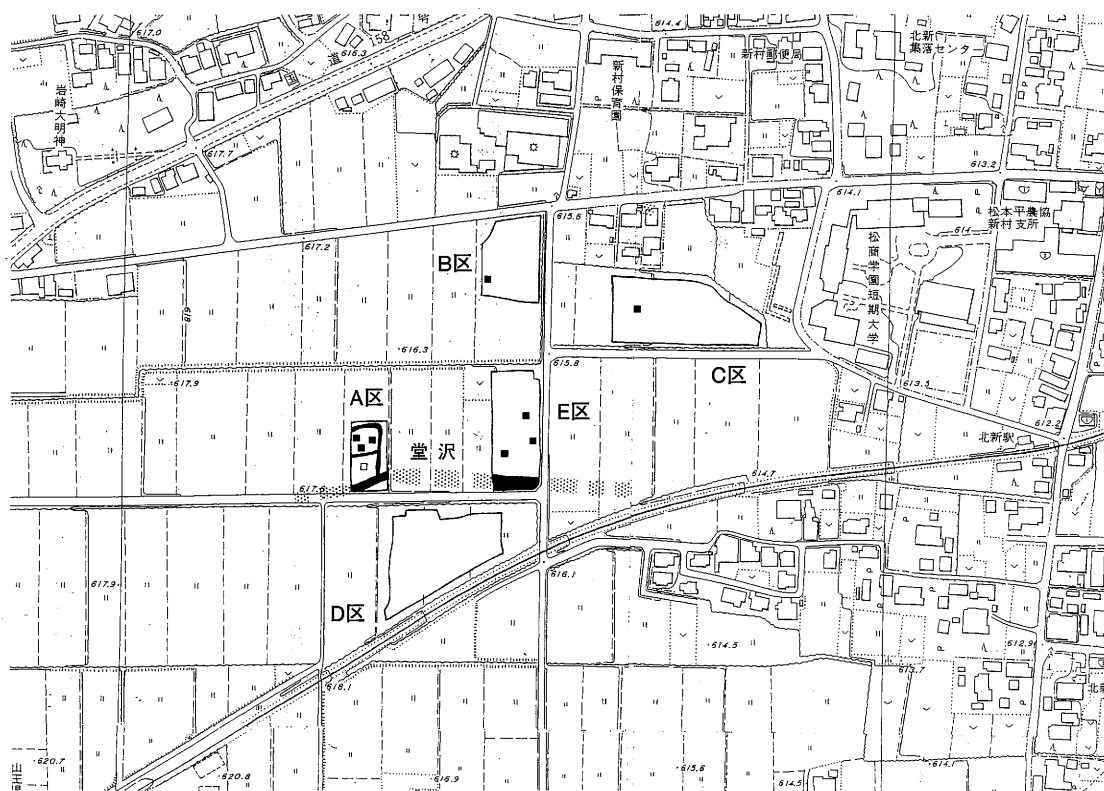
ようである。第3の画期は、本格的に条里的な開発が入った13世紀後半から14世紀前半以降の時期である。D区にみられる大形建物の建6から、有力者の出現が窺え、区画溝もほぼ1町間隔に開かれる。島立地区でも14世紀以降は、安定した土地管理が行なわれており、島立・新村両地区のかつての表面条里の地割と一致する。このことから、新村における本格的な条里区画の形成は、13世紀後半～14世紀前半以降と考えられる。また、文献史料では、「諏訪大社下社文書」の応永七年（1400）のなかに、「信濃国筑摩郡春近領塩尻東西・小池東西・新村南方等」との記述がみられ、新村が春近領であったことも、開発の歴史を考える上では加味しなければならない要因である。

今回は、新村地区における初めての古代～中世にかけての集落址の発掘調査であった。調査結果から、従来から指摘されていた新村条里的遺構の存在が濃厚となり、新村地区だけでなく、奈良井川西岸域を含めた開発史を考える上で大きな資料を得ることができた。

最後に、本調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた松本大学・松商学園短期大学、ならびに地元の皆様へ感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。



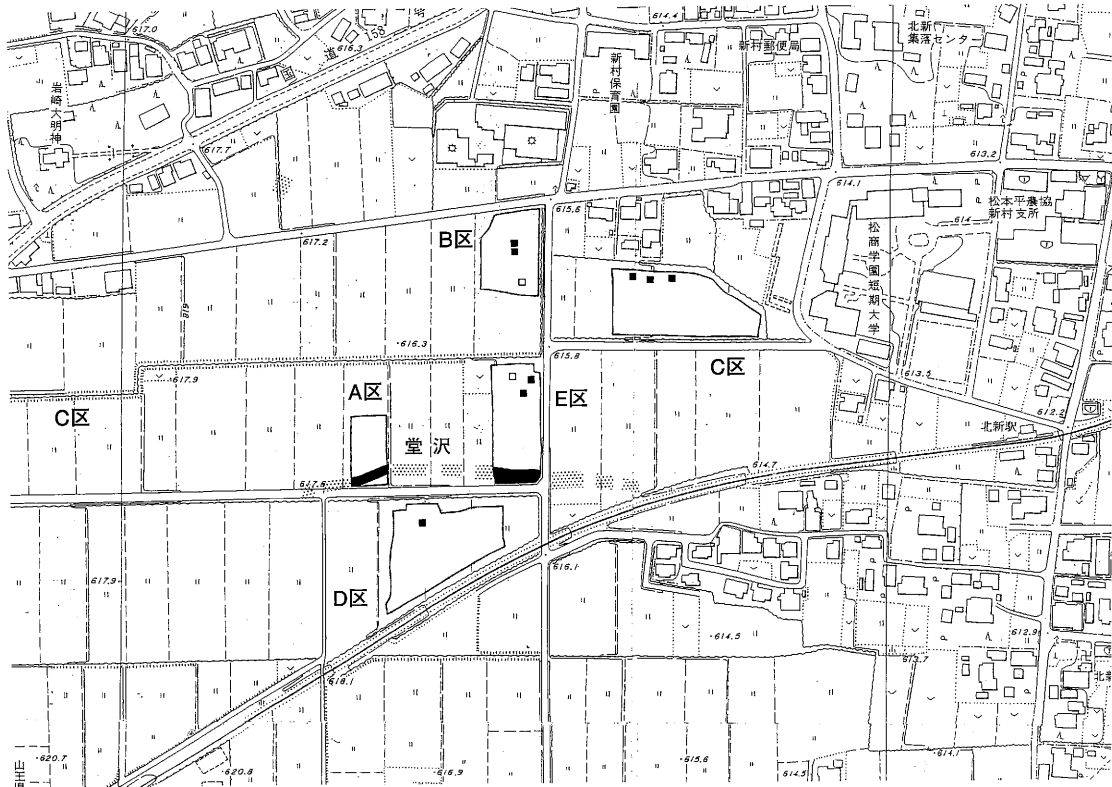
平安時代前半(8C末~9C後)



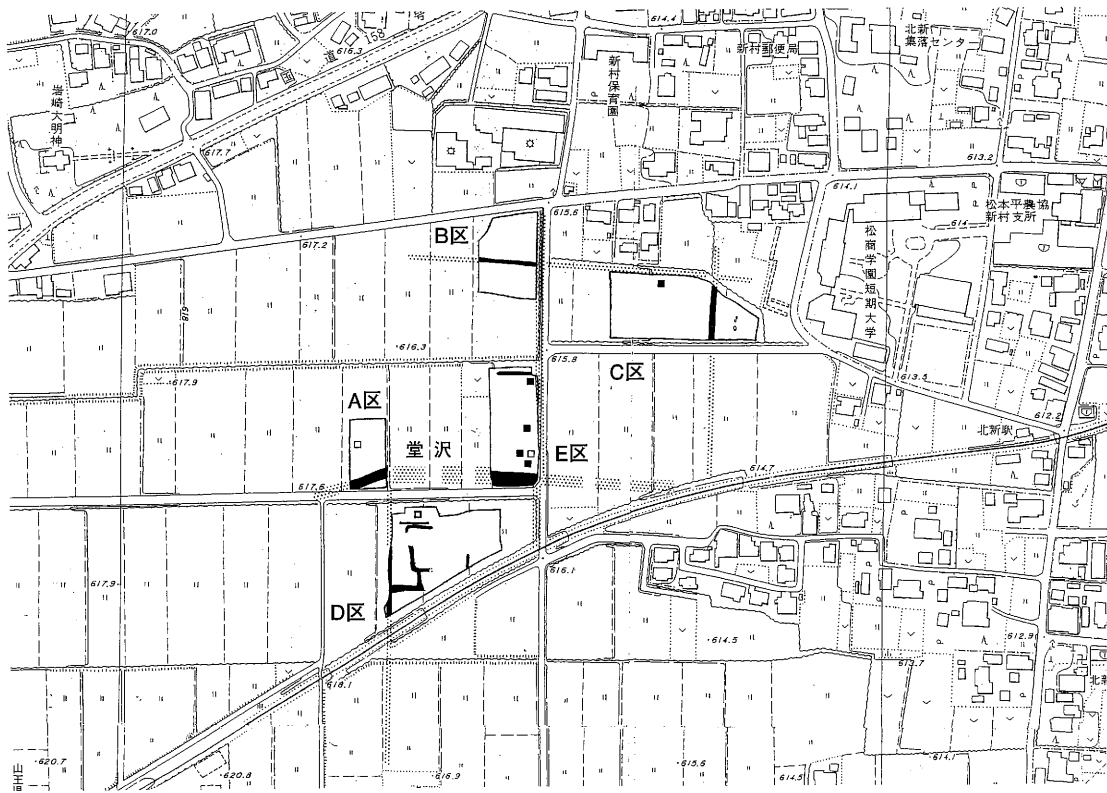
平安時代後半(10C後~11C前)

- 竪穴住居・竪穴状遺構
- 堀立柱建物址
- ▬ 区画溝
- ▨ 推定区画溝

第52図 集落の変遷(1)



中世1~2期(11C後~13C前)



中世3~4期(13C後~14C前・15C後)

S=1/5,000

第53図 集落の変遷(2)

写真図版



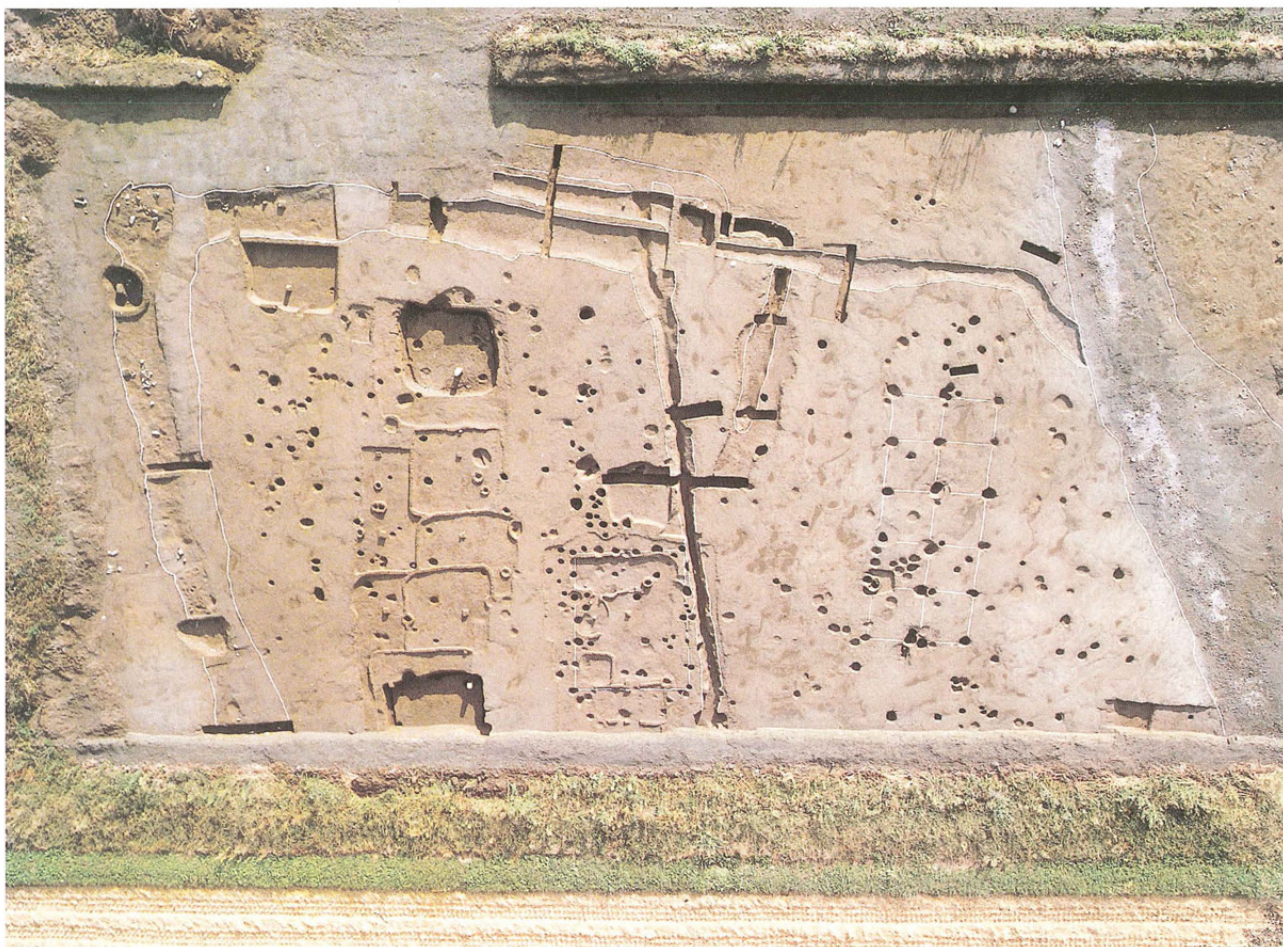
D区 建6



調査区俯瞰（写真上方が東）



調査区全景（写真上方が東）



A区 全景 (写真上方が東)



B区 全景 (写真上方が西)

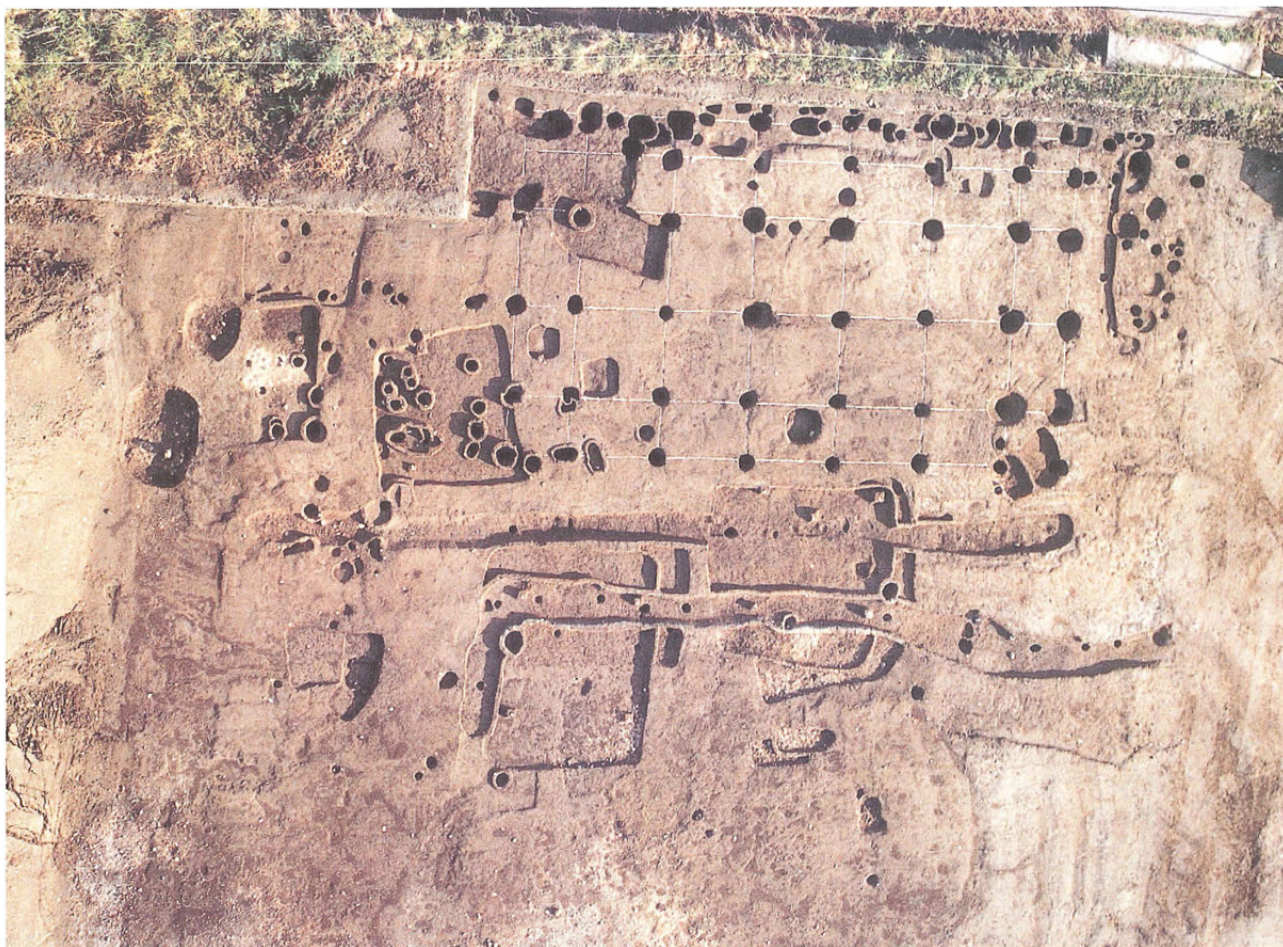


C区 全景 (写真上方が北)



D区 全景 (写真上方が北)

図版4



D区 建6 (写真上方が北)



E区 全景 (写真上方が東)



A区 南側遠景



B区 東側遠景



A区 8住出土状況
(西から)



A区 8住カマド出土状況
(西から)



A区 8住カマド完掘状況
(西から)

A区 8住カマド支脚出土状況
 (西から)
 支脚上に土師器碗が2点伏せて置かれている



A区 8住カマド支脚出土状況
 (西から)
 一番上に置かれた土師器碗を取り除く



A区 8住カマド支脚出土状況
 (西から)
 支脚上に置かれていた土師器碗2点を取り除く

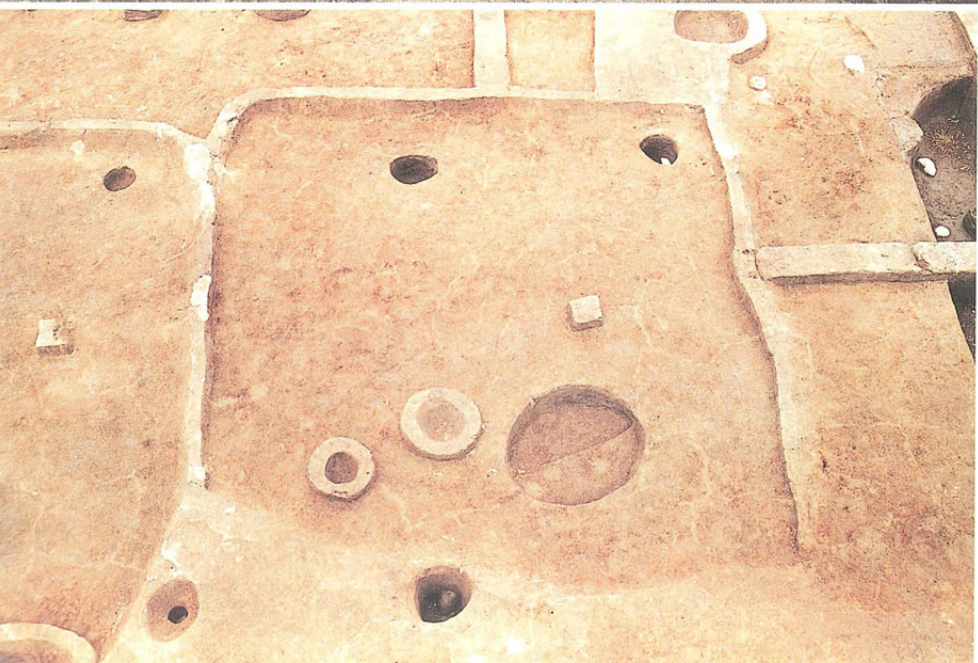




A区 8住P₁出土状況
(西から)



A区 旧8住カマド出土状況
(西から)



A区 6住完掘状況
(南から)

A区 10住出土状況
(西から)



A区 10住カマド出土状況
(西から)



A区 10住遺物出土状況
(No.38)





A区 建3出土状況
(北から)



A区 柱穴列1出土状況
(東から)



A区 溝2出土状況
(東から)

A区 溝5・9および溝
2・3・8出土状況
(東から)



B区 15住出土状況
(西から)

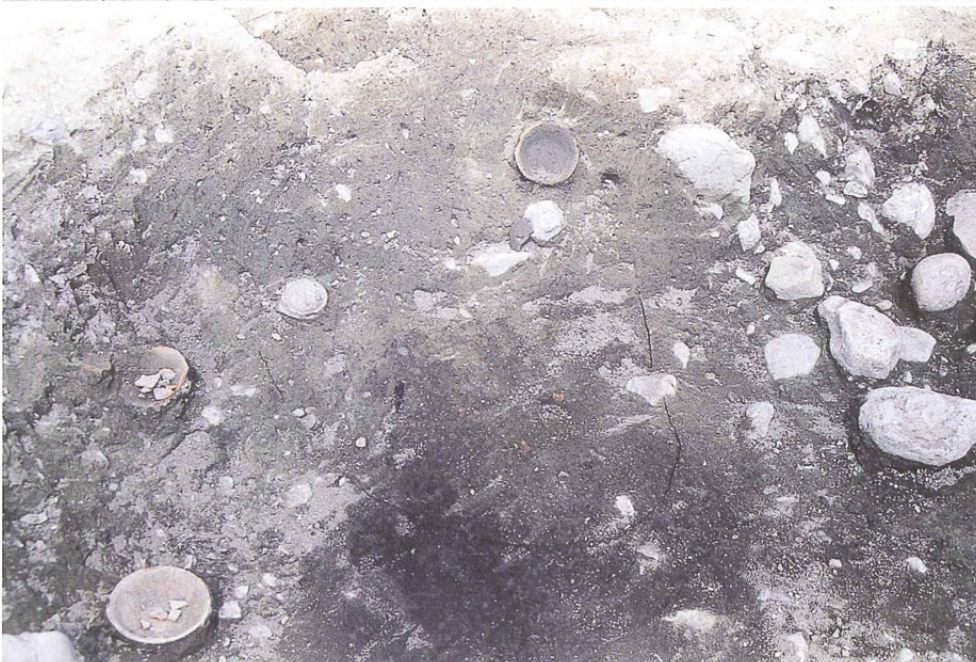


B区 17住出土状況
(西から)





B区 17住完掘状況
(西から)

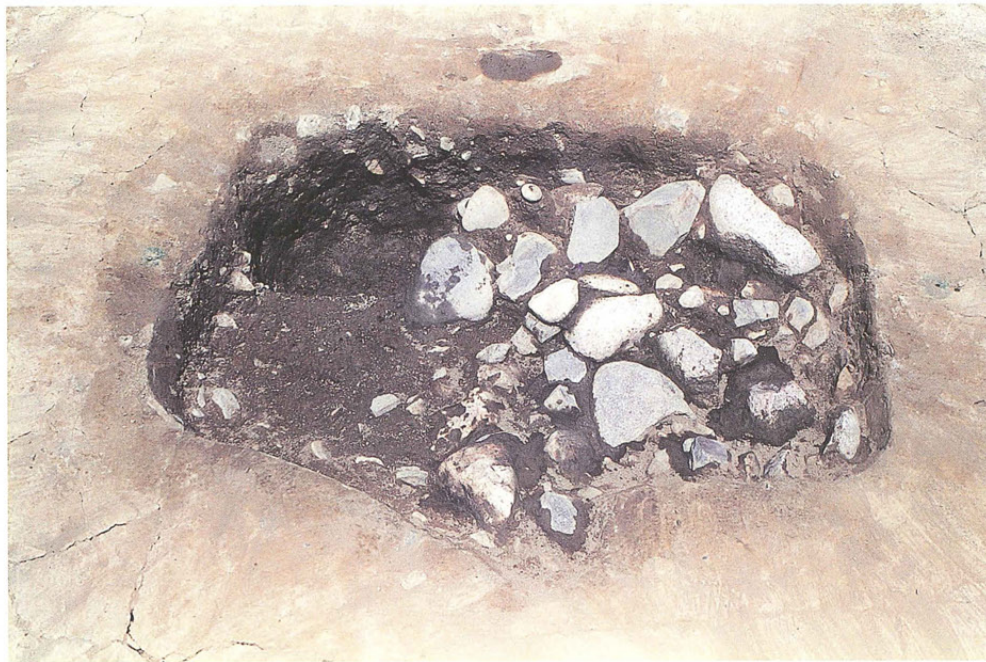


B区 17住焼土範囲
出土状況
(西から)



B区 建1出土状況
(東から)

B区 土26出土状況
(南から)



B区 土26遺物出土状況

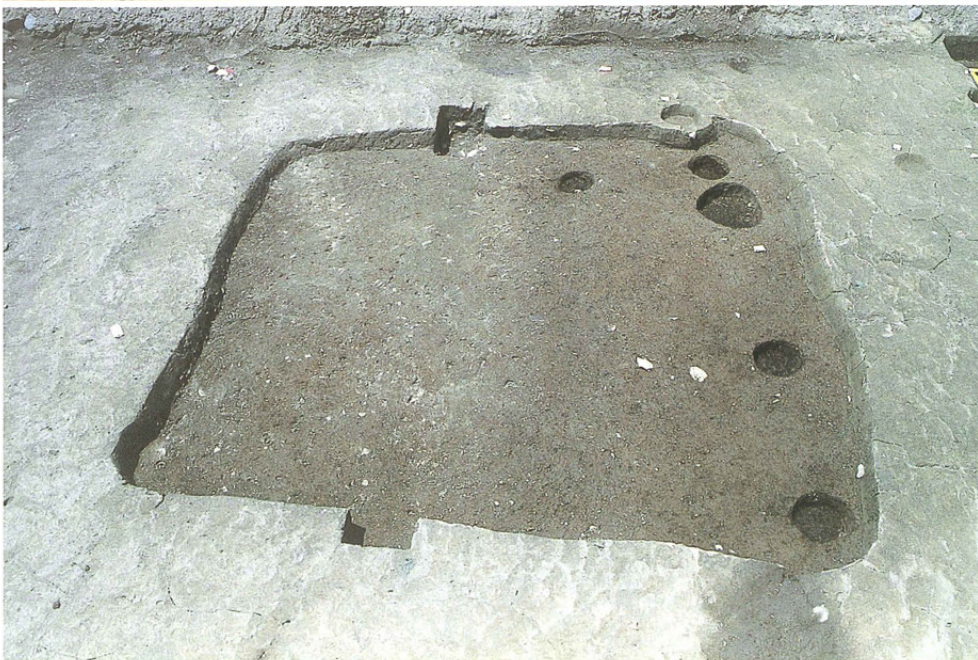


B区 土26完掘状況
(北から)





B区 土36出土状況
(南から)



C区 19住完掘状況
(東から)

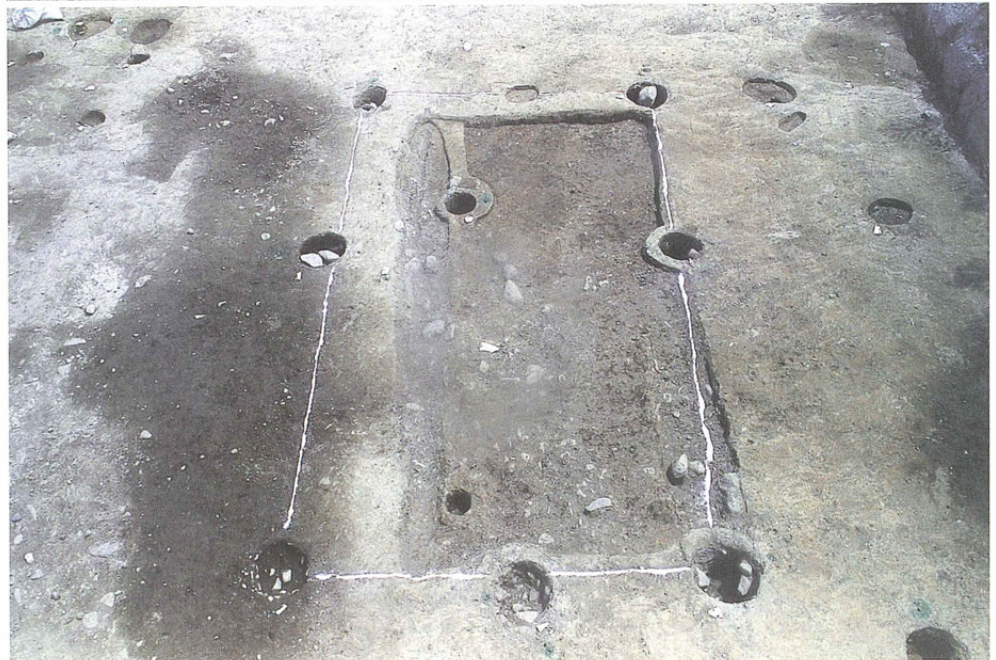


C区 26住出土状況
(東から)

C区 26住カマド出土状況
(東から)



C区 建4・竪9完掘状況
(西から)



C区 建5・竪7完掘状況
(西から)





C区 豎7出土状況
(南から)



C区 P826出土状況
(東から)



C区 P826遺物出土状況
(No.99・100他)

D区 建6出土状況
(西から)



D区 土134出土状況
(西から)



D区 土134完掘状況
(東から)





D区 土158完掘状況
(西から)



D区 土161出土状況
(東から)



D区 土162銭貨出土状況
(東から)

D区 土169完掘状況
(東から)



D区 土175完掘状況
(東から)



D区 P1042硯出土状況

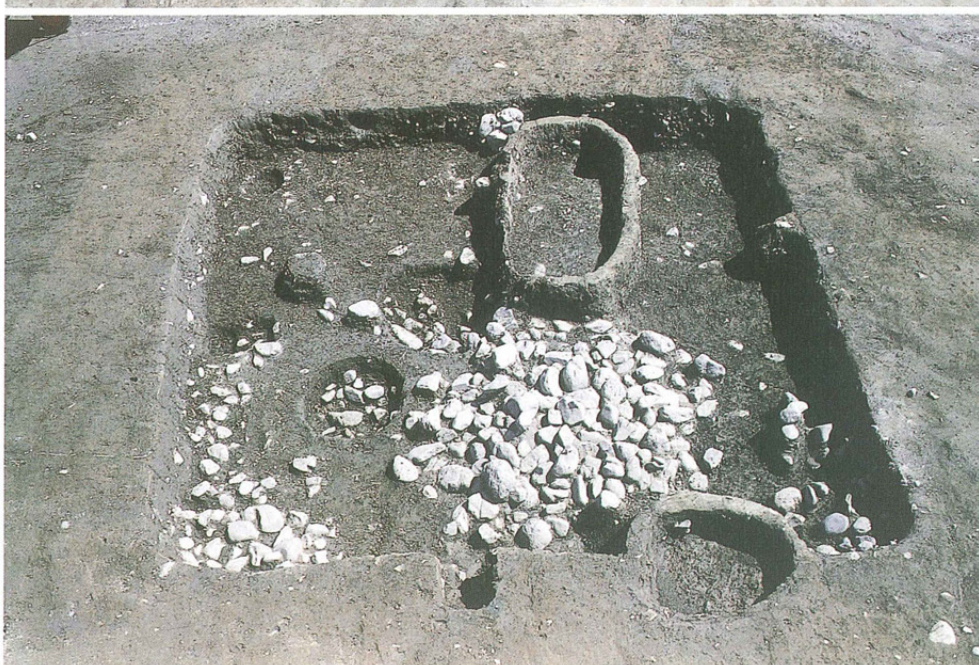




E区 45住出土状況
(東から)



E区 45住完掘状況
(東から)



E区 46住出土状況
(西から)

E区 48住出土状況
(北から)

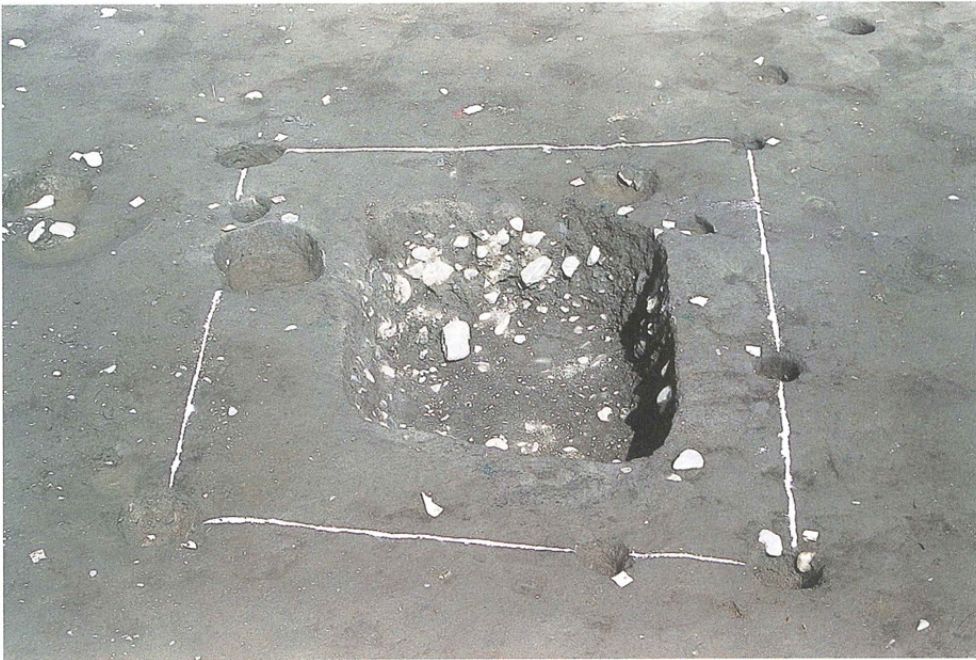


E区 建7出土状況
(南から)



E区 柱穴列2出土状況
(東から)





E区 建8出土状況
(南から)



E区 建9出土状況
(南から)



E区 柱穴列3・建8・建9
出土状況 (西から)